四国学院大学構内遺跡　発掘調査報告書

平成15（2003）年3月

善通寺市埋蔵文化財発掘調査団
善通寺市教育委員会

四国学院大学構内遺跡　発掘調査報告書

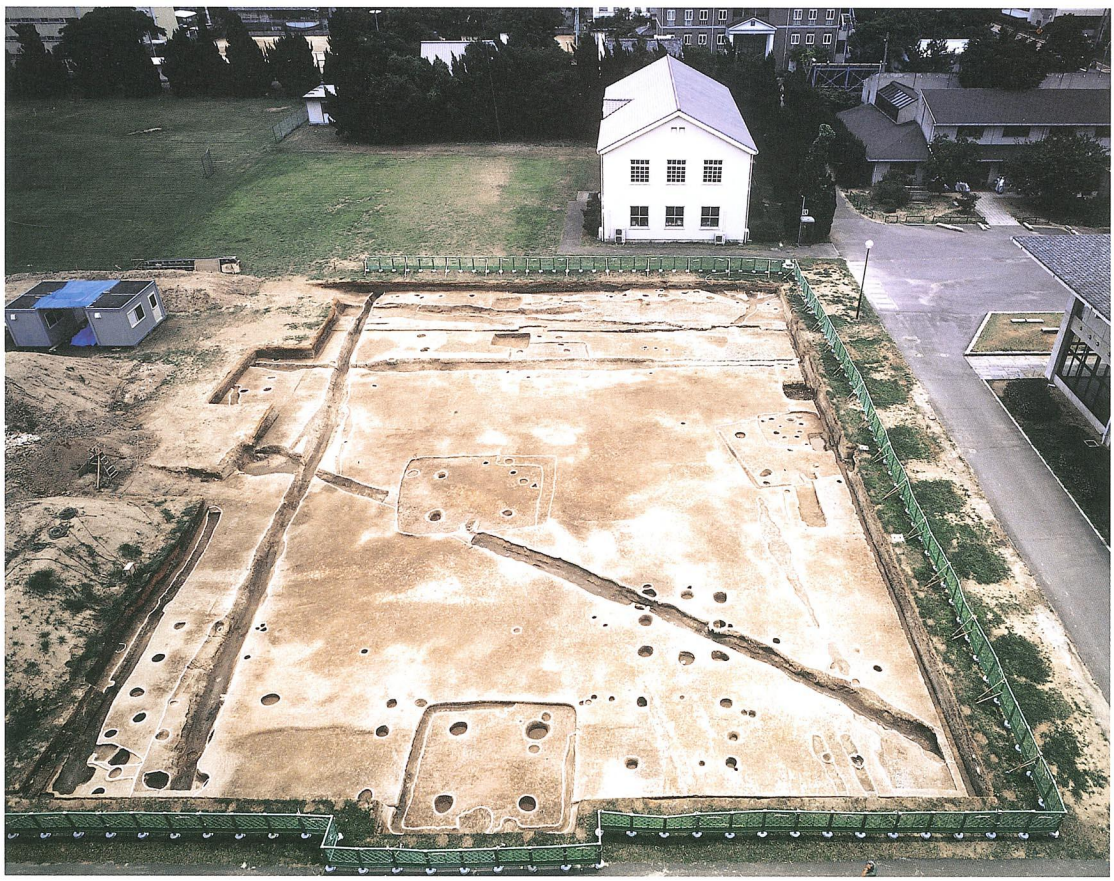
平成15（2003）年3月

善通寺市埋蔵文化財発掘調査団
善通寺市教育委員会

１．調査区遠景（北東から）
（左手奥に見えるのは大麻山）

巻頭図版２

２．調査区全景
（北東から）



３．調査区全景
（北から）

４．調査区全景
（南西から）

５．竪穴住居２
（南から）

６. 竪穴住居５
掘立柱建物１・３
（北東から）

７. 掘立柱建物１・３
（北から）

序　　文

善通寺市には数多くの埋蔵文化財が残されており、これらが発掘調査されるたびに新たな発見があり、そして新たな謎の解明が始まります。

今回調査しました善通寺市文京町所在「四国学院大学構内遺跡」におきましても、多くの成果をあげることが出来ました。

調査は学校法人四国学院から委託を受け、平成14年５月から埋蔵文化財の発掘調査を実施し７世紀から８世紀にかけての集落を検出しました。調査によって善通寺の前身である仲村廃寺との関わりなど性格の一端が明らかになり、新聞報道などでも大きく取り上げられました。

このたび整理事業が終了し、「四国学院大学構内遺跡発掘調査報告書」として刊行することになりました。本報告書が地域の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心をより一層深める一助となれば幸いです。

本発掘調査事業実施にあたり、多大なご配慮・ご協力を賜りました学校法人四国学院をはじめ関係者の方々、また報告書刊行にあたり種々ご指導を賜りました諸先生各位に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査に携われた調査関係者の皆様のご苦労にも心から感謝申し上げます。

平成15年３月31日

善通寺市埋蔵文化財発掘調査団　団　長
善 通 寺 市 教 育 委 員 会　教育長
勝　田　英　樹

例　言

1．本書は善通寺市埋蔵文化財発掘調査団・善通寺市教育委員会が平成14年度に実施した埋蔵文化財調査事業（四国学院大学構内遺跡）の発掘調査報告書である。調査組織および体制については、第１章に記す。

2．本事業は善通寺市文京町３丁目２番１号ほか（学校法人四国学院内）において平成14年５月７日から７月18日まで発掘調査を実施し、現地での調査中および調査終了後に遺跡の調査資料と出土遺物の整理作業を実施した。現地調査および図面・写真整理は善通寺市教育委員会文化振興室主事　海邉博史が、遺物整理は、同主事　渡邉淳子および海邉が行った。

3．本書の執筆は海邉、渡邉、田村隆明およびパリノサーヴェイ株式会社　辻　康男・高橋　敦・斉藤紀行・辻本裕也が行った。執筆分担は第１章、第２章、第３章第１～４節・第５節②・③、第５章第１節、第６章第１・３・４節を海邉が、第３章第５節①、第５章第２節、第６章第２節を渡邉が、第３章第５節①【タコ壺】を田村が、第４章を辻・高橋・斉藤・辻本が行った。編集は市教育委員会文化振興室　室長補佐　笹川龍一の指導および渡邉の協力の下、海邉が行った。各遺構の実測は、海邉および調査補助員が行った。遺構写真は個別遺構写真を海邉が撮影したほか、全景写真および遠景写真については写房楠華堂　内田真紀子氏に依頼した。遺物写真については、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部　井上直夫氏のご指導の下、海邉・渡邉が行った。また本書に掲載した遺構・遺物の整理・実測・製図は、海邉・渡邉および調査補助員が行ったほか海邉麻理子・加納裕之・中里伸明各氏のご協力を得た。なお、遺物実測図中、土器の断面は黒塗りが須恵質、白抜きが土師質、網掛けが瓦・瓦質土器・陶磁器を表す。

4．事業実施にかかる経費は、学校法人四国学院が全額負担した。

5．事業実施および本書の編集にあたっては、香川県教育委員会・片桐孝浩氏に、多大なご指導・ご教示を賜った。また、次の方々・機関よりご指導・ご援助ならびに資料提供、ご助言を得た。記して謝意を表します。
学校法人四国学院・香川県教育委員会文化行政課・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・関西大学文学部考古学研究室・四国学院大学考古学研究部・独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所・東　信男・安藤文良・大久保徹也・大嶋和則・岡　敦憲・小野秀幸・片桐孝浩・川畑　聰・菊間崇史・蔵本晋司・佐藤竜馬・白川雄一・辻本裕也・辻　康男・西口壽生・信里芳紀・乗松真也・丹羽佑一・蓮本和博・蜂谷浩美・花谷　浩・松田朝由・松本和彦・松本豊胤・森下英治・山元敏裕・吉田健一・吉田　綾・米田文孝・渡部明夫（順不同・敬称略）

調査補助員

（現地調査・整理作業）

片桐節子・西尾明美・名嘉真朝日・細川大介・松林　潤・土井辰宣・三浦雅裕・寒川　修・高松泰之・藤井大輔・田村隆明・田辺　茂・平井　初

（整理作業）

松本健太郎・中野　咲・首藤崇志・大久保順子・竹野裕二・長江真和・歌房芙美子・梅崎由梨・米田裕貴子・更家由美・西川英志・松並真帆・松村祐香・宮本　舞・森田浩史

発掘作業員

横田　保・大前義和・嶋田　勝・岩倉信市・森岡富明・渡辺武男・北堀昌之・森岡ミチ子・高木一江・柿平コト・杉峰ヨシ子・横田アキミ・香川クニ子

本 文 目 次

巻頭図版

序　文

例　言

第１章　調査の経緯 ---------- 1
第１節　調査に至る経過 ---------- 1
第２節　現地調査の経過 ---------- 2
第３節　整理作業の経過 ---------- 3
第４節　発掘調査および整理作業の体制 ---------- 3
善通寺市埋蔵文化財発掘調査団 ---------- 3
調査日誌（抄） ---------- 3

第２章　遺跡周辺の地理と歴史 ---------- 9

第３章　調査の成果 ---------- 14
第１節　遺跡の立地 ---------- 14
第２節　調査区 ---------- 14
第３節　基本層序 ---------- 15
第４節　遺構 ---------- 18
①　竪穴住居 ---------- 18
②　掘立柱建物 ---------- 29
③　柵列 ---------- 33
④　溝 ---------- 35
⑤　土坑 ---------- 45
⑥　不明遺構 ---------- 47
第５節　遺物 ---------- 48
①　土器・土製品 ---------- 48
竪穴住居出土遺物 ---------- 50
溝出土遺物 ---------- 52
土坑出土遺物 ---------- 59
ピット出土遺物 ---------- 60
不明遺構出土遺物 ---------- 60
②　石器 ---------- 61
③　瓦 ---------- 61

第４章　自然科学分析 ---------- 71
第１節　はじめに ---------- 71
第２節　遺跡周辺に分布する地質・地形 ---------- 71
第３節　層序 ---------- 73
第４節　試料 ---------- 73
①　炭化材 ---------- 73
②　動物遺存体 ---------- 75
③　フイゴ羽口の付着物 ---------- 75
第５節　分析方法 ---------- 75
①　樹種同定 ---------- 75
②　動物遺存体同定 ---------- 75
③　蛍光Ｘ線分析 ---------- 75
第６節　分析結果 ---------- 75
①　樹種同定 ---------- 76
②　動物遺存体同定 ---------- 79
③　蛍光Ｘ線分析 ---------- 79
第７節　考察 ---------- 79
①　遺跡形成過程について ---------- 79
②　炭化材の樹種同定結果から推定される周辺の古植生 ---------- 80
③　フイゴ羽口の付着物について ---------- 81
第４章　引用・参考文献 ---------- 82

第５章 まとめ ---------- 84
第１節　遺構について ---------- 84
第Ⅰ期：弥生時代後期 ---------- 84
第Ⅱ期：７世紀前半～中葉 ---------- 84
第Ⅲ期：７世紀後半～末 ---------- 87
第Ⅳ期：８世紀初頭～前半 ---------- 88
第Ⅴ期：近代 ---------- 89
小結 ---------- 89
第２節　遺物について ---------- 90
出土土器の年代 ---------- 90
土器の組成 ---------- 90
土器の供給元 ---------- 90
初現期の坏C身について ---------- 91
特筆すべき遺物 ---------- 91
遺物からみた遺跡の性格 ---------- 92

第６章 付章 ---------- 93
第１節　条里遺構と南海道 ---------- 93
はじめに ---------- 93
丸亀平野の律令期土地政策について研究略史 ---------- 93
調査成果の検討 ---------- 93
おわりに ---------- 96
第２節　讃岐における古代移動式竈について ---------- 97
はじめに ---------- 97
対象資料について ---------- 97
形態式分類 ---------- 97
消長と型式的変遷 ---------- 98
遺跡種別ごとの出土状況　－集落・墳墓・畿内と関係のある遺跡－ ---------- 103
ミニチュア製品の有無について ---------- 103
おわりに ---------- 104
第３節　四国学院大学隣接地（善通寺市民会館建設地）採集遺物について ---------- 104
はじめに ---------- 104
採集遺物について ---------- 104
おわりに ---------- 105
第４節　埋蔵文化財と新聞報道 ---------- 106
はじめに ---------- 106
記者発表の経緯と経過 ---------- 106
埋蔵文化財と新聞報道 ---------- 107
おわりに ---------- 108

図　　版 ---------- 115

付　　図

挿　図　目　次

第１図　調査区位置図 ---------- 1
第２図　確認調査（第１トレンチ） ---------- 2
第３図　確認調査（竪穴住居２竈部分検出状況） ---------- 2
第４図　調査前全景 ---------- 3
第５図　機械掘削風景 ---------- 4
第６図　人力掘削風景 ---------- 4
第７図　調査風景 ---------- 5
第８図　記者発表風景 ---------- 7
第９図　現地説明会風景 ---------- 8
第10図　埋め戻し風景 ---------- 8
第11図　善通寺遠景 ---------- 9
第12図　調査地と周辺の主要遺跡 ---------- 10
第13図　調査区南壁 ---------- 15
第14図　調査区西壁　土層断面図 ---------- 16
第15図　調査区南壁　土層断面図 ---------- 17
第16図　竪穴住居１　平面・断面図 ---------- 19
第17図　竪穴住居１　遺物出土状況図 ---------- 19
第18図　竪穴住居２　平面・断面図 ---------- 20
第19図　竪穴住居２　内柱穴断面図 ---------- 21
第20図　竪穴住居４　平面・断面図 ---------- 22
第21図　竪穴住居４　各遺構断面図 ---------- 23
第22図　竪穴住居４　調査風景 ---------- 23
第23図　竪穴住居５　平面・断面図 ---------- 24
第24図　竪穴住居６　平面・断面図 ---------- 26
第25図　竪穴住居８・９　平面・断面図 ---------- 28
第26図　竪穴住居８　遺物出土状況図 ---------- 29
第27図　竪穴住居９　遺物出土状況図 ---------- 29
第28図　掘立柱建物１・３　平面・断面図 ---------- 31
第29図　掘立柱建物２　平面・断面図 ---------- 32
第30図　掘立柱建物４　平面・断面図 ---------- 34
第31図　掘立柱建物５　平面・断面図 ---------- 34
第32図　柵列１　平面・断面図 ---------- 34
第33図　掘立柱建物６・柵列２　平面図 ---------- 36
第34図　溝１　平面・断面図 ---------- 38
第35図　溝２　平面・断面図 ---------- 38
第36図　溝１　遺物出土状況図① ---------- 39
第37図　溝１　遺物出土状況図② ---------- 39

第38図　溝１・２　交差地点　遺物出土状況図 40
第39図　溝３　平面・断面図 41
第40図　溝４・５・６　平面・断面図 41
第41図　溝８・11　平面・断面図 41
第42図　溝７・９　平面・断面図 44
第43図　溝12・14・15・16・17・19　平面・断面図 44
第44図　土坑２・３・４　平面・断面図 46
第45図　不明遺構１・２　平面・断面図 46
第46図　土坑４　埋葬想定風景 47
第47図　主要器種の名称と坏形式分類 48
第48図　竪穴住居出土遺物実測図 51
第49図　溝１出土遺物実測図① 53
第50図　溝１出土遺物実測図② 55
第51図　溝２出土遺物実測図 55
第52図　溝３～19出土遺物実測図 57
第53図　土坑出土遺物実測図 59
第54図　ピット出土遺物実測図 60
第55図　不明遺構出土遺物実測図 62
第56図　石器・瓦実測図 62
第57図　地形分類図 72
第58図　調査地の層序 74
第59図　柱状図位置図 74
第60図　緑灰色溶融部の定性スペクトル 78
第61図　緑灰色溶融部と赤褐色素地部のスペクトル対比 78
第62図　深掘トレンチ調査風景 79
第63図　第Ⅱ期遺構図 86
第64図　第Ⅲ期遺構図 87
第65図　第Ⅳ期遺構図 88
第66図　台付埦と初源期の坏Ｃ形式 91
第67図　調査区周辺条理地割図① 94
第68図　調査区周辺条理地割図② 95
第69図　移動式竈出土遺跡位置図 97
第70図　県内移動式竈実測図① 101
第71図　県内移動式竈実測図② 102
第72図　市民会館建設地採集遺物 105
第73図　発掘調査の成果を報道する各新聞記事 109

表　目　次

第１表　遺物観察表① ---------- 63
第２表　遺物観察表② ---------- 64
第３表　遺物観察表③ ---------- 65
第４表　遺物観察表④ ---------- 66
第５表　遺物観察表⑤ ---------- 67
第６表　遺物観察表⑥ ---------- 68
第７表　遺物観察表⑦ ---------- 69
第８表　遺物観察表⑧ ---------- 70
第９表　測定条件 ---------- 75
第10表　樹種同定結果 ---------- 76
第11表　緑灰色溶融部、赤褐色素地部（A、Bスペクトル）の検出元素と積分強度（cps） ---- 77
第12表　各遺構時期別消長表 ---------- 85
第13表　移動式竈出土一覧① ---------- 99
第14表　移動式竈出土一覧② ---------- 100

図　版　目　次

巻頭図版１　調査区遠景（北東から）
巻頭図版２－１　調査区全景（北東から）
巻頭図版２－２　調査区全景（北から）
巻頭図版３－１　調査区全景（南西から）
巻頭図版３－２　竪穴住居２（南から）
巻頭図版４－１　竪穴住居５、掘立柱建物１・３（北東から）
巻頭図版４－２　掘立柱建物１・３（北から）

図版１－１　竪穴住居１　全景（南から） ---------- 116
図版１－２　竪穴住居１　北西側柱穴（ピット110・南から） ---------- 116
図版１－３　竪穴住居１　北東側柱穴（ピット107・南から） ---------- 116
図版１－４　竪穴住居１　南西側柱穴（ピット109・南から） ---------- 116
図版１－５　竪穴住居１　南東側柱穴（ピット104・南から） ---------- 116
図版２－１　竪穴住居１　全景（南西から） ---------- 117
図版２－２　竪穴住居１　検出状況①（南から） ---------- 117
図版２－３　竪穴住居１　検出状況②（南から） ---------- 117
図版２－４　竪穴住居１　遺物出土状況（南から） ---------- 117
図版２－５　竪穴住居１　北側壁溝断面（東から） ---------- 117
図版３－１　竪穴住居２　全景（南から） ---------- 118
図版３－２　竪穴住居２　北西側柱穴（東から） ---------- 118

図版３－３　竪穴住居２　北東側柱穴（南から）----------118
図版３－４　竪穴住居２　南西側柱穴（ピット71・南から）----------118
図版３－５　竪穴住居２　南東側柱穴（南から）----------118
図版４－１　竪穴住居２　検出状況（南から）----------119
図版４－２　竪穴住居２　全景（南から）----------119
図版４－３　竪穴住居２　竈内遺物出土状況（南から）----------119
図版４－４　竪穴住居２　竈完掘状況（南から）----------119
図版４－５　竪穴住居２　床面下層断面（東から）----------119
図版５－１　竪穴住居４　全景（南から）----------120
図版５－２　竪穴住居４　北西側柱穴（南から）----------120
図版５－３　竪穴住居４　北東側柱穴（南から）----------120
図版５－４　竪穴住居４　南西側柱穴（ピット73・南から）----------120
図版５－５　竪穴住居４　南東側柱穴（南から）----------120
図版６－１　竪穴住居４　検出状況（南から）----------121
図版６－２　竪穴住居４　竈完掘状況①（南から）----------121
図版６－３　竪穴住居４　竈完掘状況②（西から）----------121
図版６－４　竪穴住居４　竈内焼土断面（西から）----------121
図版６－５　竪穴住居４　竈下層断面（東から）----------121
図版６－６　竪穴住居４　竈東側焼土断面（西から）----------121
図版６－７　竪穴住居４　溝１断面（東から）----------121
図版７－１　竪穴住居５　全景（南から）----------122
図版７－２　竪穴住居５　北西側柱穴（南から）----------122
図版７－３　竪穴住居５　床面遺物出土状況（南から）----------122
図版７－４　竪穴住居５　南西側柱穴（南から）----------122
図版７－５　竪穴住居５　南東側柱穴（南から）----------122
図版８－１　竪穴住居５　検出状況（南から）----------123
図版８－２　竪穴住居５　北西部壁溝断面（西から）----------123
図版８－３　竪穴住居５　北西畦南側壁溝断面（東から）----------123
図版８－４　竪穴住居５　竈内焼土検出状況（南から）----------123
図版８－５　竪穴住居５　竈完掘状況（南から）----------123
図版８－６　竪穴住居５　焼土断面（西から）----------123
図版９－１　竪穴住居６　全景（南から）----------124
図版９－２　竪穴住居６　北側柱穴（ピット93・東から）----------124
図版９－３　竪穴住居６　南側柱穴（ピット72・南から）----------124
図版９－４　竪穴住居６　検出状況（南から）----------124
図版10－１　竪穴住居８　全景（北から）----------125
図版10－２　竪穴住居８　畦断面（東から）----------125
図版10－３　竪穴住居８　遺物出土状況（南から）----------125
図版10－４　竪穴住居９　全景（北から）----------125

図版10－５　竪穴住居９　遺物出土状況（東から）---125
図版10－６　竪穴住居８・９　重複関係（北から）---125
図版11－１　掘立柱建物１・３　全景（北から）---126
図版11－２　掘立柱建物１・３　検出状況（南から）---126
図版11－３　掘立柱建物１　南西側柱穴（ピット18・西から）---126
図版11－４　掘立柱建物１　南東側柱穴（ピット13・東から）---126
図版11－５　掘立柱建物１　北東側柱穴（ピット43・東から）---126
図版11－６　掘立柱建物１　北西側柱穴（ピット５・西から）---126
図版12－１　掘立柱建物３　南東側柱穴（ピット38・東から）---127
図版12－２　掘立柱建物３　南側柱穴（ピット35・南から）---127
図版12－３　掘立柱建物３　南西側柱穴（ピット23・西から）---127
図版12－４　掘立柱建物３　東側柱穴（ピット12・東から）---127
図版12－５　掘立柱建物３　西側柱穴（ピット25・西から）---127
図版12－６　掘立柱建物３　北東側柱穴（ピット41・東から）---127
図版12－７　掘立柱建物３　北側柱穴（ピット19・北から）---127
図版12－８　掘立柱建物３　北西側柱穴（ピット20・西から）---127
図版13－１　掘立柱建物２　全景①（北東から）---128
図版13－２　掘立柱建物２　全景②（北から）---128
図版13－３　掘立柱建物２　全景③（南から）---128
図版14－１　掘立柱建物２　柱穴７（ピット50・東から）---129
図版14－２　掘立柱建物２　柱穴５（ピット48・東から）---129
図版14－３　掘立柱建物２　柱穴４（ピット46・東から）---129
図版14－４　掘立柱建物２　柱穴２（ピット54・北から）---129
図版14－５　掘立柱建物２　柱穴９（ピット33・西から）---129
図版14－６　掘立柱建物２　柱穴10（ピット31・西から）---129
図版14－７　掘立柱建物２　柱穴12（ピット53・東から）---129
図版14－８　掘立柱建物２　柱穴１（ピット52・東から）---129
図版15－１　掘立柱建物４　全景（南から）---130
図版15－２　掘立柱建物４　柱穴６（ピット61・西から）---130
図版15－３　掘立柱建物４　柱穴１（ピット62・西から）---130
図版15－４　掘立柱建物４　柱穴４（ピット59・北から）---130
図版15－５　掘立柱建物４　柱穴３（ピット60・西から）---130
図版16－１　掘立柱建物５　全景（北西から）---131
図版16－２　掘立柱建物５　柱穴２（ピット84・西から）---131
図版16－３　掘立柱建物５　柱穴６（ピット81・北から）---131
図版16－４　掘立柱建物５　柱穴８（ピット82・西から）---131
図版16－５　掘立柱建物５　柱穴１（ピット83・西から）---131
図版17－１　柵列１　全景（北から）---132
図版17－２　柵列１　柱穴１（ピット66・南から）---132

図版17－３　柵列１　柱穴２（ピット67・南から）----------132
図版17－４　柵列１　柱穴３（ピット69・南から）----------132
図版17－５　柵列１　柱穴４（ピット118・南から）----------132
図版18－１　溝１　全景（南から）----------133
図版18－２　溝１　近景（東から）----------133
図版18－３　溝１　畦２（東から）----------133
図版18－４　溝１　畦４（東から）----------133
図版18－５　溝１　遺物出土状況（第36図・南から）----------133
図版18－６　溝１　溝１・２交点遺物出土状況（第37図・東から）----------133
図版18－７　溝１　移動式竈出土状況（第37図・南から）----------133
図版19－１　溝２　全景（北から）----------134
図版19－２　溝２　北側部分（南から・右隣は溝８）----------134
図版19－３　溝２　畦１（北から）----------134
図版19－４　溝２　畦６（北から）----------134
図版19－５　溝２　畦３（南から）----------134
図版19－６　溝２　畦４（南から）----------134
図版19－７　溝２　遺物出土状況----------134
図版20－１　溝３　全景（北から）----------135
図版20－２　溝３　溝１・３交点（北東から）----------135
図版20－３　溝３　近景（南東から）----------135
図版20－４　溝３　畦１（南東から）----------135
図版20－５　溝３　畦２（南東から）----------135
図版21－１　溝４・５・６　全景（北から）----------136
図版21－２　溝６　検出状況（北から）----------136
図版21－３　溝４　畦断面（南から）----------136
図版21－４　溝５　畦断面（南から）----------136
図版22－１　溝７・９　全景（北東から）----------137
図版22－２　溝８・11　全景（北から）----------137
図版22－３　溝７　畦１（南から）----------137
図版22－４　溝８　畦２（南から）----------137
図版22－５　溝９　南畦（南から）----------137
図版22－６　溝９　北畦（南から）----------137
図版22－７　溝11　断面（南から）----------137
図版23－１　溝12・14・15・18・19　全景（北から）----------138
図版23－２　溝12　遺物出土状況（南東から）----------138
図版23－３　溝14　畦断面（東から）----------138
図版23－４　溝15　畦断面（西から）----------138
図版23－５　溝18　畦断面（南から）----------138
図版23－６　溝19　畦断面（西から）----------138

図版24－１　土坑２　畦断面（西から）----------139
図版24－２　土坑２　完掘状況（西から）----------139
図版24－３　土坑３　畦断面（東から）----------139
図版24－４　土坑４　完掘状況（南から）----------139
図版25－１　ピット27（西から）----------140
図版25－２　ピット46（西から）----------140
図版25－３　ピット68（南から）----------140
図版25－４　ピット86（南から）----------140
図版25－５　ピット100（西から）----------140
図版25－６　ピット122（南から）----------140
図版25－７　ピット123（上）・124（右）・125（左）（西から）----------140
図版25－８　ピット140（南から）----------140
図版25－９　ピット135（南から）----------140
図版26－１　不明遺構１　全景（北から）----------141
図版26－２　不明遺構１　全景（西から）----------141
図版26－３　不明遺構１　畦２（東から）----------141
図版26－４　不明遺構２　断面（北から）----------141
図版26－５　不明遺構２　検出状況（東から）----------141
図版27　竪穴住居出土遺物----------144
図版28　溝１出土遺物①----------145
図版29　溝１出土遺物②----------146
図版30　溝１出土遺物③----------147
図版31　溝１出土遺物④----------148
図版32　溝２出土遺物①----------149
図版33　溝２出土遺物②・溝12出土遺物----------150
図版34　溝13・16、土坑２、不明遺構出土遺物----------151
図版35　瓦・石器類----------152

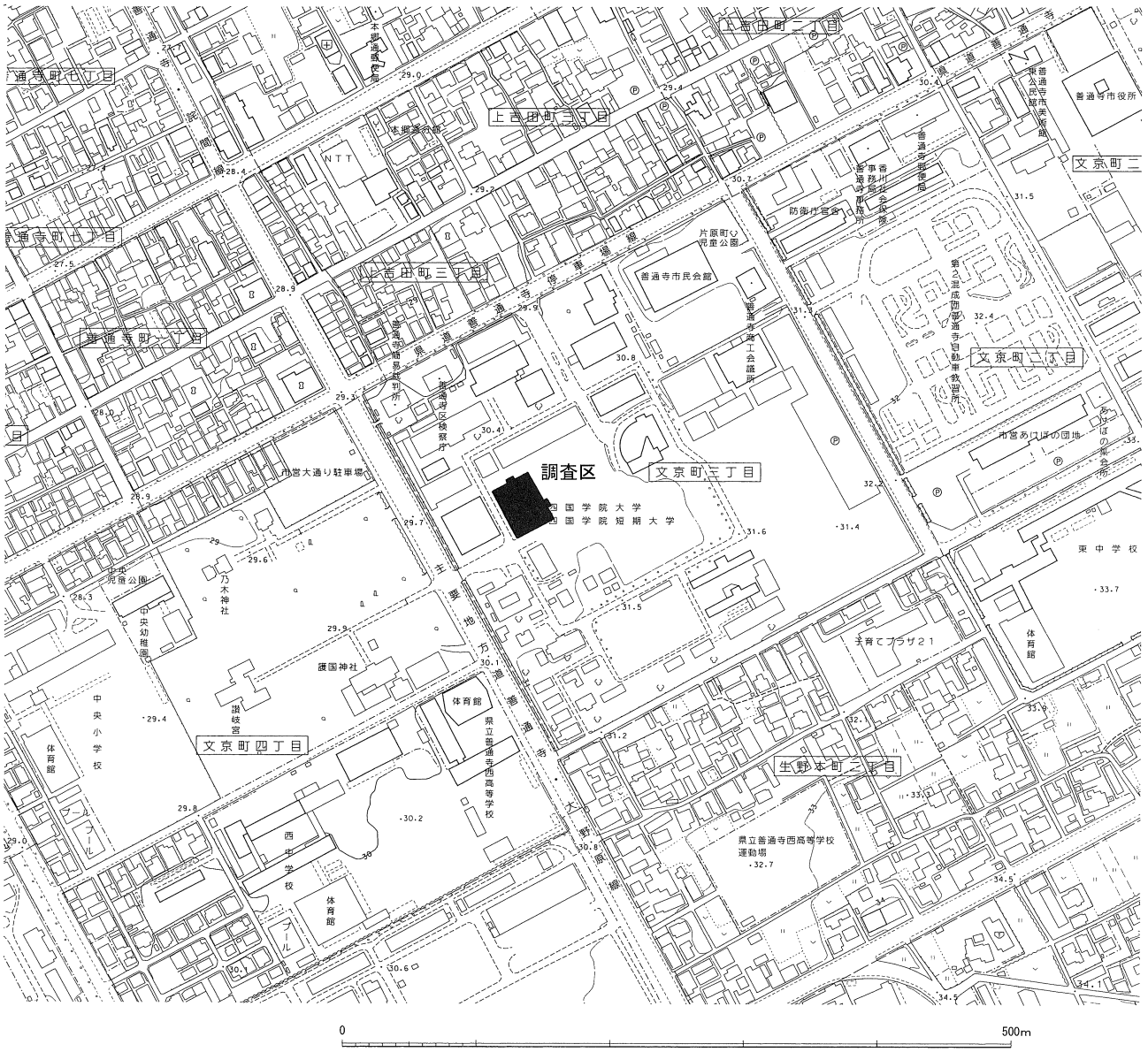
付図　四国学院大学構内遺跡調査区平面図

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経過

四国学院大学構内遺跡の調査は、平成14年５月７日から７月18日までの間、善通寺市教育委員会内に組織された善通寺市埋蔵文化財発掘調査団が実施した。

本節では、この調査に至る経緯の概略を記す。平成13年11月に学校法人四国学院から善通寺市教育委員会文化振興室宛に図書館建設計画に先立ち、遺跡の有無についての照会があった。これを受けて市教育委員会は同年12月に四国学院担当者と協議を行い、建設予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地に該当すること、遺構の密度・状況を確認するためには分布調査では不可能であり、掘削による確認調査が必要である旨を通知した。協議後の平成14年２月18日から23日に、市教育委員会担当者によって確認調査を行った。調査面積は71.0㎡である。調査は平成13年度国庫補助事業として実施した。その結果、竪穴住居、溝、ピットなどの遺構を検出したため、工事に先行して



第１図　調査区位置図（1：5,000）

建設予定地全面の発掘調査が必要である旨を指導・通知した。このような経緯から平成14年３月以降、工事発注時期との関係から調査について断続的に協議が行われた。その結果、以下の内容で合意した。

・調査は市教育委員会内で組織された善通寺市埋蔵文化財発掘調査団が担当すること。
・これに伴う業務委託契約は善通寺市教育委員会教育長と学校法人四国学院理事長の間で締結すること。
・調査および整理作業は、平成14年度に実施すること。

この合意を受けて、平成14年４月30日付けで両者による「四国学院大学構内遺跡発掘調査業務委託契約書」を締結した。

第２節　現地調査の経過

四国学院大学構内遺跡は、善通寺市文京町３丁目２番１号ほかに所在する。

調査の方法としては調査区北西角に敷設した任意の基準杭を基点に、東西南北方向の10ｍグリッドを設定した。なお調査区および周辺には国土座標杭を敷設したが、敷設時期が調査中であったこともあり、遺構平面図作成のみに使用した。実際の遺物取り上げなどは、調査区周辺に巡らされた進入防止フェンス（１ｍ幅）に南北・東西それぞれに番号を付し使用した（付図の調査区周辺部分参照）。

第２図　確認調査（第１トレンチ）

第３図　確認調査（竪穴住居２竈部分検出状況）

本遺跡の発掘調査を調査日誌（抄）を元に概略すると、以下のようになる。

発掘調査は平成14年５月７日から表土掘削を調査区南側から開始した。表土掘削の結果、近世床土直下から竪穴住居をはじめ多数の遺構を検出した。表土掘削が完了した箇所から順に人力による掘削を開始した。溝からは多数の遺物が出土したため、当初の調査予定から大幅に遅れる結果となった。各遺構の畦は記録作成次第、掘削を進めていった。ほぼ遺構を完掘したグリッドから順次、調査区全体の平面図作成を人力により行った。また調査区全体をほぼ完掘した７月３・４日に業者による全景写真撮影を実施した。また７月５日には、記者発表を行った。翌６日には現地説明会を実施した。遺構の調査が完了した７月13日には、任意の箇所にて深掘りトレンチを掘削し、遺構面下の堆積状況の検討を行った。併せて掘削深度がある部分についてはコンクリートを流し込んだ後、７月18日埋戻しを行った。同日、設置していたプレハブ・機材などを撤収し、現地での全ての作業が終了した。

第３節　整理作業の経過

整理作業は、調査中も実施していたが、調査終了後から本格的に開始した。まず調査員が遺構写真の整理から行った。その後、遺構図面の確認作業を実施し、平成14年７月上旬にほぼ終了した。また、調査補助員は調査中および調査終了後に遺物の洗浄作業を実施し、同年６月末に終了した。一部作業を並行しながら注記・接合検討・石膏入れを実施し、同年10月末までに終了した。調査員による実測遺物抽出後、遺物実測を９月から実施し、平成15年２月上旬に終了した。製図作業は遺構図面を優先に平成14年９月から順次実施し、平成15年２月末に終了した。報告書執筆は調査終了後、断続的に実施し、平成15年３月中旬に完了した。

第４節　発掘調査および整理作業の体制

平成14年度の発掘調査および整理作業は、香川県教育委員会文化行政課の指導の下、以下の体制で実施した。

善通寺市埋蔵文化財発掘調査団

総　　括
　団　　長（善通寺市教育委員会教育長）　勝田　英樹
総括補佐
　副 団 長（同教育次長）　白玖　正彦
総　　務
　事務局長（同文化振興室　室長）　細川　愼一
　監　　査（同庶務課　課長）　安藤　克己

調査主任（同文化振興室　室長補佐・学芸員）　笹川　龍一
調 査 員（同文化振興室　主事・学芸員）　海邉　博史【調査・整理担当】
　　（同文化振興室　主事）　蓮本　尚子【庶務担当】平成14年６月まで
　　（同文化振興室　主事・学芸員）　渡邉　淳子【整理・庶務担当】平成14年７月から

調査日誌（抄）

５月７日（火）　天候：晴時々曇
　プレハブを設置し器材の搬入を行う。調査区を設定し、重機が掘削する範囲を確定する。
５月８日（水）　天候：晴時々曇
　機械掘削を調査区北西隅から行う。現地表面から約0.8m下層に遺構面が広がっている。調査区の周囲に安全柵を設置する。
５月９日（木）　天候：曇
　調査区西および南端に沿うようにＬ字状に

第４図　調査前全景

機械掘削を行う。掘削が終了した箇所から壁面の粗削りと側溝の掘削を行う。安全柵の補強を行う。

５月10日（金）　天候：雨

雨天のため現地での作業を中止する。

５月13日（月）　天候：晴時々曇

調査区南側の機械掘削を行う。掘削が終了した箇所から壁面の粗削りと側溝の掘削を行う。遺構面精査を行う。

５月14日（火）　天候：晴のち曇

調査区南側および北西側の機械掘削を行う。機械掘削が終了した箇所から壁面の粗削りと側溝の掘削を行う。遺構面精査を行う。調査区南側にて南北に延びる溝を検出する。調査区を横断するので東西は30m以上となる。また調査区南東側でこの溝に直交する溝を検出する。

５月15日（水）　天候：雨時々曇

雨天のため現地での作業を中止する。

５月16日（木）　天候：雨のち曇

調査区南側、中央、北西側の機械掘削を行う。機械掘削が終了した箇所から壁面の粗削りと側溝の掘削を行う。

５月17日（金）　天候：雨

雨天のため現地での作業を中止する。

５月18日（土）　天候：曇時々晴

調査区中央、北～北東側の機械掘削を行う。機械掘削が終了した箇所から壁面の粗削りを行う。

５月20日（月）　天候：晴

調査区中央から東側の機械掘削を行う。調査区東側壁面の粗削りを行う。遺構面精査を行う。調査区内に10mおきに杭を打設する。杭と杭の間には５ｍごとに釘を落す。調査区南西隅に設置した仮ベンチマークを基準に調査区西壁の土層断面図を作成する。

５月21日（火）　天候：晴

調査区北西側より遺構掘削を行う。溝３・４・５遺構上面精査、写真撮影を行う。その後、各遺構の埋土を掘削する。溝４・５の畦を写真撮影、土層断面図作成を行う。ピット１～４検出状況の写真撮影を行う。

第５図　機械掘削風景

第６図　人力掘削風景

５月22日（水）　天候：曇

調査区北側の遺構掘削を行う。現時点で調査区外にまで延びる竪穴住居５を全面検出するため、調査区北側を一部拡張する。溝３を引き続き掘削する。溝３に設定した２箇所の畦の写真撮影を行う。また溝３畦１の土層断面図を作成する。溝６の土層断面図を作成する。ピット５～41の検出状況写真撮影を行う。

５月23日（木）　天候：晴

調査区北側の遺構掘削を行う。竪穴住居５を全面検出するため、調査区北側を一部拡張する。溝３を引き続き掘削する。掘立柱建物１を清掃し検出状況の写真撮影を行う。溝３畦２の土層断面図を作成する。溝２を北側より掘削する。

５月24日（金）　天候：晴

調査区北側の遺構掘削を行う。竪穴住居５を全面検出するため、調査区北側を一部拡張する。溝３を引き続き掘削する。掘立柱建物１を構成するピットの土層断面図を作成する。溝２を北側より掘削する。

５月27日（月）　天候：晴

竪穴住居５に畦を設定し、遺構埋土を掘削する。調査区北側のピットの土層断面図を作成する。溝２・８・10において畦を残して埋土を除去する。

５月28日（火）　天候：晴

竪穴住居５の遺構埋土を掘削する。調査区北側のピットの土層断面図を作成する。溝２・８・10において畦を残して埋土を除去する。

５月29日（水）　天候：晴時々曇

竪穴住居５の遺構埋土を掘削する。埋土より須恵器などの遺物が出土する。調査区北側のピットの土層断面図を作成する。溝２・８・10を掘削する。

５月30日（木）　天候：晴

竪穴住居５の遺構埋土を掘削する。北側より焼土を検出する。竈の可能性がある。調査区北東から北西側で半裁したピットの土層断面の注記を行う。溝２・８・10を掘削する。溝２・８が交差する部分より須恵器甕の口縁部が出土する。精査し写真撮影を行う。その後、出土状況の平面図を作成した後に取り上げる。溝２からは他にも遺物が多く出土する。溝８・10の土層断面図を作成する。

５月31日（金）　天候：晴のち曇

調査区北東から北西側のピットの土層断面図を作成する。竪穴住居５の遺構埋土を掘削する。住居内南西部より床面を検出する。柱穴・壁溝を検出し写真撮影を行った後、柱穴を半裁する。壁溝埋土を掘削する。溝１・溝８を掘削する。溝２・８・10土層断面図の注記を行う。

６月１日（土）　天候：晴

竪穴住居５は床面および壁溝をほぼ完掘する。埋土内に設定していた畦を清掃・写真撮影を行い、その後実測を行う。溝１・２・８を掘削する。溝２・８・10土層断面図の注記を行う。

６月３日（月）　天候：晴

竪穴住居５の床面および壁溝をほぼ完掘する。溝１・２を掘削する。溝１埋土より土器が多量に出土し、写真撮影を行う。調査区北東側のピットの注記を行う。竪穴住居２の精査を行い、検出状況の写真撮影を行う。

６月４日（火）　天候：晴

竪穴住居５焼土検出状況の写真撮影を行う。竪穴住居１上面を精査し、検出状況の写真撮影を行う。竪穴住居２埋土を掘削する。調査区を北西部分に拡張し、住居全体を検出する。溝１を引き続き掘削する。遺構内南側から出土した遺物を精査し写真撮影を行う。掘立柱建物２を構成する各ピットの再撮影を行う。

６月５日（水）　天候：晴

竪穴住居２埋土の掘削を行う。掘立柱建物１を構成するピットの写真撮影を行う。溝３・６の畦を除去する。調査区北側のピットを完掘する。溝１を掘削する。溝１畦１を精査し写真撮影を行う。

６月６日（木）　天候：晴

竪穴住居２の掘削を行う。竪穴住居４の上

第７図　調査風景

面を精査し、検出状況の写真撮影を行う。その後、畦を設定し掘削を開始する。溝１を掘削する。

６月７日（金）　天候：晴のち曇

竪穴住居２・４掘削を行う。床面直上より焼土を確認する。溝１を掘削する。埋土上層より遺物が多数出土する。

６月８日（土）　天候：晴

溝１を掘削する。遺物出土状況の写真撮影を行う。重機によって調査区南側（南北６ｍ、東西32ｍ）および調査区南東側（南北６ｍ、東西４ｍ）を拡張する。

６月10日（月）　天候：曇

溝１を引き続き掘削する。埋土上層より遺物が多数出土する。竪穴住居２・４の掘削を行う。

６月11日（火）　天候：曇のち雨

溝１を引き続き掘削する。竪穴住居２・４の掘削を行う。溝８畦２を清掃し写真撮影を行う。断面実測・注記を行い、畦を除去する。雨天のため午前中で現地作業を中止する。補助員は午後より総合会館にて整理作業を行う。

６月12日（水）　天候：曇時々晴

竪穴住居２・４埋土掘削を行う。竪穴住居２を精査し写真撮影を行う。竪穴住居４床面を検出する。夕方、竪穴住居４の主軸・中軸畦の写真撮影を行う。溝１を引き続き掘削する。溝１畦１・埋土内出土遺物周辺を精査し、写真撮影を行う。溝１畦１の実測・注記後、畦を除去する。

６月13日（木）　天候：曇のち晴

竪穴住居２・４内柱穴・ピットの検出状況の写真撮影を行い半裁する。写真撮影を行った後、実測・注記を行う。竪穴住居５焼土坑検出状況の写真撮影を行い、その後半裁する。写真撮影を行った後、実測を行う。溝７の写真撮影を行う。

６月14日（金）　天候：晴時々曇

竪穴住居２・４の完掘状況写真撮影を行う。竪穴住居６を検出する。竪穴住居６は竪穴住居２に重複している。柱穴の重複関係から竪穴住居２が後出していたことが判明。結果的に２基の住居の掘削順序が誤っていたことになる。

６月15日（土）　天候：晴

竪穴住居６上面を精査し、検出状況の写真撮影を行う。畦を設定し埋土の掘削を行う。午後には床面を検出する。畦の写真撮影を行い、直ちに土層断面図を作成する。夕方に完成し注記後、畦を除去する。併せて住居内の柱穴の検出状況を撮影する。そして半裁し写真撮影を行う。

６月17日（月）　天候：曇

竪穴住居５完掘状況の写真撮影を行う。竪穴住居４焼土坑断面の写真撮影を行い、その後実測図を作成する。注記を行い畦を除去する。夕方、竪穴住居４完掘状況写真撮影を行う。

６月18日（火）　天候：曇一時雨

調査区東側拡張区の溝・ピットの検出状況の写真撮影を行う。そして埋土を掘削し溝の畦・ピットの断面の写真撮影を行う。断面図を作成・注記し畦を除去する。溝１畦の写真撮影を行う。畦の断面図を作成する。

６月19日（水）　天候：曇

竪穴住居６内柱穴・ピット検出状況の写真撮影を行う。半裁して断面の写真撮影を行う。断面図を作成・注記して遺構を完掘する。不明遺構１畦１の写真撮影を行う。実測図を作成し注記した後、畦を除去する。竪穴住居１畦の写真撮影を行う。畦の断面図を作成する。

６月20日（木）　天候：雨のち曇

雨天のため、補助員は総合会館にて終日整理作業を行う。作業員は調査区内の排水処理を行って午前中で作業を中止する。

６月21日（金）　天候：曇

調査区南西側のピット群の検出から完掘まで一連の作業を行う。不明遺構１畦２の写真

撮影・実測図作成・畦の除去を行う。溝１畦４・５、溝11・12畦の写真撮影・実測図作成・除去を行う。竪穴住居６内柱穴・ピットの断面写真を撮影する。

６月24日（月）　天候：雨のち曇

雨天のため、補助員は総合会館にて終日整理作業を行う。作業員は調査区内の排水処理を行って午前中で作業を中止する。

６月25日（火）　天候：雨

雨天のため、現地での作業を中止する。補助員は総合会館にて終日整理作業を行う。

６月26日（水）　天候：晴

不明遺構１埋土を除去する。調査区南西部分の各遺構を実測・注記し畦を除去する。調査区南東端部分のピットの写真撮影・断面図作成を行う。

６月27日（木）　天候：晴のち曇

竪穴住居１・６内の柱穴・ピットを完掘する。住居および周辺の精査を行い、完掘状況の写真撮影を行う。溝２南側を掘削する。竪穴住居８・９埋土を掘削する。床面がほぼ検出される。不明遺構１を掘削する。調査区半ばより東側でようやく北側の肩が見えてくる。このことから不明遺構１が溝である可能性がでてきた。

６月28日（金）　天候：曇

竪穴住居１完掘状況の写真撮影を行う。竪穴住居８・９畦の写真撮影を行う。畦を実測・注記し除去する。竪穴住居８・９内遺物出土状況の写真撮影を行い、平面図を作成する。夕方、竪穴住居８・９完掘状況の写真撮影を行う。

７月１日（月）　天候：曇のち雨

不明遺構１の掘削を行う。下層より溝16を検出する。畦を設定し掘削する。溝16畦を写真撮影し、実測を行う。溝16内出土遺物の写真撮影を行った後、実測図を作成する。全景写真撮影のため調査区の北西端より精査を行う。

７月２日（火）　天候：曇

ピット64・117・121・122・123・125・126・127・128・129・130・131・132・135清掃、検出状況の写真撮影を行う。その後、半裁し断面の写真撮影を行い、断面図を作成する。溝18畦の写真撮影を行った後、断面図を作成する。断面図作成後、完掘する。全景写真撮影のため調査区の北西端より精査を行う。

７月３日（水）　天候：曇

午前中、全景写真準備のため調査区全域を精査する。現場周辺の清掃も併行して行う。午後、撮影地点の打ち合わせを行う。午後３時より調査区南側図書館屋上より写真撮影を行う。

７月４日（木）　天候：曇

調査区全景写真撮影を行う。先日撮影した場所からも再度撮影する。調査区北側から２箇所、南側から３箇所全景写真の撮影を行う。また竪穴住居・掘立柱建物も個別に撮影を行う。

７月５日（金）　天候：曇

午前、四国学院大学内にて記者発表を行う。現地は、前日までに掘り残していた竪穴住居２・６および竪穴住居２・５竈完掘状況の写真撮影を行う。現地説明会準備のため調査区内に立ち入り禁止の柵を設ける。

７月６日（土）　天候：曇時々雨

午前中、現地説明会の準備を行うが、荒雨

第８図　記者発表風景

第９図　現地説明会風景

第10図　埋め戻し風景

のため調査区内に見学者を入場させるのを断念する。午後より現地説明会を行う。雨天にもかかわらず約200人の一般市民が来る。大学のご好意によって図書館屋上を開放していただき、上方から遺跡全体を見学してもらうことができた。

７月８日（月）　天候：晴

溝19の掘削を行う。午後２箇所に設定した畦の写真撮影を行い、断面図を作成する。並行して竪穴住居の床面下層の断ち割りを行う。竪穴住居６下層断ち割りの写真撮影２方向から行い、土層断面図を作成する。ピット136・138検出状況の写真撮影を行う。

７月９日（火）　天候：曇

竪穴住居４・５床面下層断ち割りの写真撮影を行う。その後、竪穴住居１・４・５・６床面下層土層断面図を作成する。

７月10日（水）　天候：雨

雨天のため現地での作業を中止する。

７月11日（木）　天候：曇時々晴

竪穴住居４竈下層の断ち割りを行い、写真撮影を行う。竪穴住居２床面下層の土層断面図を作成する。溝19の掘削を行い、夕方、３箇所に設定した畦を実測する。新たに検出したピット136の検出状況の写真撮影を行った後、半裁する。断面の写真撮影後、土層断面図を作成する。

７月12日（金）　天候：晴

竪穴住居２内竈下層の断ち割りを行い、写真撮影を行う。竪穴住居２内柱穴（ピット139・141）の検出状況・断面の写真撮影を行い、断面図を作成する。午後、完掘する。ピット51・138・140の写真撮影を行い、断面図作成、完掘する。竪穴住居８・９床面下層の土層断面図を作成する。

７月13日（土）　天候：曇

基盤層の環境を調査するため調査区内に４箇所深掘トレンチを設定し機械掘削を行う。順次トレンチ内にて調査を行う。

７月15日（月）　天候：曇のち雨

土坑４周辺の清掃・精査を行う。

７月16日（火）　天候：晴

竪穴住居５と重複関係にある土坑４の写真撮影を行い、実測図を作成する。夕方には完掘し、完掘状況の写真撮影を行う。現地での調査は全て終了する。

７月17日（水）　天候：曇のち雨

調査用具の後片付け、調査区周辺の清掃を行う。調査区の埋め戻しの打ち合わせを行う。

７月18日（木）　天候：曇時々雨

調査用具の後片付け、調査区周辺の清掃を行う。調査区の埋め戻しを行う。溝など深い部分については、コンクリートを流し込む。現地における全ての作業を終了する。

第２章　遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の弘法大師（空海）が誕生した土地として有名な田園都市であり、総本山善通寺の門前町として発達している。

東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壌は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層0.7～0.8mが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には希に縄文土器片が包含されていることが知られていたが、近年実施された四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したものであることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する天霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆ノ山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ケ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことが伺える。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴ヶ峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡多度津町にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期の遺跡が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器片については、畿内第１様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。

また、これらの遺跡は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は２～

第11図　善通寺遠景

背後の山は左端から大麻山・香色山・筆ノ山・我拝師山（この手前の小丘が甲山）・中山・火上山

第12図　調査地と周辺の主要遺跡

３㎞を計るが、当時の復元海岸線が現在の標高５ｍあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されている。また、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査によって、吉原町から旧石器も確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化は約２～３万年前まで遡ることができるようである。

善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中枢的な集落遺跡がある。西は筆ノ山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから東には九頭神遺跡・稲木遺跡・石川遺跡と続いているが、いずれの遺跡も近年までは本格的な調査は実施されておらずその詳細は明らかにされていなかった。

しかし、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。

旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が高いばかりでなく、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連続性も想定できる県下でも例のない大集落遺跡といえる。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群でこれまでに数多くの発掘調査が実施されている。以下、主な調査を順に紹介する。総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行われたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。続いて、昭和58年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村廃寺（伝導寺跡）の発掘調査が実施され、寺域の北端と、さらにその下層では弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。

昭和59年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの600ｍ程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘調査が実施されたが、ここでは約1,500㎡の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の竪穴住居・小児壺棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘立柱建物跡２棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部など、夥しい生活の痕跡が確認されている。特に弥生時代終末

１：阿弥陀堂遺跡　２：高熊遺跡　３：乾遺跡　４：中村遺跡　５：永井遺跡　６：稲木遺跡群　７：金蔵寺下所遺跡　８：五条遺跡　９：九頭神遺跡群　10：石川遺跡　11：甲山北遺跡　12：旧練兵場遺跡群　13：香色山遺跡群　**14：四国学院大学構内遺跡**　15：生野本町遺跡　16：生野南口遺跡　17：御忌林遺跡　18：我拝師山遺跡群　19：鶴が峰西麓遺跡　20：瓦谷遺跡　21：南原麻坂遺跡　22：北原シンネバエ遺跡　23：下吉田八幡古墳　24：丸山古墳　25：鶴が峰４号墳　26：磨臼山古墳　27：王墓山古墳　28：宮が尾古墳　29：野田院古墳（24～29：国指定史跡　有岡古墳群）　30：鶴が峰山頂古墳　31：御館古墳　32：岡（南光）古墳群　33：丸山１号墳　34：丸山２号墳　35：寺田１号墳　36：寺田２号墳　37：熊の巣古墳　38：大麻山椀貸塚古墳　39：大麻山経塚古墳　40：宮が尾２号墳　41：瓦谷１号墳　42：大塚池（吉原椀貸塚）古墳　43：北原古墳　44：善通寺伽藍　45：仲村廃寺　46：野田院跡　47：香色山経塚48：仲村城跡　49：甲山城跡　50：菊塚古墳　51：三井遺跡　52：樽池西手山頂墳３号　53：善通寺陣所跡

第12図　凡例

期の竪穴住居からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる仿製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏃・多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500m程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壺棺墓３基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。

そして、国立病院や四国農業試験場などではこれまで頻繁に発掘調査が行われているが、いずれの調査でも住居跡が複合し密集した状態で遺存しており、正確な集落の規模は今も把握できていない。

また、ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年に都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の竪穴住居や小児壺棺墓・箱式石棺墓等が確認されている。九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。

九頭神遺跡から北方に隣接する稲木遺跡では、四国横断自動車道建設に伴う調査が昭和58年５月から昭和60年３月にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の２回に分けて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居群や墓地、中世の建物跡群などが確認されている。旧地形をみると、これらの集落遺跡群はいずれも旧河道と旧河道の間に形成された微高地に営まれたものであり、これまでの調査結果からいずれも同時期に併存したものであることもわかる。したがって弥生時代頃の善通寺周辺部には、大集落というよりはむしろ小国が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅剣３口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅剣２口・細形銅剣５口・中細形銅鉾１口の計８口、我拝師山遺跡では計３カ所から平形銅剣５口・銅鐸１口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸１口など、青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目される。

やがて弥生時代に開始された稲作文化は完成期を迎え、丸亀平野という肥沃な生産基盤を背景に、独自の技術を持った特定の有力者が潅漑治水事業などを行い耕作面積を増大させ、地域を代表する権力者となり有岡地区を中心に数多くの墳墓を築くようになるが、古墳時代を迎えこの地の勢力は更に発展を続けている。旧練兵場遺跡では弥生時代の集落遺構群に古墳時代の集落遺構群が幾重にも重なり、発掘調査の際には遺構の複合状況を把握することが困難と思われる状況が頻繁にみられる。

この頃の集落域は市街地から北方と東方に広がりを見せ、市街地の南西部の丘陵部が墓域と推定されている。この地区の古墳は確認されているだけでも400基を超えており、中でも香色山・筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓中でも比較的高所を中心に大麻山椀貸塚、大麻山経塚、野田院古墳、御忌林古墳、大窪経塚古墳、丸山１号・２号墳など数多くの積石塚が築かれているが、御忌林古墳と丸山２号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している点でも注目できる。中でも野田院古墳は大麻山北西麓（標高405m）のテラス状平坦部と

いう全国的にも有数の高所に立地する丸亀平野最古段階の前方後円墳で、前方部は盛土、後円部は積石で構築されている。

また、有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南西方向に順に生野鑵子塚古墳（消滅）・磨臼山古墳・鶴が峰２号墳（消滅）・鶴が峰４号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一際目を引く存在である。

古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現する。現存する群集墳の中には線刻画で装飾された横穴式石室が計８基確認されており、それらが共通モチーフを有している点は大変興味深い。宮が尾古墳もそのひとつである。線刻画ではそのモチーフの正体を把握しにくいものが多いが、宮が尾古墳には、周辺の装飾古墳と共通したモチーフの他、人物群や船、騎馬人物が具象的に描かれており、装飾古墳を考える上で極めて貴重な存在と考えられている。

この頃の丸亀平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯直一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯の一代系譜の墓とする考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い、白鳳期には佐伯氏の氏寺である伝導寺（仲村廃寺）が旧練兵場遺跡の一角に建立される。しかしながらこの寺は短期間で消滅してしまい、後に500m程南に移転されたものが現在の善通寺伽藍ではないかと考えられている。

奈良時代末の宝亀五（774）年、この地の有力豪族であった佐伯氏に弘法大師が誕生する。平安初期、大同二（807）年に唐から帰朝した大師が、長安の青竜寺を模して今の伽藍の場所に真言宗最初の根本道場として善通寺を建立した。創建当時は四町四方の境内に金堂や大塔、講堂、法華堂、西塔、護摩堂の他、四十九の僧房があったといわれているが、平安時代末頃から鎌倉時代、そして南北朝時代にかけては、社会環境の大きな変化に伴い幾度も荒廃の危機に曝された。これを反映するように、善通寺の西側に隣接する香色山山頂では平安時代末頃の経塚群が確認されている。末法思想を背景として、この地に活動の基盤とした貴族（佐伯）や善通寺の僧侶達が造り上げたものであるが、中には子孫のために経筒などの埋納場所を事前に確保しておいたとみられる上下二段構造の経塚（香色山１号経塚）が1997年に発掘調査され注目を集めた。

善通寺は戦国時代、永禄元（1558）年には香川・三好両軍の戦火により焼失してしまう。その復興が始まるのは、やがて江戸時代に徳川幕府が封建制度を確立してからのことであるが、四国八十八カ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となるのはこの頃からであり、八十八カ寺のうち五カ寺がある善通寺市は善通寺を中心に門前町として活気を取り戻す。

明治29年には第十一師団が設置され、門前町に軍都としての性格を帯びるようになったが、このため道路や鉄道が整備された。この頃建設された洋風デザインの建造物群は市街地に今も多数残され、独特の景観を呈している。

これにより善通寺町として都市化が始まり、昭和29年３月31日に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村との合併により市制が施行され、善通寺市が誕生した。

第３章　調査の成果

第１節　遺跡の立地

四国学院大学構内遺跡は、香川県西部、善通寺市文京町に所在する。現在のところ、遺跡のほぼ全域が学校法人四国学院の敷地内に含まれる。ここは戦前、旧陸軍第十一師団騎兵隊が兵舎を構えていた場所である。

位置的には、香川県最大の独立丘陵である大麻山（標高616.3m）から北側に派生する尾根および、独立小丘陵である鶴ヶ峰（標高129.5m）、磨臼山（標高119.0m）裾部の傾斜変換点から直線距離で約500mに立地する。この付近は旧金倉川の氾濫原西側の微高地上にあたり、生野本町遺跡や生野南口遺跡などの遺跡が連続する場所である。

次に本遺跡周辺の微地形に視点を移す。現在の地表面で標高は約31mを測る。北西約500mに立地する善通寺旧境内よりも約５m高い。遺跡の東端には、旧金倉川から派生する大規模な旧河道が存在することが判明しており、四国学院敷地内で収束する。四国学院敷地東側の市道には現在も暗渠にされた溝が流れている。遺跡の西側は、調査がなされていないため詳細は不明であるが、現在も学校敷地と西側の護国神社・善通寺西高校の間には約1.5mの高低差があり、小河川（中谷川）が流れている。おそらくこの河川が遺跡の西端を示していると想像できる。南側は、四国学院に隣接する市道拡張時に立会調査を実施したが、ほぼ全域に旧河道が検出された。おそらくこの旧河道が、本遺跡と生野本町遺跡を区切っていると考えられる。河道の状況から学校敷地の内側で遺跡は収束していると考えられる。遺跡の北側は市街化されており詳細は不明であるが、四国学院正門付近での地下工事の際に、遺物包含層を検出していることから、遺跡はさらに学校敷地外へ延びる可能性がある。今後、注意を要する。

なお、本遺跡の過去の調査としては、昭和51・52年に今回の調査区の東側約60mの位置で、大学校舎（５号館）建設に伴い、発掘調査が行われている。未報告であるため詳細は不明であるが、７世紀頃の竪穴住居や溝、土器溜りが検出され、流路内より円面硯が出土した。遺構や遺物の内容から、今回の調査地と一連の遺跡と捉えることができる。

このように四国学院大学構内遺跡は、学校敷地の北西側を中心に東西400m、南北250mの範囲に広がっていると考えられるが、遺跡が学校敷地外の北東側にも広がっている可能性も否定できない。

第２節　調査区

調査区は四国学院大学グランドの図書館建設予定地全域である。調査区は南北41.5m、東西33.5mを測る。この内図書館建設予定地の１階床面積は約1,074㎡だが、工事影響範囲も含め、最終的な調査面積は1,430㎡となった。

なお、建設予定地には現在アスファルト舗装の道部分となっていて、安全上、今回調査を実施できなかった箇所が調査区西側および北側の計210㎡が存在する。安全柵での封鎖など安全が確保された時点での追加調査が必要である。

第３節　基本層序

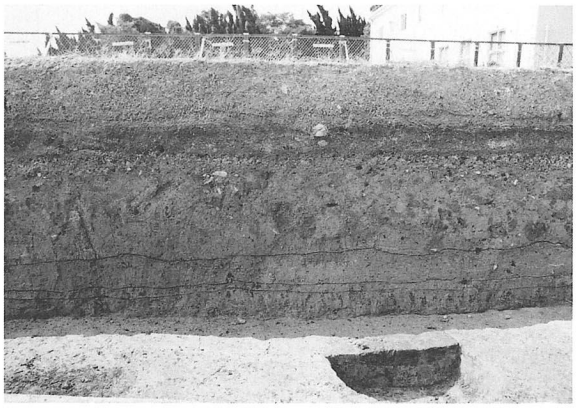
調査区の基本層序は表土と基盤層を除くと３層に大別できる（第14・15図）。

表土は、にぶい黄橙色の細砂である。グランドの芝生養生のために近年敷かれた土であろう。第14・15図土層①が該当する。

第Ⅰ層は、表土直下の土層である。第14図の土層②・③、第15図の土層②が該当する。厚さ0.15～0.40mの黄灰色砂質土で礫を多く含むが、しまりは良い。この土層の上面から、後述する近現代の遺構が全く検出されなかったことから、戦後の四国学院大学のグランド整備に伴い、新たに敷かれた造成土と考えられる。

第Ⅱ層は、第Ⅰ層直下の土層である。第14図の土層④・⑤・⑥、第15図の土層③・⑲が該当する。厚さ0.15～0.45mの灰黄色砂質土で、細かな礫を少量含む。マンガン質の粒子を含むため、上層に濃い茶褐色の小さな斑点が染み状に認められる。また黒褐色の粘質土が混ざっており、一定期間、地表面となっていたと推測できる。またレンガや陶磁器などの近現代の遺物を大量に含んでいた。一気に造成されたようで土層のしまりは不良である。また、この土層の上面を切り込むように青灰褐色粘質土の埋土をもつピットが確認できた。これらは掘立柱建物６や柵列２を構成するピット群と同形・同質のものである。後述するように旧陸軍第十一師団もしくは戦後直後の進駐軍に伴う遺構と想定できる。

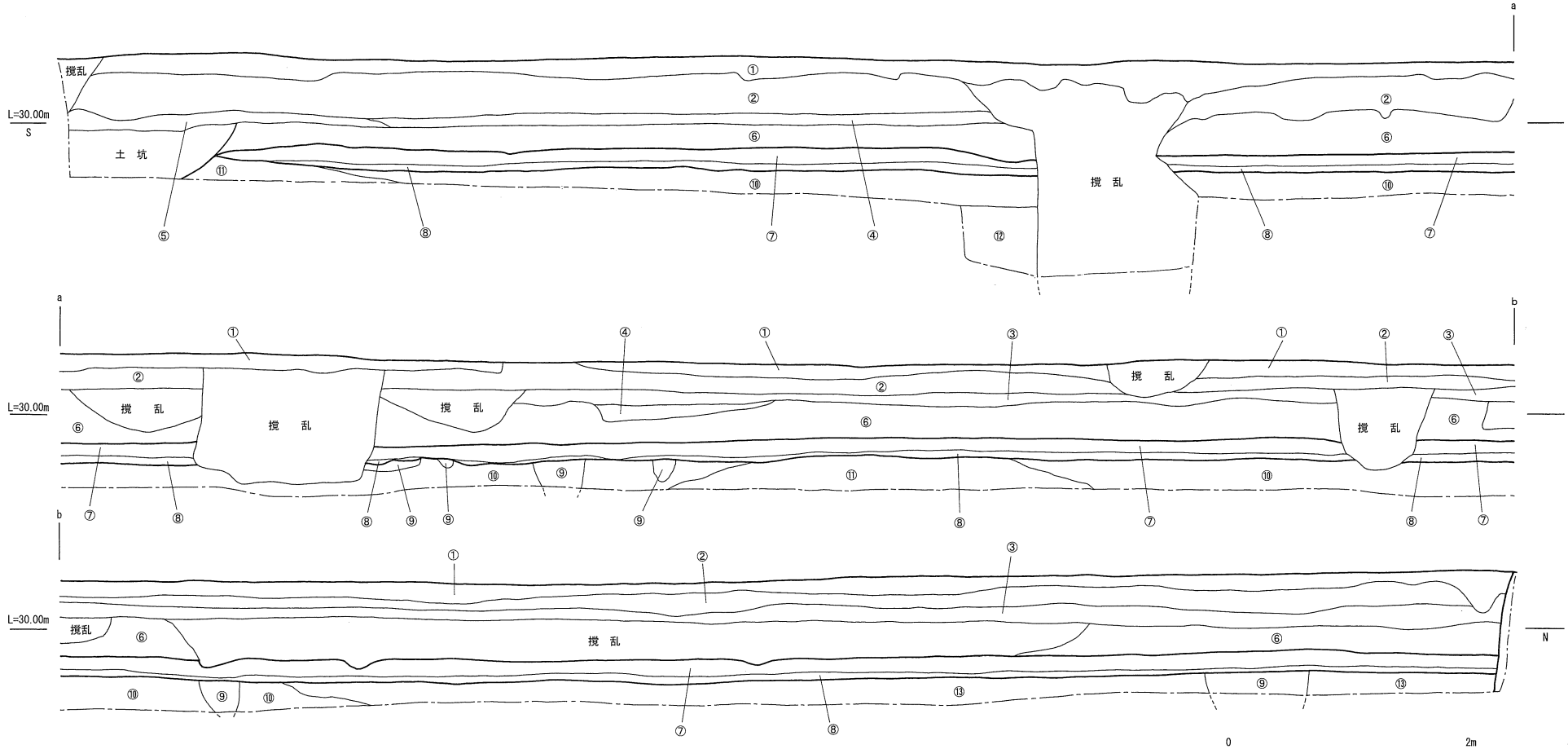
第Ⅲ層は第Ⅱ層直下の土層である。第14図の土層⑦・⑧、第15図の土層④・⑤・⑦が該当する。上層は灰色のシルト質極細砂。下層はにぶい黄橙色の細砂混じり極細砂。いずれも他の土層と比較してきめが細かい。この土層から少量ながら染付けや瓦など近世の遺物が少量出土しているものの、平面において遺構は確認されなかった。唯一、調査区南東隅に土坑状の落ち込みが、断面にて確認できた。下層からは遺構の時期（７世紀）の遺物がごくわずかに出土しているが、耕作時に撹拌されたためと想定する。水平堆積の状況や出土遺物から15～16世紀の耕作土（床土）であったと推測できる。層の薄さから、かなり上層が削平されたと考えられる。



第13図　調査区南壁

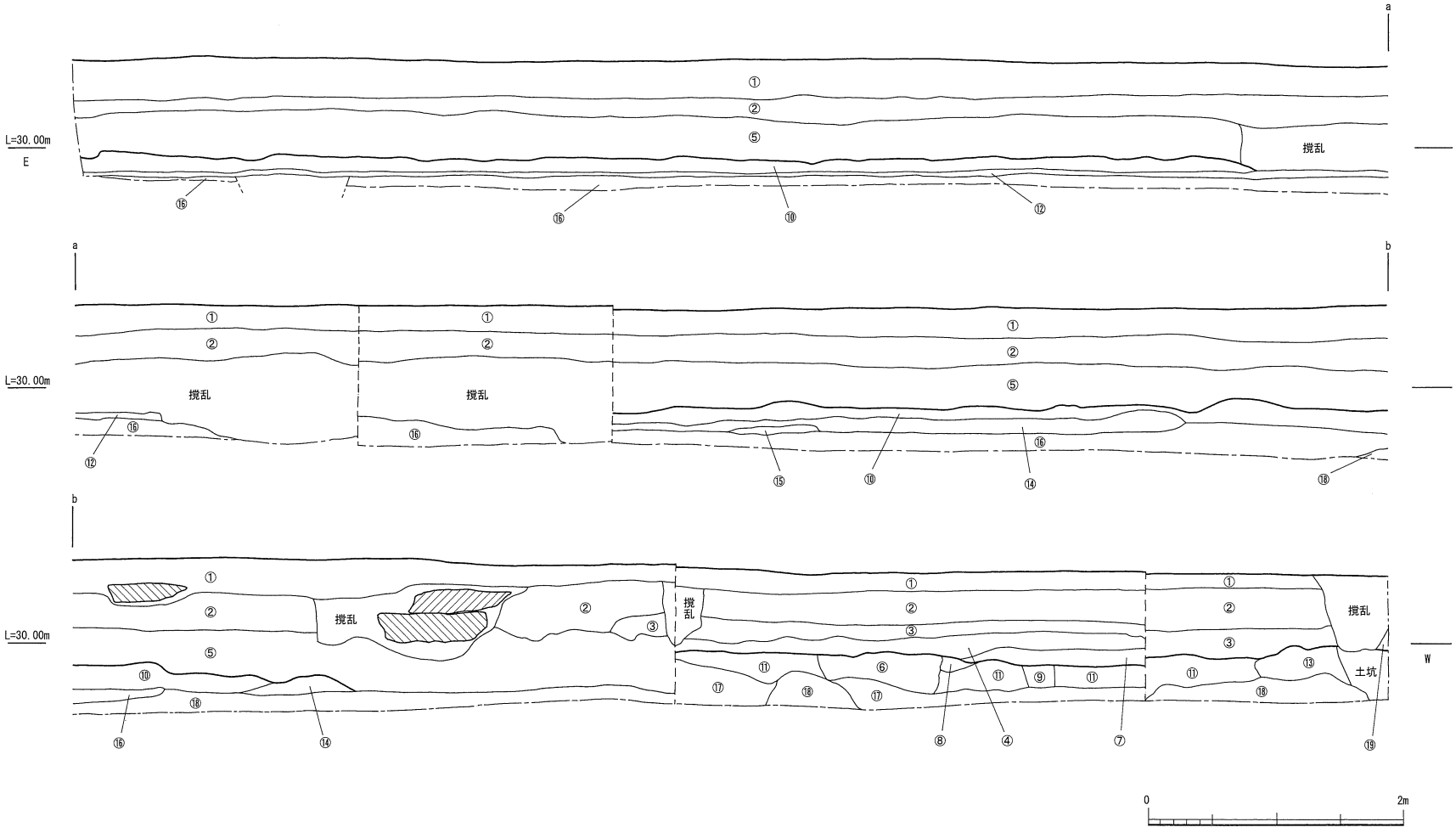
基盤層は、第Ⅲ層直下の土層である。第14図の土層⑩～⑬、第15図の土層⑧・⑩～⑱が該当する。南側はにぶい黄橙色砂質土、北側は暗灰黄色砂質土がベースである。この土層の上面を切り込む形で今回検出した遺構の大部分が確認されている。これらの遺構内からは大量の遺物が出土したが、土層⑩～⑬からは遺物が全く出土しなかった。また、調査終了後にさらに下層まで掘削して遺構・遺物の有無を調査したが、全く確認できなかった（第４章に詳述）。以上のことから、これらの土層を基盤層と認識した。

また、一部で礫層が盛り上がっている箇所が確認できた（第14図-土層⑪）。断面で確認できたのは２箇所だけであるが、調査区全体では数箇所において、直径２～３ｍで平面が不整な円形状に広がる礫の集積を確認している。調査時には単に基盤の礫層が水平堆積せずに遺構形成時に削



①10YR6/4 にぶい黄橙 粗砂混じり細砂 直径1～3mmの礫を含む
②2.5Y6/1 黄灰 粗砂 直径5～50mmの礫を多く含む
③10YR7/4 にぶい黄橙 粗砂混じり細砂 直径1～5mmの礫を多く含む
④2.5Y7/2 灰黄 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を少量含む 直径3mm前後のマンガンを含む
⑤2.5Y7/2 灰黄 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を多く含む 直径3mm前後のマンガンを含む
⑥2.5Y7/2 灰黄 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を少量含む 黒褐色ブロック土・黄褐色土を含む
⑦5Y5/1 灰 シルト質極細砂
⑧10YR7/4 にぶい黄橙 細砂混じり極細砂 直径3mm前後のマンガンを含む
⑨10YR4/1 褐灰 シルト質極細砂
⑩10YR6/4 にぶい黄橙 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を少量含む 灰褐色土含む
⑪10YR6/4 にぶい黄橙 粗砂混じり極細砂 直径30～50mmの礫を少量含む 灰褐色土含む
⑫10YR6/3 にぶい黄橙 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を若干含む
⑬2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を若干含む 橙褐色土含む

第14図　調査区西壁土層断面図（1：50）



①10YR6/4 にぶい黄橙 粗砂混じり細砂 直径1～3mmの礫を含む
②10YR7/4 にぶい黄橙 粗砂混じり極細砂 直径5mm以下の礫を多く含む
③2.5Y7/2 灰黄 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmを少量含む 直径3mm前後のマンガンを含む
④10YR7/2 にぶい黄橙 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を含む 橙褐色土を多く含む
⑤2.5Y6/1 黄灰 粗砂混じり極細砂 直径50mm以下の礫を含む 黒褐色ブロック土・橙褐色土を多く含む
⑥10YR6/1 褐灰 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を若干含む 茶褐色土含む
⑦2.5Y6/1 黄灰 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を少量含む 直径1～3mmのマンガンを含む
⑧2.5Y8/3 淡黄 極細砂
⑨7.5YR5/3 にぶい褐 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を若干含む 灰褐色土・橙褐色土を多く含む
⑩N6/ 灰 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を少量含む
⑪2.5Y6/1 黄灰 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を少量含む 橙褐色土を多く含む 直径3mm以下のマンガンを含む
⑫10YR7/4 にぶい黄橙 細砂混じり極細砂 直径3mm前後のマンガンを含む
⑬2.5Y7/2 灰黄 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を少量含む 黒褐色ブロック土・黄橙色土を多く含む
⑭2.5Y7/1 灰白 粗砂混じり極細砂 直径10mm以下の礫を少量含む 橙褐色土多く含む
⑮2.5Y7/1 灰白 粗砂混じり極細砂 直径50mm前後の礫を多く含む
⑯10YR6/4 にぶい黄橙 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を少量含む 灰褐色土含む
⑰10YR7/1 灰白 粗砂混じり極細砂 直径5mm以下の礫を少量含む
⑱10YR7/1 灰白 粗砂混じり極細砂 直径5mm以下の礫を多く含む
⑲2.5Y7/2 灰黄 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を多く含む 直径3mm前後のマンガンを含む

第15図　調査区南壁土層断面図（1：50）

平されただけと解釈していたが、整理段階になって、噴砂などの可能性を想定するに至った。今後、周辺地の調査においては、充分に意識する必要があるだろう。

第４節　遺構

①　竪穴住居

竪穴住居は計８棟確認した。ほぼ均等に配置しており、ほぼ同一時期に計画的に立てられた可能性がある。なお、調査区南東端の１辺が直線的な区画を竪穴住居と認識し、当初竪穴住居７としていたが、調査が進むにつれ他の遺構が重複し、平面が方形状になっていた部分を竪穴住居と誤認していたことが後に判明したため除外した。そのため竪穴住居７は欠番となっている。

竪穴住居はいずれも平面隅丸方形で、竈を持つものは全て北側に付す。また、ベッド状遺構を有するものもある。なお、住居の番号は検出順に付した。

竪穴住居１（SH-01）

調査区南側ほぼ中央、溝１と重複して検出された隅丸方形の竪穴住居である（第16図）。溝１との先後関係は竪穴住居１が先行する。

規模は東西5.20m、南北5.13mを測り、南辺が若干短く、平面が不正な形状である。遺構面が削平を受けているため、深さは0.13m前後しか残存していない。住居の主軸は磁北から約19度西偏し、北側にある竪穴住居４・５とほぼ同じ方向である。

西辺および北辺の一部、東辺には、幅0.12～0.15m、深さ0.05mの断面Ｖ字状の側溝が設けられている。ただし東辺は溝１との重複によって一部しか検出していない。

床面積は約26.0㎡を測る。床面ほぼ全面に厚さ0.12mの浅黄橙色粘質土の貼床が認められた。柱穴は近代のものを除き計７基検出したが、主柱穴は４基で構成されている。この内、北側の２基は溝１による削平のため、半分程しか残存していない。主柱穴は住居壁面より0.45～1.45mの距離を持ち、住居平面の中心よりやや東側に寄り、４基を結ぶと平面正方形を呈する。柱間は2.70～2.90mを測る。平面円形で直径0.38～0.50m、深さ0.1～0.15mを測る。主柱穴のうち３基には、柱痕もしくは柱の抜き取り痕を確認した。若干南側の貼床は高かったものの、明確なベッド状遺構は確認できなかった。

竈は検出されなかったが、焼土塊が床面北側で少量確認されている。本来は住居中央に炉が存在したが、溝１によって削平された可能性を指摘しておく。

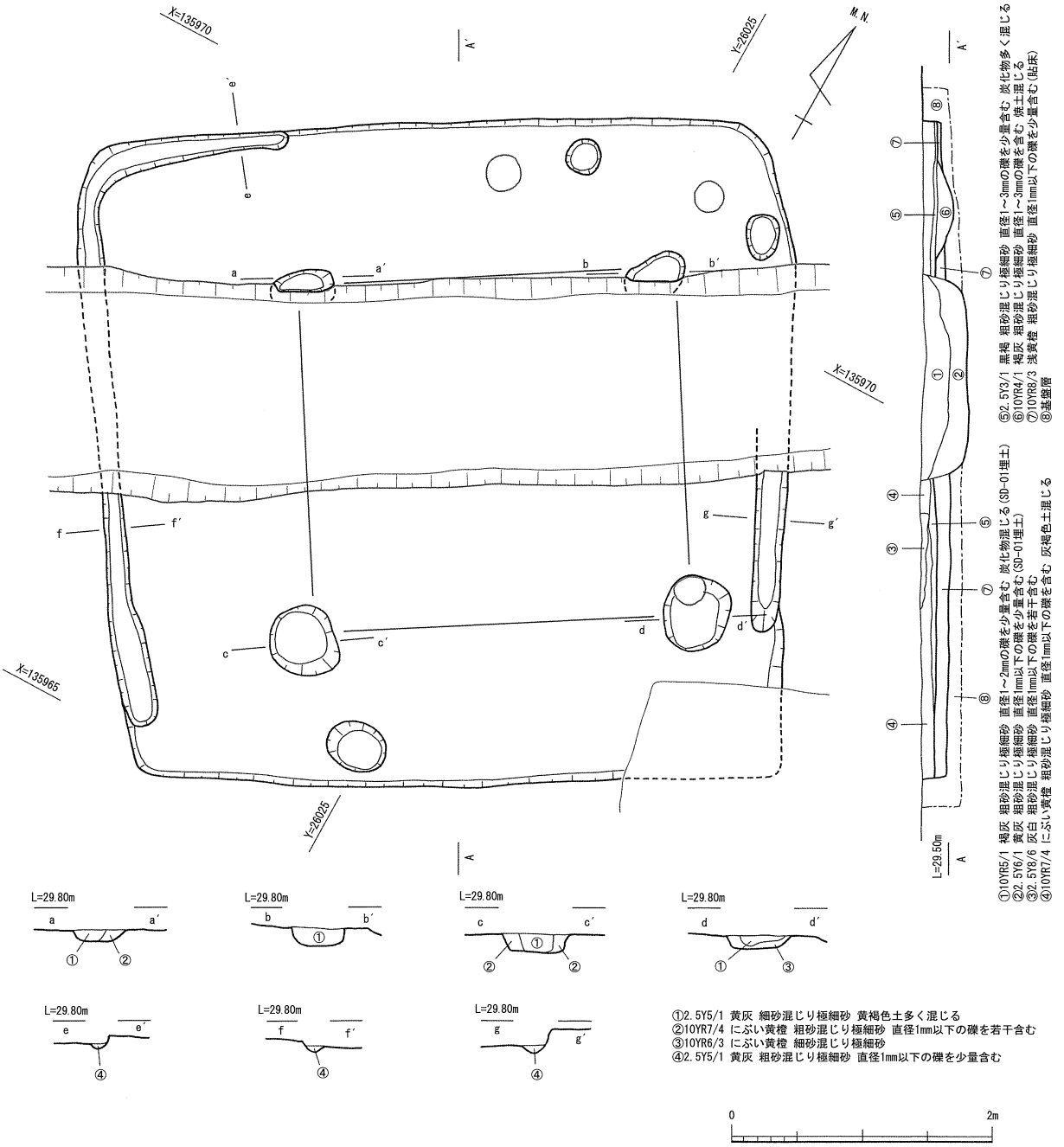
遺物は床面北西部直上から土師器がまとまって出土したが、原位置を保っていたとは考えにくい（第17図、図版２－４）。また細片であったため、図化することはできなかった。

遺構の年代は、溝１との重複関係、住居の形状および出土遺物より７世紀前半頃と考える。

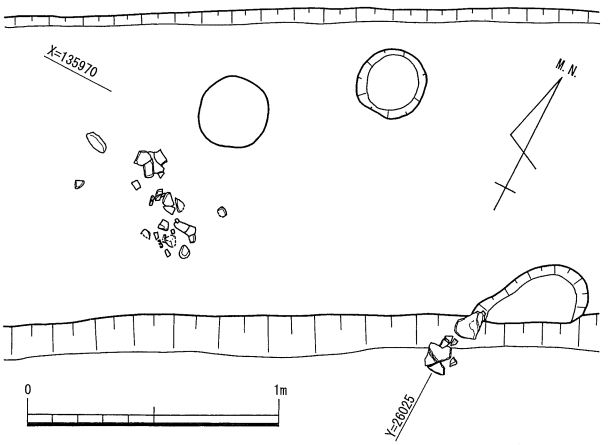
竪穴住居２（SH-02）

調査区の西端、竪穴住居６と重複して検出された隅丸方形の竪穴住居である。竪穴住居６との先後関係は竪穴住居２が先行する。

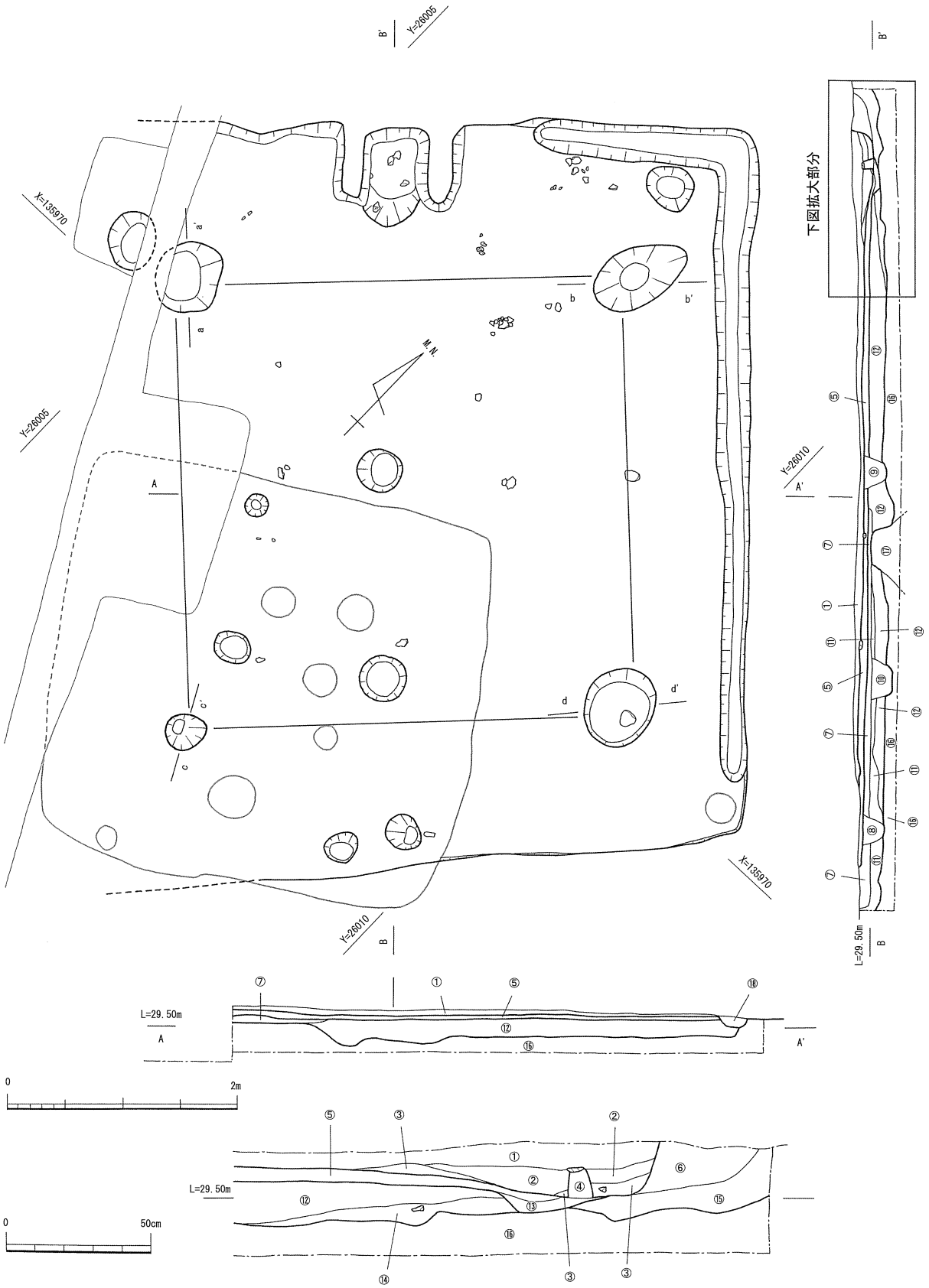
規模は西辺が調査区外になるが、竈の位置などから推定すると、東西6.30m、南北6.50mを測り、



第16図　竪穴住居１　平面・断面図（1：50）



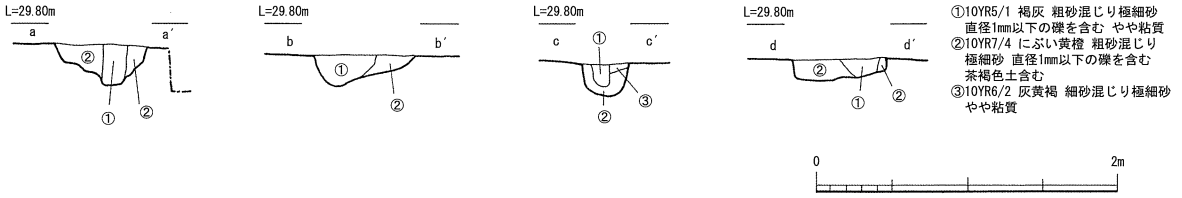
第17図　竪穴住居１　遺物出土状況図（1：30）



竈部分断面図(拡大)

①2.5Y6/1 黄灰 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を少量含む
②5YR4/3 にぶい赤褐 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を若干含む(焼土層)
③5Y4/1 灰 シルト質極細砂(炭化物層)
④2.5Y7/3 浅黄 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を含む 赤変する(支脚か)
⑤2.5Y7/4 浅黄 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を少量含む 茶褐色土を少量含む
⑥2.5Y7/3 浅黄 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を含む
⑦⑤と同質だが直径1mm以下の礫を若干含む
⑧SH-02に伴うピット
⑨10YR6/2 灰黄褐 粗砂混じり極細砂 直径1～3mmの礫を少量含む 黒褐色土混じる
⑩SH-06に伴うピット
⑪2.5Y8/3 淡黄 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を少量含む 橙褐色粒を若干含む(SH-06貼床)
⑫2.5Y8/3 淡黄 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を若干含む
⑬10YR5/1 褐灰 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を少量含む 炭化物若干混じる
⑭10YR4/1 褐灰 粗砂混じり極細砂 直径1～3mmの礫を若干含む 炭化物・焼土若干含む
⑮10YR7/4 にぶい黄橙 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を含む 茶褐色粒を少量含む
⑯基盤層
⑰基盤層(礫層)

第18図　竪穴住居２　平面・断面図（竈部分断面図 1：20，他 1：50）



第19図　竪穴住居２　内柱穴断面図（1：50）

平面はほぼ正方形となる。遺構面が削平を受けているため、深さは0.18m程度しか残存していない。残存状況は西側の方が不良である。住居の主軸は磁北から約35度西偏し、他の遺構とは異なっている。

東辺および北辺の一部（北西側）には、幅0.25m、深さ0.10mの断面U字状の側溝が設けられている。

床面積は約40.0m²を測る。床面ほぼ全面に厚さ0.08mの浅黄色砂質土の貼床が認められた。貼床は２面確認できた。柱穴は近代のものを除き計11基検出したが、竪穴住居６と重複しているため竪穴住居２に伴うと考えられるものは６基である。主柱穴は４基で構成されている。主柱穴は住居壁面より0.55～1.20mの距離を持ち、４基を結ぶと平面正方形を呈する。柱間はいずれも3.85mを測る。平面は円形のもの、楕円形のものと統一されていない。また円形のものも直径が0.30～0.63mと差異が認められる。主柱穴は、いずれも柱痕もしくは柱の抜き取り痕を確認した。ベッド状遺構は確認できなかった。

竈は住居北辺中央部より検出した。形状は左右袖部の基底から盛土を持って築く。煙道は削平のため明確に検出することができなかったが、残存部の検討から本来的に短い煙道であったと推測できる。竈の規模は内法で奥行き0.85mを測り、幅は中央部で約0.55m、前面で0.60mと鈍く開く。外側の袖は中ほどで厚さ0.40mを測る。浅く掘り凹めた落ち込みにを若干の置土を敷き竈床としている。竈中央には土塊をもって支柱としている（第18図土層④）。竈内部の埋土の堆積状況より２回以上、竈が改修されていることが分かる。また、床面北部に小規模な範囲ながら被熱により赤変した箇所が確認できた。

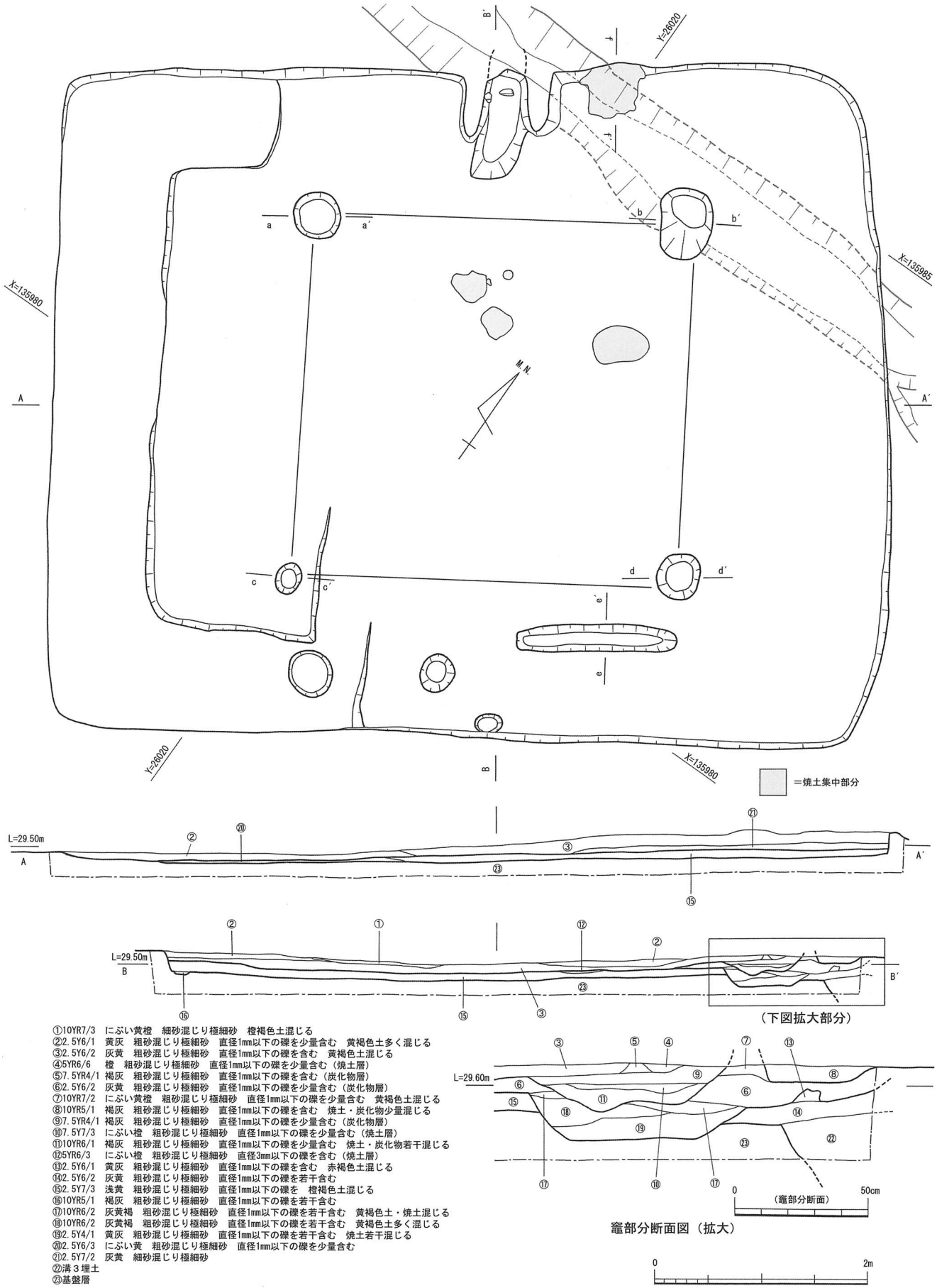
遺物は床面直上、平面的には北東寄りの部分から須恵器坏、土師器甑、土玉などが出土した（第48図-１～９）。この他に土師器細片が出土している。

遺構の年代は竪穴住居６との重複関係、住居の形状および出土遺物より７世紀前半頃と考える。

竪穴住居３（SH-03）

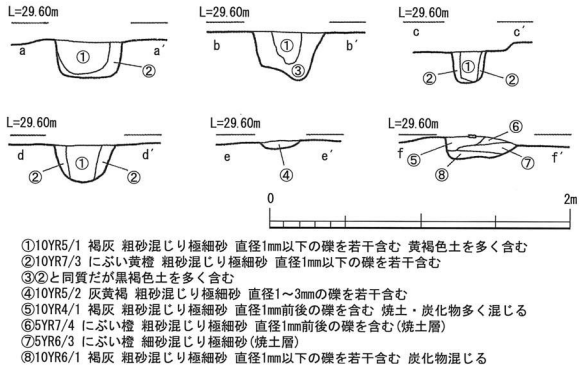
調査区西側、竪穴住居２の東側から平面Ｌ字状の遺構を検出した（付図）。部分的ながら、他の竪穴住居の隅部と近似していたことから竪穴住居の残存部と推測した。残存する部分は南北1.00m、東西0.75mを測る。残存状況は極めて不良で、深さは最も遺存していた箇所でも0.08m程度に過ぎない。住居の主軸は推測となるが、磁北から約32度西偏し、西側にある竪穴住居２とほぼ同じ方向である。主柱穴など竪穴住居を構成する遺構は全く検出されなかった。

遺物は全く出土しなかった。また他の遺構との重複関係もない。このため遺構の年代は消極的であるが、遺構面の時期、すわなち７世紀代と推測しておく。



①10YR7/3　にぶい黄橙　細砂混じり極細砂　橙褐色土混じる
②2.5Y6/1　黄灰　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を少量含む　黄褐色土多く混じる
③2.5Y6/2　灰黄　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を含む　黄褐色土混じる
④5YR6/6　橙　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を少量含む（焼土層）
⑤7.5YR4/1　褐灰　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を含む（炭化物層）
⑥2.5Y6/2　灰黄　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を少量含む（炭化物層）
⑦10YR7/2　にぶい黄橙　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を少量含む　黄褐色土混じる
⑧10YR5/1　褐灰　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を含む　焼土・炭化物少量混じる
⑨7.5YR4/1　褐灰　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を少量含む（炭化物層）
⑩7.5Y7/3　にぶい橙　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を少量含む（焼土層）
⑪10YR6/1　褐灰　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を少量含む　焼土・炭化物若干混じる
⑫5YR6/3　にぶい橙　粗砂混じり極細砂　直径3mm以下の礫を含む（焼土層）
⑬2.5Y6/1　黄灰　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を含む　赤褐色土混じる
⑭2.5Y6/2　灰黄　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を若干含む
⑮2.5Y7/3　浅黄　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を　橙褐色土混じる
⑯10YR5/1　褐灰　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を若干含む
⑰10YR6/2　灰黄褐　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を若干含む　黄褐色土・焼土混じる
⑱10YR6/2　灰黄褐　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を若干含む　黄褐色土多く混じる
⑲2.5Y4/1　黄灰　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を若干含む　焼土若干混じる
⑳2.5Y6/3　にぶい黄　粗砂混じり極細砂　直径1mm以下の礫を少量含む
㉑2.5Y7/2　灰黄　細砂混じり極細砂
㉒溝３埋土
㉓基盤層

第20図　竪穴住居４　平面・断面図（竈部分断面図 1：20，他 1：50）



第21図　竪穴住居４　各遺構断面図（1：50，断面位置は第20図に記載）

第22図　竪穴住居４　調査風景

竪穴住居４（SH-04）

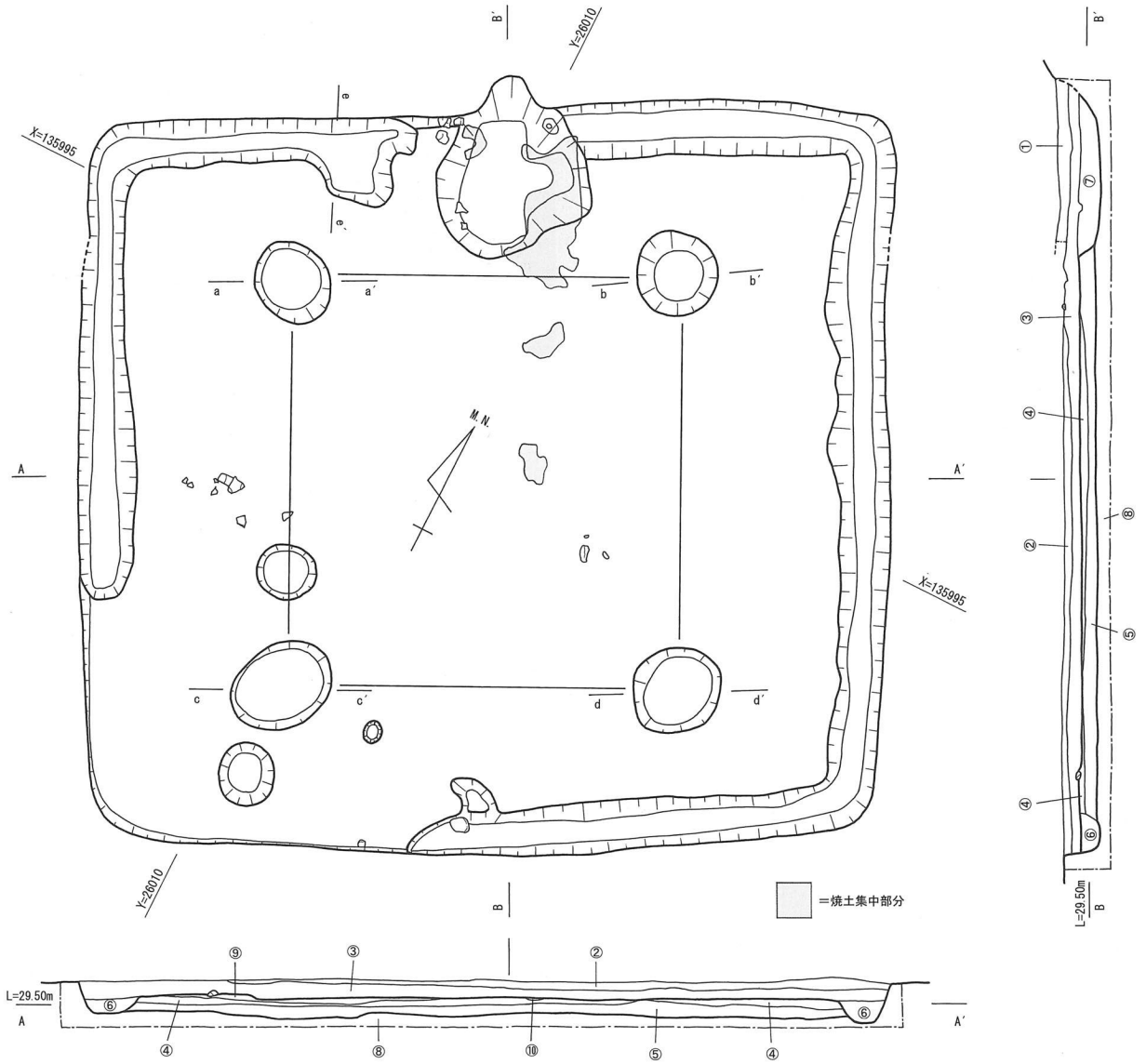
調査区ほぼ中央、溝３と重複して検出された隅丸方形の竪穴住居である（第20・21図）。溝３との先後関係は竪穴住居４が後出する。

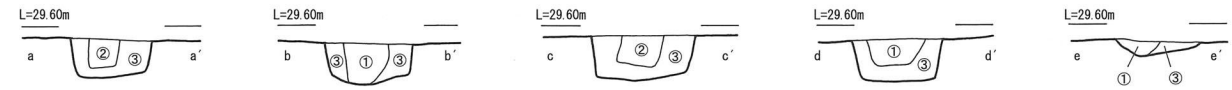
規模は東西7.80m、南北6.30mを測り、平面がやや不正な長方形を呈する。今回の調査では最大規模の竪穴住居である。遺構面が削平を受けているため、深さは0.2m前後しか残存していない。住居の主軸は磁北から約６度西偏し、竪穴住居１・５とは、ほぼ同じ方向である。

側溝は四辺とも設けられていない。

床面積は約49.0㎡を測る。床面ほぼ全面に厚さ0.07mの砂質の貼床が認められた。床面は断面観察により２面あることが確認されている。柱穴は近代のものを除き計７基検出したが、主柱穴は４基で構成されている。主柱穴は住居壁面より1.05～2.10mの距離を持ち、住居平面の中心よりやや東側に寄り、４基を結んだ平面はやや歪な正方形を呈する。柱間は3.35～3.60mを測る。主柱穴は、いずれも柱痕もしくは柱の抜き取り痕を確認した。平面円形もしくは楕円形で直径0.23～0.47m、深さ0.20～0.32mを測る。これらの主柱穴も形状・直径ともに統一されていない。ベッド状遺構は床面西側および南側で検出した。西側のベッド状遺構は平面逆コの字状を呈している。削平されているため不明瞭ではあるが、床面より最大0.07m高くなっている。基盤層の削り出しはなく、すべて置土によって作られている。南側のベッド状遺構は削平のため不明瞭ではあるが、西側ベッド状遺構と区画する落ち込みと北側の床面と区画する溝が部分的に検出されたのみである。南側のベッド状遺構は置土が東側で部分的に検出されたのみである。厚さは0.02mと極めて残存状態が悪い。また北側床面と区画する溝は断面がレンズ状で、押え板を据え付けた痕跡とは言い切れず、別の性格をも考慮する必要がある。

竈は住居北辺中央部西寄りで検出した。中軸線より約0.30m東側へ偏る。形状は左右袖部の基底から盛土を持って築き、煙道は若干傾斜しながら北側に延びるが、溝３と重複していたため部分的な検出しかできなかった。遺構認識時の計測値では、0.25mを測る。また竈内部の堆積状況より２回以上、竈が改修されていることが分かる。この改修は大規模なもので煙道も含め全面的に作り変えられている。これは前述の床面の改修と対応している。竈の規模は上層のもので、内法の奥行き1.00mを測り、幅は中央部で0.45m、前面で0.60mと鈍く開く。外側の袖は中ほどで0.35mの厚さを測る。上下両面とも浅く掘り凹めた落ち込みに若干の置土を敷き竈床としている。支柱は上下両面とも作りつけのものが確認できた。このことから支柱は本来的に作り付けるタイ





竪穴住居５断面土色

①7.5YR6/6 橙 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を若干含む
②10YR4/1 褐灰 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を若干含む 橙褐色土を多く含む
③10YR7/4 にぶい黄橙 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を少量含む 灰褐色土・茶褐色土を多く含む
④10YR6/4 にぶい黄橙 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を若干含む(床面)
⑤2.5Y7/3 浅黄 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を若干含む
⑥10YR5/1 褐灰 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を若干含む 茶褐色土含む
⑦2.5Y4/1 黄灰 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を若干含む 焼土混じる
⑧10YR5/3 にぶい黄褐 細砂混じり極細砂(基盤層)
⑨10YR6/2 灰黄褐 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を若干含む
⑩5YR6/3 にぶい橙 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を少量含む(焼土)

竪穴住居５柱穴断面土色

①10YR6/2 灰黄褐 粗砂混じり極細砂 直径１～2mmの礫を若干含む 黄褐色土・橙褐色を含む
②10YR6/2 灰黄褐 粗砂混じり極細砂 直径１～2mmの礫を若干含む 暗灰褐色土を少量含む
③2.5Y6/2 灰黄 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を少量含む 黄褐色土含む

0 2m

第23図　竪穴住居５　平面・断面図（1：50）

プであったことが分かる。また竈内部の堆積状況より２回以上、竈が改修されていることが分かる。この改修は大規模なもので煙道も含め全面的に作り変えられている。これは前述の床面の改修と対応している。また、竈の東側0.90ｍに被熱により赤変した焼土塊を検出した。一辺0.5ｍ四方の規模で、平面が不正な四角形状を呈している。断面を観察すると下部は床面が穿っており、焼土塊は３層にわたって重なっていた。このことからこの遺構も何らかの焼成遺構であった可能性が高い。他にも床面中央部北寄りに小規模ながら複数、被熱により赤変した箇所を確認したが、いずれも床面上に浅く堆積したものであった。

遺物は床面直上から須恵器の細片が少量出土した。

遺構の年代は溝３との重複関係、住居の形状および出土遺物より７世紀前半～中葉と考える。

竪穴住居５（SH-05）

調査区北側ほぼ中央で検出された隅丸方形の竪穴住居である（第23図）。東側が土坑４と重複している。土坑４との先後関係は竪穴住居５が後出する。

規模は東西5.75ｍ、南北5.58ｍを測り、平面がほぼ正方形を呈する。深さは0.18ｍ残存しており、他の竪穴住居と比較して残存状況は良好である。住居の主軸は磁北から約18度西偏し、竪穴住居１とほぼ同じ方向である。また東西にある掘立柱建物１・２・３とも、ほぼ同じ方向（約10度の誤差）を向いており、位置的にも近接していることから、密接な関係が予想される。

側溝は南西側の隅部を除いて、四辺に幅0.28～0.37ｍ、深さ0.10～0.15ｍの断面Ｖ字状の側溝が設けられている。北辺の竈付近では部分的に幅が広くなっている。

床面積は約32.0㎡を測る。床面ほぼ全面に厚さ0.12ｍのにぶい黄橙色砂質土の貼床が認められた。柱穴は近代のものを除き計７基検出したが、主柱穴は４基で構成されている。主柱穴は住居壁面より0.80～1.25ｍの距離を持ち、住居平面の中心よりやや東側に寄り、４基を結んだ平面形は正方形を呈する。柱間は2.77～2.95ｍを測る。主柱穴のいずれからも柱痕もしくは柱の抜き取り痕を確認した。平面円形で直径0.53～0.67ｍ、深さ0.25～0.30ｍを測る。形状・規模ともに他の竪穴住居の主柱穴よりも規格性がある。明確なベッド状遺構は確認できなかった。

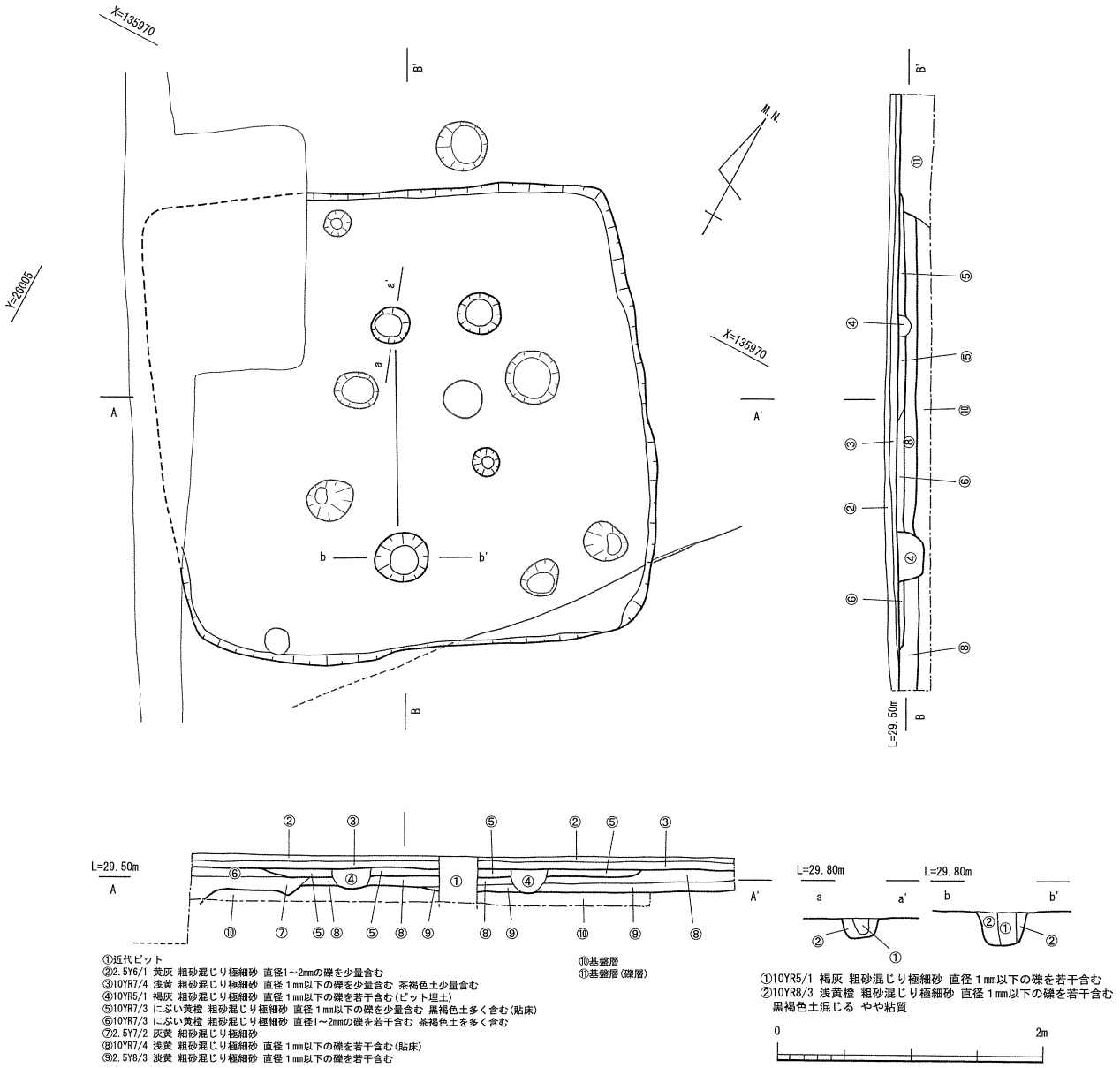
竈は住居北辺中央部より検出した。形状は左右袖部が壊れているため不明瞭である。煙道は若干傾斜しながら0.20ｍまでは確認できたが、調査区外まで延びるため全長は不明である。竈の規模は内法で奥行き1.25ｍを測る。他の竪穴住居と異なり、外側の袖は確認できず、平面が不整な楕円形状を呈する土坑となっていた。元々竈を作っていたが、住居廃絶時に竈も廃棄したと考える方が自然であろう。土坑の幅は中央部で約1.10ｍ、を測る。竈内部は水平に堆積している。他の竪穴住居とは異なり、改修が行われていた痕跡は確認できなかった。支柱も確認できなかった。また、床面中央部に小規模ながら被熱により赤変した箇所を複数確認した。

遺物は床面直上から比較的多くの遺物が出土した。須恵器が中心であるが、土師器も少量含む。出土状況からは原位置を保っていたとは考えにくい。

遺構の年代は隣接する掘立柱建物と主軸がほぼ同じであること、竪穴住居の形状および出土遺物より７世紀前半～中葉頃と考える。

竪穴住居６（SH-06）

調査区の西端、竪穴住居２と重複して検出された隅丸方形の竪穴住居である（第24図）。竪穴住



第24図　竪穴住居６　平面・断面図（1：50）

居２との先後関係は竪穴住居６が後出する。

規模は東西3.65m、南北3.45mを測り、平面が正方形を呈する。遺構面が削平を受けているため、深さは0.10m前後しか残存していない。住居の主軸は磁北から約18度西偏し、竪穴住居１・４・５とほぼ同じ方向であるが規模が異なり、同一時期とは考えにくい。

側溝は検出されていない。

床面積は約13.0㎡を測り、今回検出した竪穴住居の中で最小規模である。床面には基盤層の礫が表出しており、粘土質の貼床は部分的に認められるに過ぎない。柱穴は近代のものを除き計10基検出したが、主柱穴は２基で構成されている。主柱穴を含むいずれの柱穴も他の竪穴住居と比べて小規模である。主柱穴は住居壁面より0.50～0.80mの距離を持ち、柱間は1.75mを測る。主柱穴では柱痕、抜き取り痕は確認できなかった。主柱穴の平面は円形で直径0.28・0.40m、深さ0.15・0.25mを測る。

ベッド状遺構は確認できなかった。また竈や炉などの焼成遺構も確認できなかった。

遺物は床面直上から須恵器の細片が若干出土したが、竪穴住居２に伴う遺物であった可能性も考慮する必要がある。

遺構の年代は確実に遺構に伴う遺物が無いため、竪穴住居２との重複関係および竪穴住居の形状からしか推定ができない。層位的な検討により竪穴住居２の廃絶後の構築であることは間違いないので、７世紀中葉以降としか推測することができない。

竪穴住居８（SH-08）

調査区南端ほぼ中央で検出された竪穴住居である（第25図）。大部分が調査区外となっているが、３辺が確認される隅丸方形の平面形が確認できたこと、不確実ながら水平に堆積する貼床が確認できたことから竪穴住居と判断した。西側が竪穴住居９と重複している。竪穴住居９との先後関係は竪穴住居８が後出する。

規模は推定で東西5.35mを測る。平面は大部分が調査区外であるため不明であるが、他の竪穴住居と同様、正方形であると推測する。深さは約0.20m残存している。住居の主軸は推定で磁北から約11度西偏している。

側溝は検出されていない。

床面全面に厚さ0.08mのにぶい黄橙色砂質土の貼床が認められた。柱穴は確認できなかった。また、ベッド状遺構も確認できなかった。

遺物は床面直上から遺物が散布された状態で出土した（第26図）。須恵器が中心であるが、土師器も少量含む。出土状況からは原位置を保っていたとは考えにくい。

遺構の年代は、竪穴住居の形状および出土遺物より７世紀前半頃～中葉頃と考えるが、竪穴住居９より後出するのは間違いない。

竪穴住居９（SH-09）

調査区南端ほぼ中央で検出された竪穴住居である（第25図）。大部分が調査区外となっている。北側と東側の二辺が確認される歪な隅丸方形の平面形が確認できたこと、不確実ながら水平に堆積する貼床が一部で確認できたことから竪穴住居と判断した。東側が竪穴住居８と重複している。竪穴住居８との先後関係は竪穴住居９が先行する。

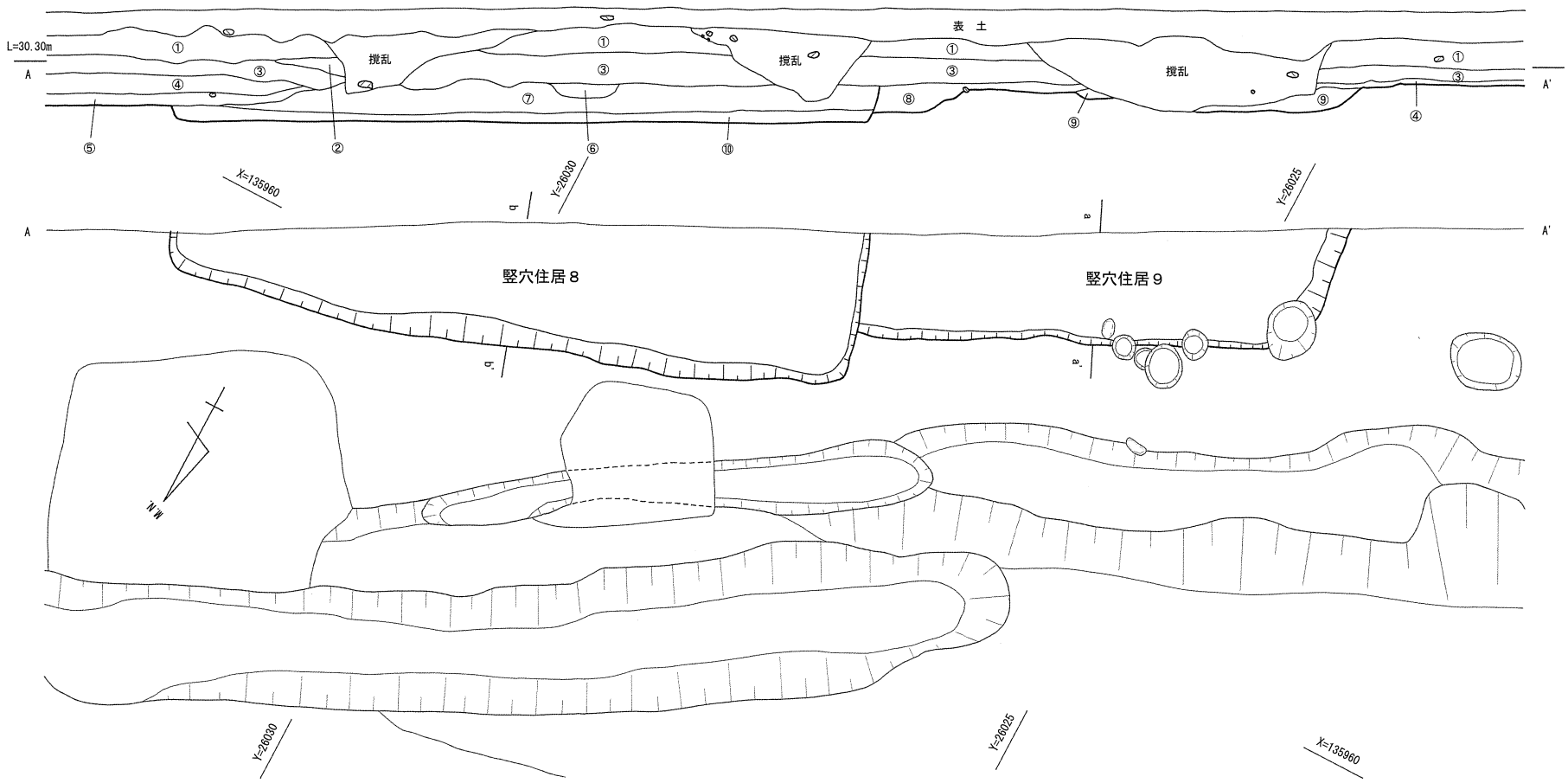
規模は現状で東西3.50mを測る。竪穴住居８と重複するため、規模・形状は不明であるが、他の竪穴住居と同様、正方形であると推測する。深さは約0.20m残存している。住居の主軸は推定で磁北から約19度西偏している。

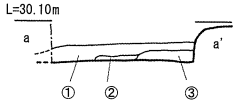
側溝は検出していない。

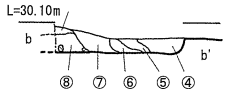
床面全面に厚さ0.08mの灰色粘質土が確認できたが、貼床であるかは断定できなかった。床面直上への流入土である可能性も否定できない。この土層は直上の撹乱のために確実に水平堆積している部分は、ごく一部である。柱穴は北辺の立ち上がり付近で計６基確認したが、この住居に伴うものではないと考える。また、ベッド状遺構も確認できなかった。

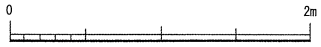
遺物は北側の床面直上から須恵器の破片が出土した（第27図）。出土状況からは原位置を保っていたとは考えにくい。遺物の年代は、７世紀前半～中葉頃であるが、一部は遺構が重複する竪穴住居８に伴うものである可能性も否定できない。

遺構の年代は、竪穴住居の形状および出土遺物より７世紀前半～中葉頃と考えるが、竪穴住居







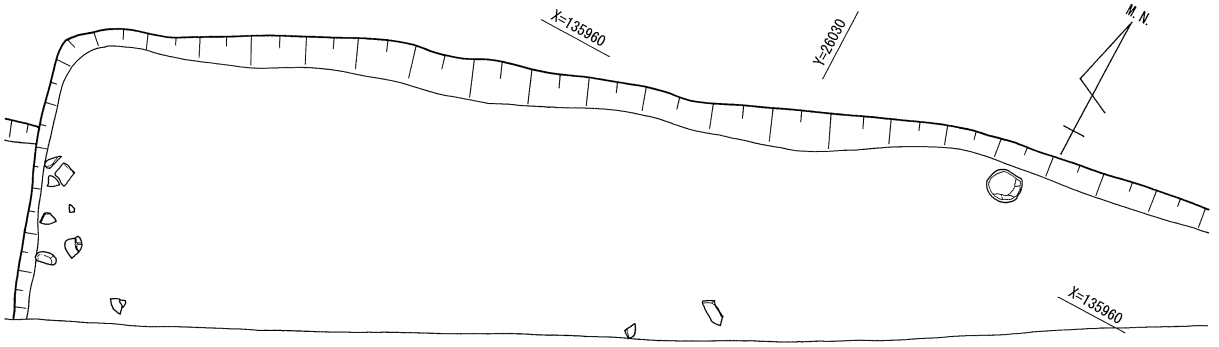


①10YR5/1 褐灰 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を少量含む
②10YR5/1 褐灰 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を少量含む 黄褐色粒多く含む
③10YR7/3 にぶい黄橙 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を若干含む 黒褐色土含む(ベッド状遺構か)
④10YR7/4 にぶい黄橙 粗砂混じり極細砂 直径１～2mmの礫を含む 黒褐色土含む
⑤10YR5/1 褐灰 粗砂混じり極細砂 直径1～3mmの礫を含む
⑥2.5Y4/1 黄灰 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を少量含む
⑦10YR7/3 にぶい黄橙 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を少量含む 灰褐色土多く含む
⑧10YR6/3 にぶい黄橙 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を多く含む 灰褐色土含む

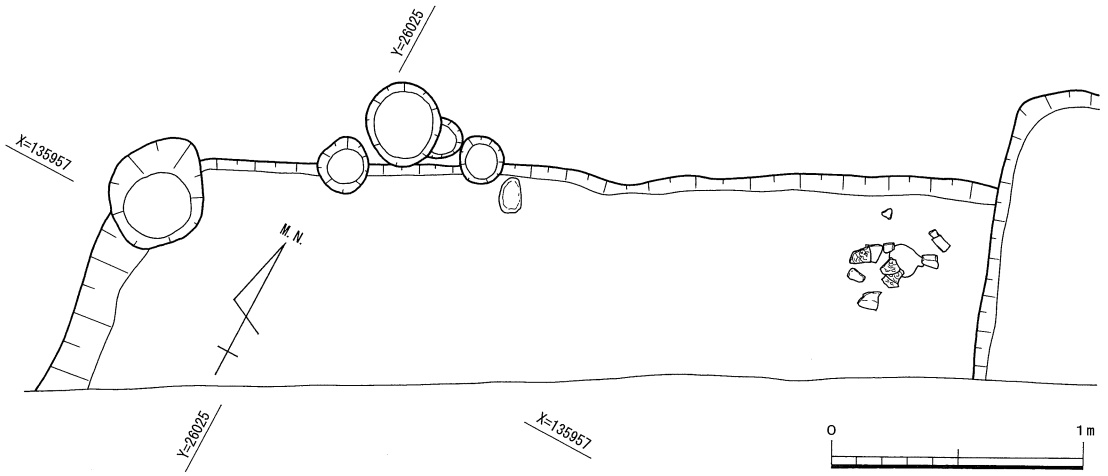
竪穴住居８・９断面土色

①5Y5/1 灰 粗砂混じり極細砂 直径1～10mmの礫を多く含む
②5Y8/2 灰白 粗砂混じり極細砂 直径1～3mmの礫を含む
③2.5Y7/1 灰白 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を若干含む
④2.5Y7/1 灰白 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を若干含む 橙褐色土多く含む
⑤2.5Y7/2 灰黄 粗砂混じり極細砂 直径1～3mmの礫を多く含む
⑥2.5Y7/1 灰白 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を少量含む 茶褐色粒を少量含む
⑦2.5Y5/1 黄灰 粗砂混じり極細砂 直径1～2mm以下の礫を少量含む 黄褐色土多く含む
⑧N4/ 灰 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を少量含む 茶褐色土を含む
⑨N4/ 灰 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を少量含む 茶褐色土を多く含む
⑩10YR6/4 にぶい黄橙 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を若干含む 上面に炭化物多く含む

第25図　竪穴住居８・９　平面・断面図（1：50）



第26図　竪穴住居８　遺物出土状況図（1：30）



第27図　竪穴住居９　遺物出土状況図（1：30）

８に先行するのは間違いない。

②　掘立柱建物

掘立柱建物は、計６棟検出した。このうち１棟は近現代のものである。掘立柱建物は、北側の３棟は建物の主軸が竪穴住居と近似している上、比較的柱穴の規模が大きく、竪穴住居に伴うものと推測できる。一方、南東側の２棟は小規模なもので、主軸も合っておらず、臨時的な作業小屋のようなものであったと推測できる。いずれの建物も時期が明らかな遺物が伴っておらず、正確な年代は不明である。

掘立柱建物１（SB-01）

調査区北西部、竪穴住居５の西側で検出された１×１間の側柱建物である。南側の掘立柱建物と柱並びが一致することから、同一の建物であった可能性も否定できないが、掘立柱建物３が２×２間の建物に復元できること、東側の柱穴が掘立柱建物３の柱穴と比較して若干深いことなどから、別個の遺構と認識した（ただし、完全に否定はできないため、両遺構の平面的な位置関係が分かるように同一図面上で図示した）。

棟方向は磁北から約28度西偏し、竪穴住居５や掘立柱建物３とほぼ同方向である。柱間は、南北方向が2.60m、東西方向が307.5～312.0mとほぼ揃っている。平面形はやや歪な正方形である。柱穴はいずれも平面円形を呈し、直径0.35～0.50m、深さ0.28～0.33mと、ほぼ同規模である。全ての掘り方において柱痕が確認できた。

遺物は柱穴内埋土中より須恵器の細片が少量出土したのみである。

遺構の年代は消極的な根拠であるが、配置からみて竪穴住居５と一連の遺構と推測でき７世紀前半～中葉頃としておきたい。

掘立柱建物２（SB-02）

調査区北東隅、溝２と重複して検出された２×４間の側柱建物である。溝２との先後関係は不明である。

棟方向は磁北から約29度西偏し、竪穴住居５や掘立柱建物３とほぼ同方向である。柱間は1.60～1.85mでほぼ揃っている。柱穴はいずれも平面円形であるが、一部不整な円形のものがある。直径も0.25～0.65mと差が大きい。深さも0.10～0.40mと一定していない。柱の通りは直線的で平面は長方形である。建物規模は、南北約7.00m×東西約3.45mとなる。全ての掘り方において、柱痕もしくは柱の抜き取り痕が確認できた。

遺物は柱穴内埋土中より須恵器が少量出土したが、いずれも細片である。

遺構の年代は埋土より古代のものであるのは間違いない。溝２の存続期間（７世紀前半～末）を考えると、溝２掘削以前の建物と推測できる。また配置からみて竪穴住居５と一連の遺構と推測できることも勘案すると、消極的ではあるが７世紀前半頃と考える。

掘立柱建物３（SB-03）

調査区北西部、竪穴住居５の南西側で検出された２×２間の側柱建物である。溝３と柱穴の一部が重複している。先後関係は掘立柱建物３が後出する。

棟方向は磁北から約28度西偏し、竪穴住居５や掘立柱建物１とほぼ同方向である。柱間は、南北方向が1.65～2.00m、東西方向が1.30～1.70mでばらつきが目立つ。柱穴は大部分が平面円形だが、一部は歪な楕円形を呈する。直径は0.50～0.72m、深さ0.20～0.33mと一定ではないが、柱通りは比較的直線である。建物規模は、南北約3.60m×東西約2.90mとなる。全ての掘り方において、柱痕もしくは柱の抜き取り痕が確認できた。

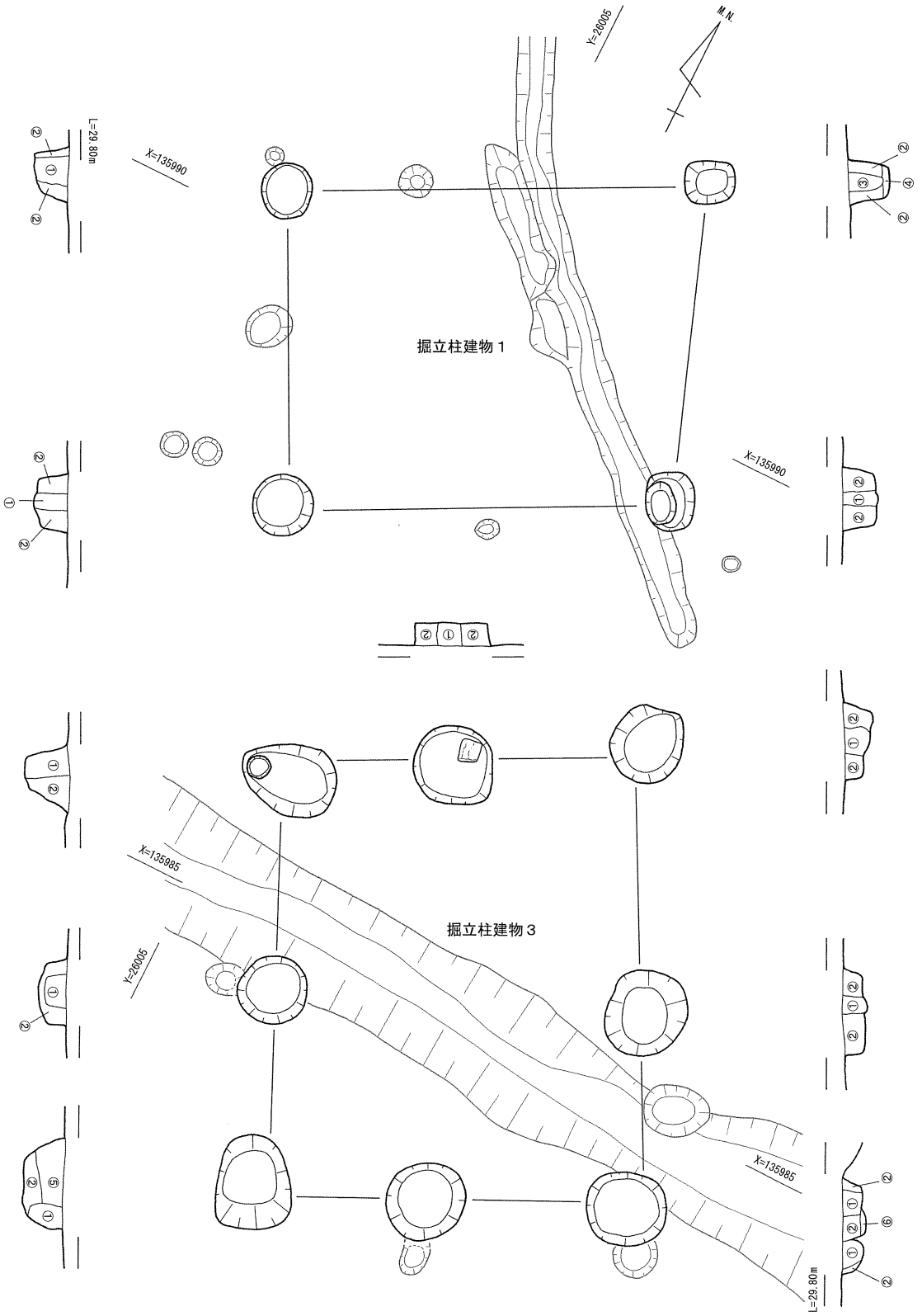
遺物は柱穴内埋土中より須恵器・土師器が少量出土したが、いずれも細片である。

遺構の年代は出土遺物および他遺構との重複関係より７世紀前半～中葉頃と考える。

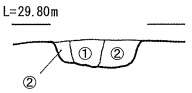
掘立柱建物４（SB-04）

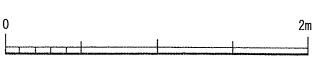
調査区南東部、溝１と２の交差地点付近で検出された１×２間の側柱建物である（第30図）。棟方向は磁北から約43度東偏する。この建物と同方向の遺構は検出されていない。柱間は2.15～2.35mでほぼ揃っている。柱穴はいずれも平面円形を呈し、直径0.45～0.72m、深さは0.08～0.25mといずれも浅い。柱通りは直線的である。建物規模は、南北約7.00m×東西約3.45mとなる。全ての掘り方において、柱痕もしくは柱の抜き取り痕が半数の３基で確認できた。

遺物は柱穴内埋土中より土師器細片が少量出土した。

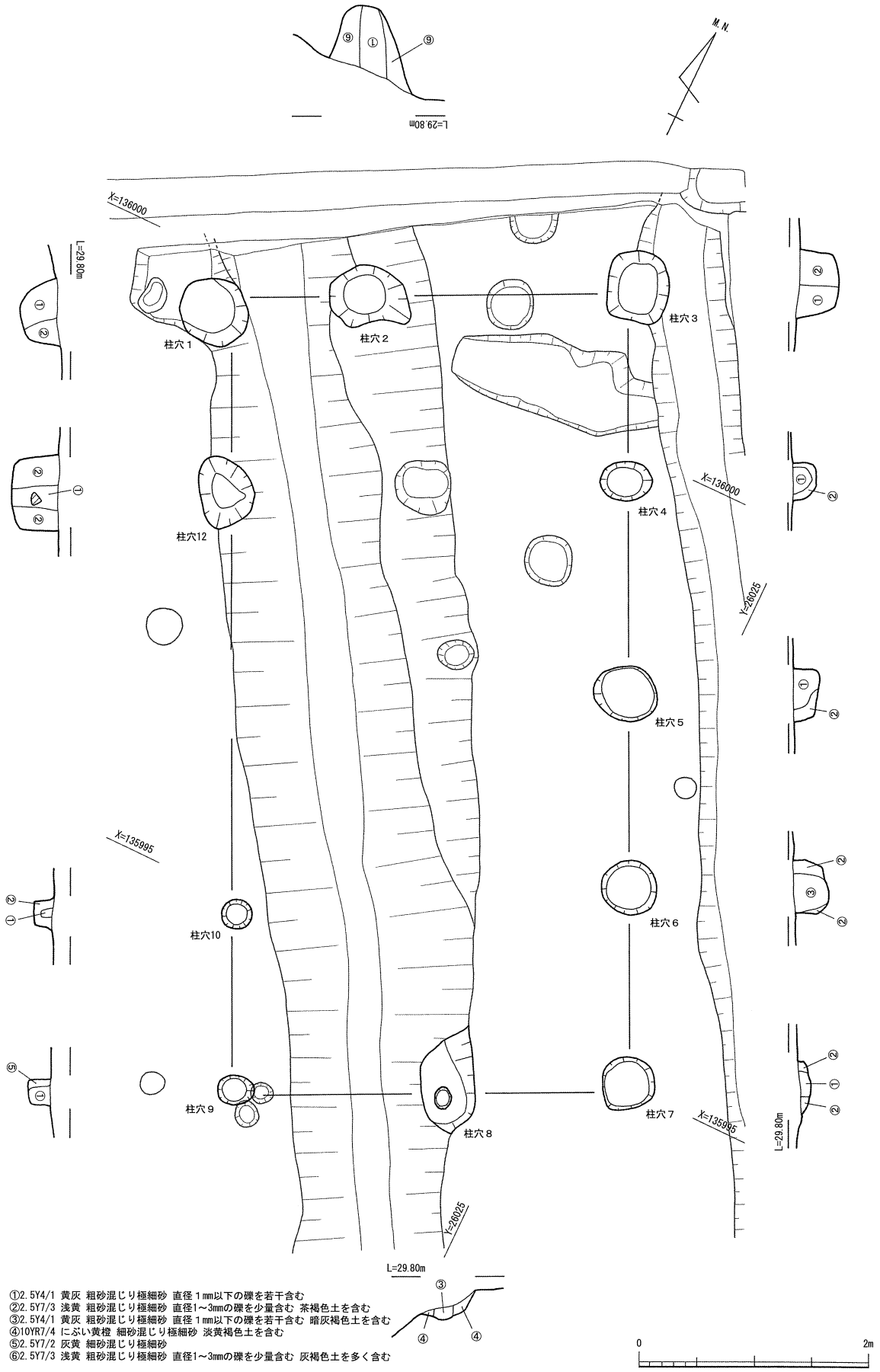


①2.5Y4/1 黄灰 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を若干含む
②2.5Y7/3 浅黄 粗砂混じり極細砂 直径1～3mmの礫を少量含む
橙褐色土を含む
③10YR5/2 灰黄褐 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を少量含む
直径3mm以下のマンガンを含む
④10YR5/3 にぶい黄褐 極細砂
⑤2.5Y7/3 浅黄 粗砂混じり極細砂 直径1～3mmの礫を含む
⑥10YR5/2 灰黄褐 粗砂混じり極細砂 粗砂混じり極細砂 直径１
mm以下の礫を若干含む 黄褐土を含む





第28図　掘立柱建物１・３　平面・断面図（1：50）



第29図　掘立柱建物２　平面・断面図（1：50）

遺構の年代は他遺構との重複関係および出土遺物より８世紀前半頃と考える。

掘立柱建物５（SB-05）

調査区東部、溝１の東端付近で検出された１×３間以上の側柱建物である（第31図）。南側が調査区外となるため、規模は大きくなる可能性もある。棟方向は磁北から約30度西偏し、掘立柱建物１・２・３とほぼ同方向である。柱間は1.35～1.50mでほぼ揃っている。柱穴はいずれも平面円形を呈し、直径0.40～0.47m、深さ0.10～0.25mと直径はほぼ揃うが深さは一定していない。これは遺構面が削平されたためであろう。柱通りは直線的である。建物規模は、南北約4.00m以上×東西約1.45mとなる。３箇所の掘り方において、柱痕もしくは柱の抜き取り痕が確認できた。

遺物は全く出土していない。

遺構の年代は、埋土より古代であるのは間違いない。遺構の重複、すなわち溝１の掘削によって柱穴の一部が削られていることから、７世紀前半頃としておきたい。

掘立柱建物６（SB-06）

調査区南西部で検出された２×４間の掘立柱建物である（第33図）。柱穴埋土が他の遺構と異なることから、近現代の遺構であるのは確実である。よって調査は一部の柱穴の断ち割りを除くと、平面検出しか行わなかった。なお、この遺構に伴う遺構として東側から検出された柵列２があげられる。

棟方向は磁北から約73度東偏する。この方位は現在の四国学院大学の敷地、すなわち戦前の旧陸軍第十一師団騎兵隊の敷地と方位がほぼ揃っている。柱間は南北方向が3.60～3.80m、東西方向が5.45～5.50mで、ほぼ揃っている。柱穴はいずれも平面円形を呈し、直径0.35mを測る。深さは一部柱穴の断ち割りを行ったが、深さ0.50m以上のため、確認することを断念した。柱通りは直線的である。建物規模は、南北約10.90m×東西約14.80mとなる。掘り方は確認できず、柱を直接打ち込んだと思われる。埋土は粘性の高い淡青褐色シルトである。

遺物は出土していない。

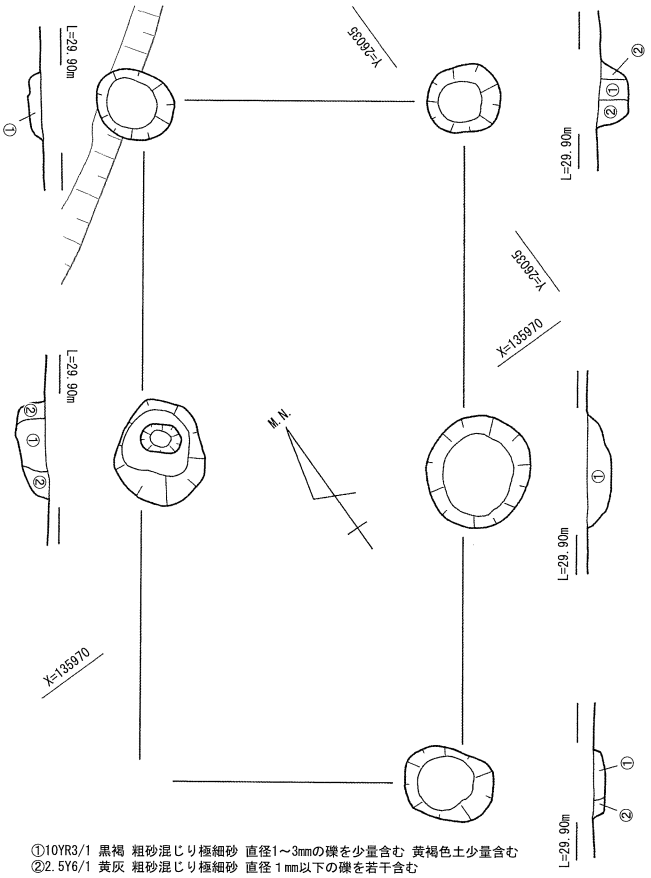
遺構の年代は四国学院草創期の建物配置図には記載されていないことから、戦前の旧陸軍騎兵隊時代のものか戦後直後の進駐軍時代のものと考える。騎兵隊時代と考えると兵舎か厩舎であった可能性があるが、この位置に建物があった図面、写真は存在していない。進駐軍時代のものであったとすれば、ごく短期間だけ存在した仮設的な建物であった可能性が高い。

③　柵列

柵列は２箇所で検出したが、１箇所は近現代のものである。古代に遡る柵列は調査区南東端で検出した。調査区外へ延びる掘立柱建物である可能性も否定できない。

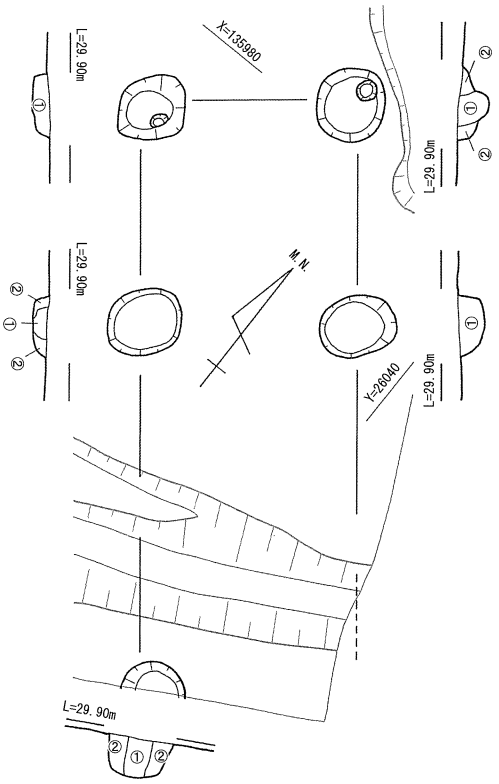
柵列１（SA-01）

調査区南東端で検出された。４基以上のピットが直線的に配列されていることから柵列と認識した（第32図）。さらに東側の直線上、溝２の中にピット状に凹む箇所が確認できた。この凹みもピットの痕跡が高く、５基以上で構成される柵列であった可能性が高い。



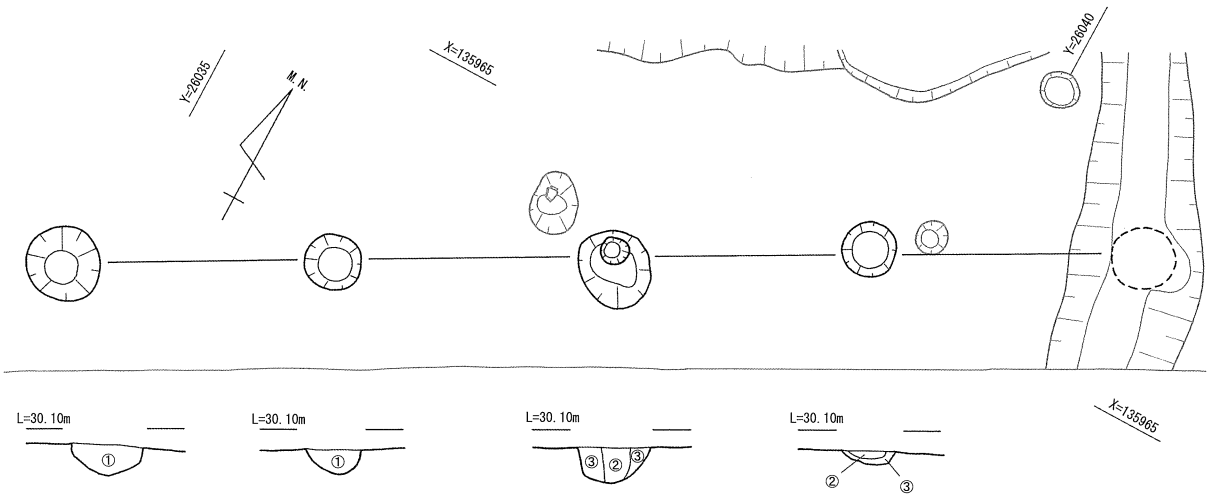
①10YR3/1 黒褐 粗砂混じり極細砂 直径1～3mmの礫を少量含む 黄褐色土少量含む
②2.5Y6/1 黄灰 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を若干含む

第30図　掘立柱建物４　平面・断面図（1：50）



①10YR4/1 褐灰 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を少量含む
②10YR6/2 灰黄褐 灰黄褐 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を含む 淡茶褐色土混じる

第31図　掘立柱建物５　平面・断面図（1：50）



①5Y6/1 灰 粗砂混じり極細砂 直径1～3mmの礫を少量含む 炭化物を若干含む
②2.5Y5/1 黄灰 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を含む 茶褐色土を若干含む
③2.5Y7/2 灰黄 粗砂混じり極細砂 直径１mm以下の礫を若干含む 茶褐色土・灰褐色土を少量含む

第32図　柵列１　平面・断面図（1：50）

磁北から約71度東偏し、北西側にある竪穴住居１の主軸にほぼ直交、すなわち中軸にほぼ並行する。このことから柵列１は同時期の関連する遺構であった可能性が高い。構成するピットは平面円形で、直径0.35～0.47m、深さ0.1～0.23mとややばらつきがある。埋土は灰色砂質土および黄灰色砂質土である。。

遺物は柱穴内埋土中より須恵器細片が少量出土した。

遺構の年代は、埋土より古代であるのは間違いない。他遺構とほぼ直交する位置関係、溝２によって柱穴が削平されていることから７世紀前半頃と考える。

柵列２（SA-02）

調査区ほぼ中央、竪穴住居４の南側で検出された、４基以上のピットが直線的に配列される柵列である（第33図）。掘立柱建物６とほぼ同一の埋土であることから、近現代の遺構と認識した。よって平面検出に留め、掘削による調査は実施していない。

西側にある掘立柱建物の東側の柱列と約1.65mの間隔で並行して並んでおり両遺構が関連する遺構であったことは確実である。構成するピットは平面円形で、直径0.30mで、掘立柱建物６よりも一回り小さい。

遺物は出土していない。

遺構の年代は掘立柱建物６と同時期、すなわち近代の遺構と考える。

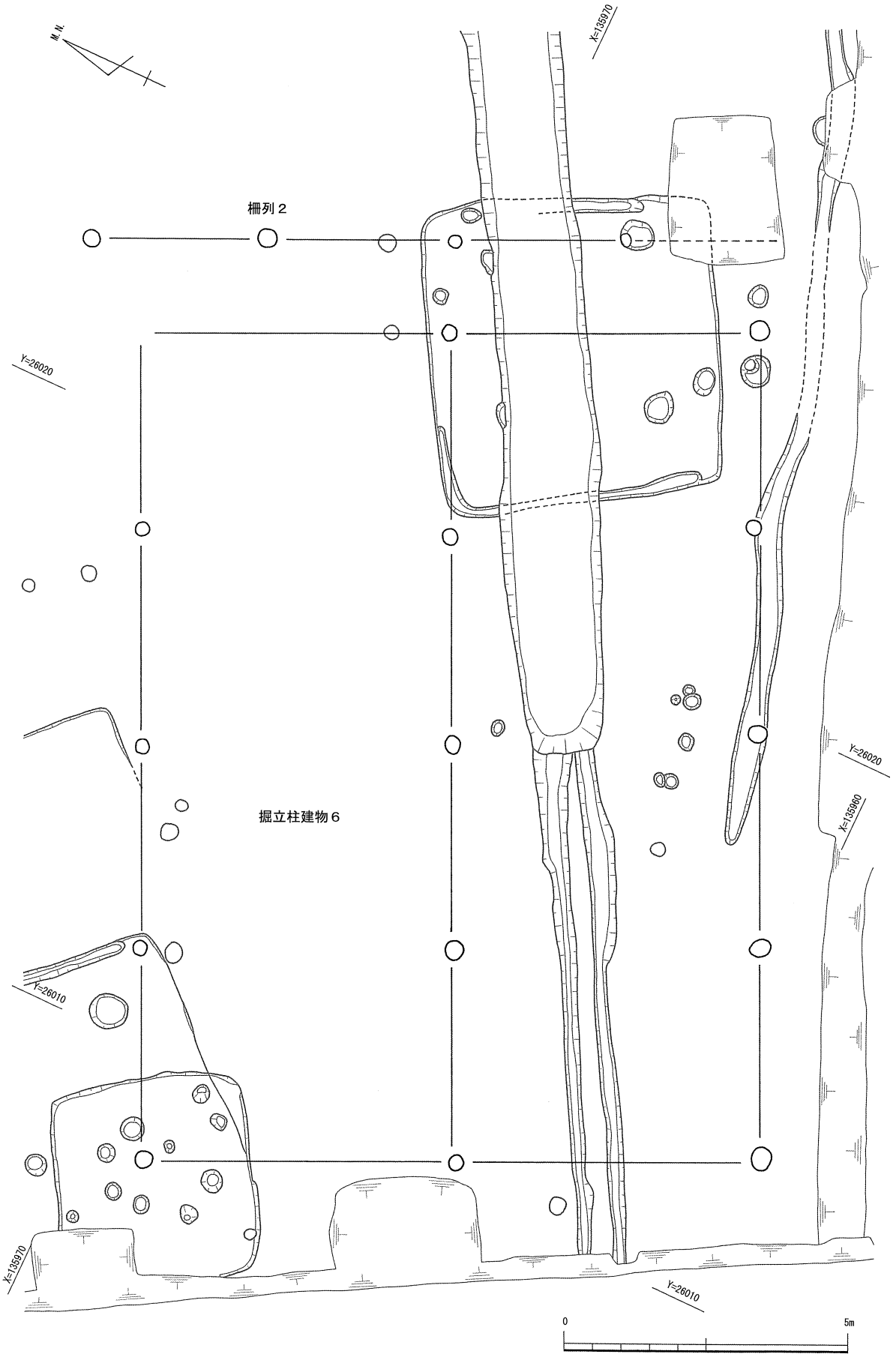
④　溝

溝は調査区各所から検出している。調査区を横断・縦断するような大規模な溝から、全長数mの短いものまで様々である。

溝１（SD-01）

調査区南部で検出した東西方向へ直線的に延びる溝である（第34図）。全長は、両端が調査区外に延びるため不明である。確認できた部分は、長さ35.40m、最大幅1.95m、深さ0.10～0.65mを測る。西側は途中で急に浅くなり、２本の並行する幅の狭い溝に分岐する。中央付近は幅も広く深さも深くなるが、東側は溝２と直交する手前から急に幅が狭くなる。軸は磁北から約72度東偏し、付近に残る条里地割と方位が一致する。断面は西側が浅い皿形、中央部が深い皿形、東端付近ではＶ字形と変化している。底部の標高は西端が最も高いことから、西側から東側へ流れていたと考えられる。この溝は、途中で竪穴住居１・溝２と交差する。また遺構の一部が掘立柱建物４・５と重複する。溝２との先後関係は、埋土の状況から溝１が後出すると考えるが、同時期に機能していた可能性も否定できない。埋土の堆積状況は、東西で異なっている。溝が２本に分岐した西側では、どちらの溝も左右２層に大別できる。また１本に合流してからは上下２層、最も幅が広い中央部で３層に大別できる。上層は黄灰色砂質土で遺物を多く含む。下層は灰白色粘質土で遺物を多く含む。

遺物は須恵器坏・高坏・甕・横瓶・壺、土師器甕・タコ壺・移動式竈などが大量に出土した（第49・50図）。出土層位は、埋土の下層、底部真上が大部分であった（第36・37・38図）。遺物の年代は７世紀後半に該当するものが最も多い。



第33図　掘立柱建物６・柵列２　平面図（1：100）

遺構の年代は、出土遺物および他遺構との重複関係より７世紀中葉～８世紀初頭頃と考える。

溝２（SD-02）

調査区東部で検出した、南北方向へ直線的に延びる溝である（第35図）。全長は、両端が調査区外に延びるため不明である。確認できた部分は、長さ40.95m、最大幅2.15m、深さ0.45～1.40mを測る。総じて北側が、幅も広く深さも深くなる。軸は磁北から約24度西偏し、付近に残る条里地割と方位がほぼ一致する。断面は比較的深いＶ字形となっている。北側の幅が広い箇所では、東側の立ち上がりの途中にテラス状の緩やかな平坦面を持つ。底部の標高は南端が最も高いことから、南側から北側へ流れていたと考えられる。この溝は、北側で掘立柱建物２、溝１・３・15・19と重複する。中でも溝１・３は交差している。掘立柱建物２との先後関係は、埋土の重複関係では明確に把握することはできなかった。しかし、溝２の存続期間の長さを考えると、溝２が後出していると推測できる。溝１との先後関係は、出土遺物の年代から溝２が若干先行すると考えるが、埋土の状況からは同時期併存していた可能性が高い。また溝３との先後関係は、交差部分の埋土の状況から（第35図Ｃ-Ｃ′）、溝２が先行すると考えていたが、後の出土遺物の整理・他の遺構との検討を行った結果、調査時に誤認があり、溝２が後出するという結論に至った。

埋土の堆積状況は、上下２層に大別できる。上層は灰黄褐色粘質土で遺物を多く含む。下層は黄灰色粘質土で遺物を多く含む。

遺物は須恵器坏・壺、土師器甕・高坏、フイゴの羽口などが大量に出土した（第51図）。大部分が埋土上層からの出土である。他の遺構と比較して残存状態は良好である。

遺構の年代は、出土遺物および他遺構との重複関係より７世紀前半～中葉が中心であるが、部分的には７世紀末頃まで存続していたと考える。

溝３（SD-03）

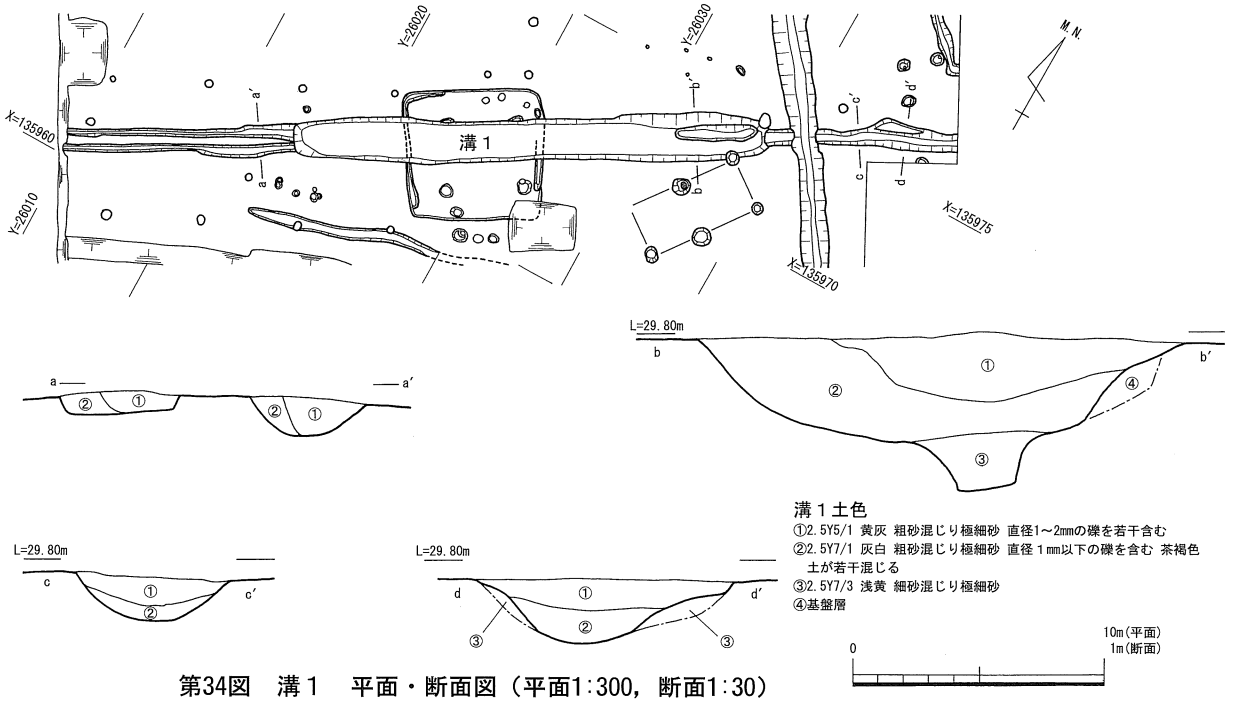
調査区を北西端から中央部東端まで斜めに横断する溝である（第39図）。全長は、両端が調査区外に延びるため不明である。なお、溝の西端は図上では撹乱で破壊されているが、撹乱の東端、すなわち調査区東側壁面を精査した結果、さらに溝が延びていることを確認した。確認できた部分は、長さ40.95m、最大幅2.15m、深さ0.35～0.60mを測る。幅はほぼ一定である。軸は磁北から約77度西偏している。断面は深いＶ字形となっている。底部の標高は南東端が最も高いことから、南東側から北西側へ流れていたと考えられる。この溝は、竪穴住居４、掘立柱建物３、溝２と重複する。中でも溝２とは交差している。竪穴住居４、掘立柱建物３との先後関係は、この２つの遺構が溝３の埋土上で検出されたことから、溝３が先行しているのは確実である。また溝２との先後関係は、前節で記したとおり溝３が先行する。埋土の堆積状況は、上下２層に大別できる。上層は褐灰色砂質土で、下層はにぶい黄橙色粘質土で遺物を少量含む。

遺物は弥生土器壺や須恵器壺などが出土したが、少量の上、いずれも細片であった。図化できたのは４点のみである（第52図-118～120）。

遺構の年代は、出土遺物および他遺構との重複関係より弥生時代後期と考える。

溝４（SD-04）

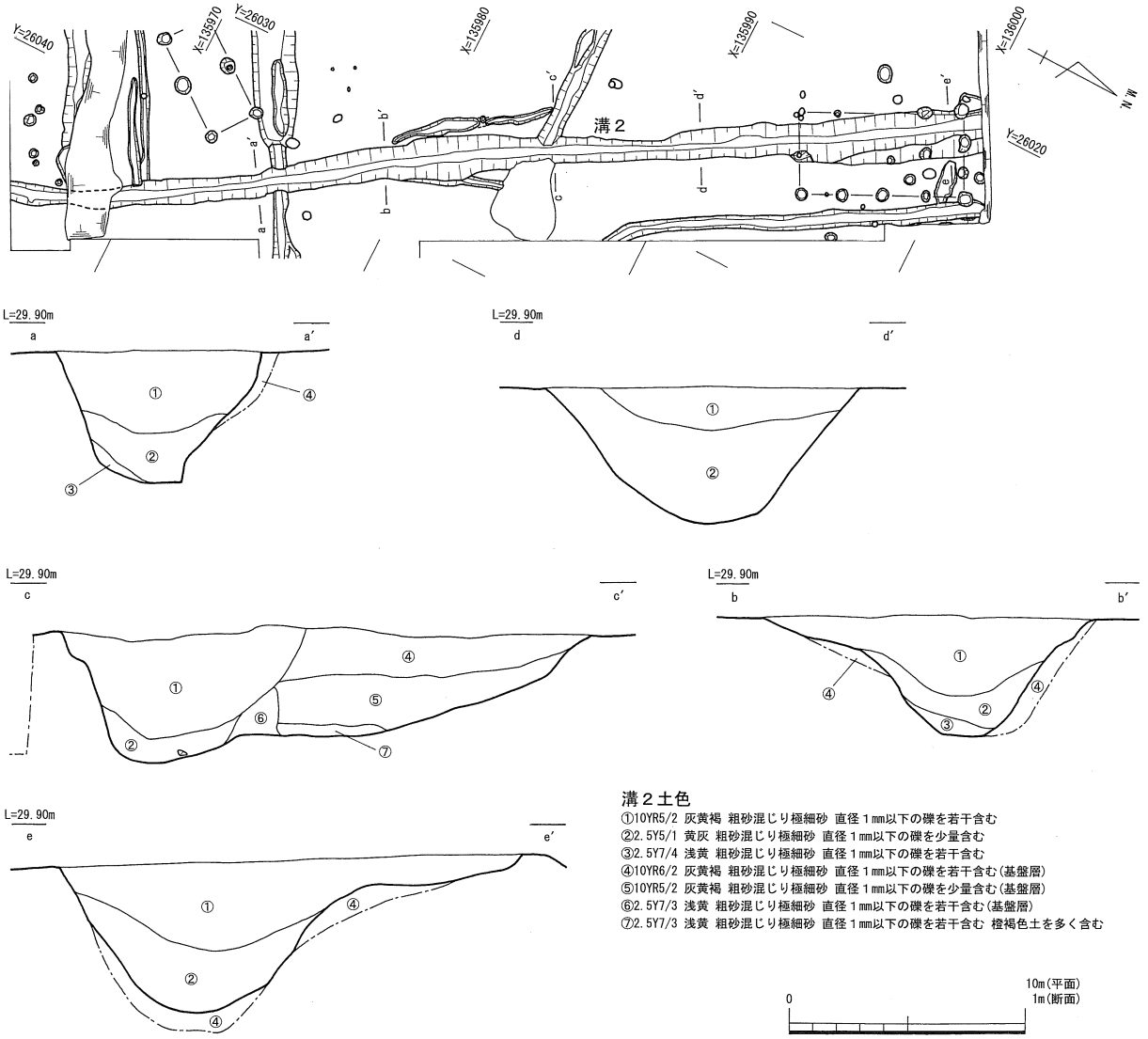
調査区北西端で検出した、南北方向へ直線的に延びる溝である（第40図）。溝５がすぐ東側に平



溝1土色
①2.5Y5/1 黄灰 粗砂混じり極細砂 直径1～2mmの礫を若干含む
②2.5Y7/1 灰白 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を含む 茶褐色土が若干混じる
③2.5Y7/3 浅黄 細砂混じり極細砂
④基盤層

10m(平面)
1m(断面)

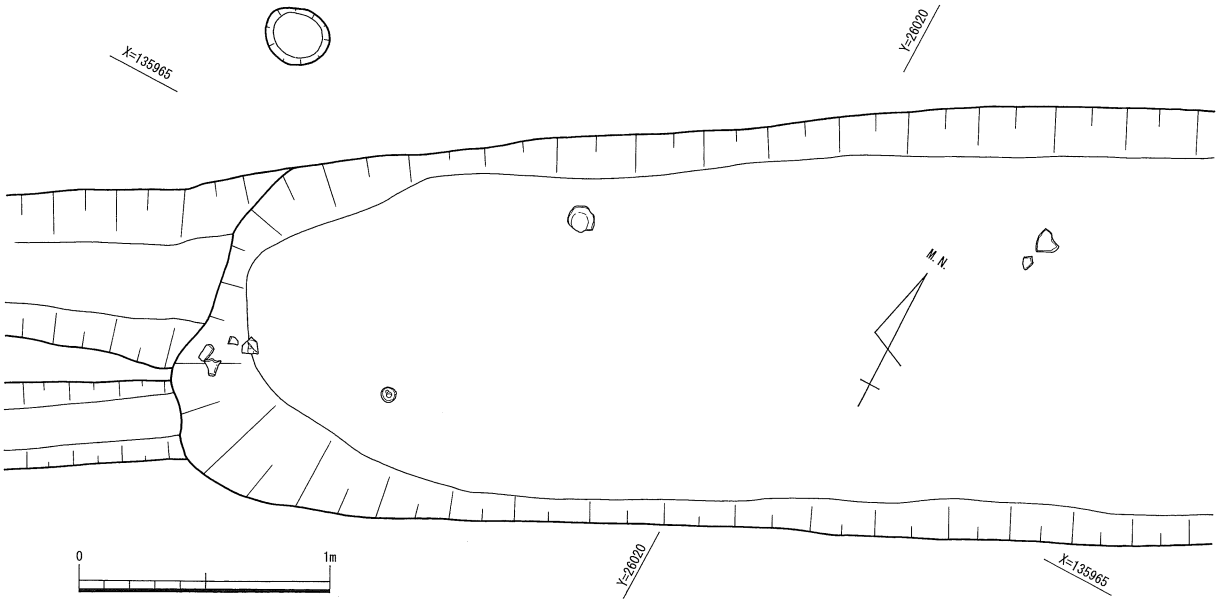
第34図　溝1　平面・断面図（平面1:300，断面1:30）



溝2土色
①10YR5/2 灰黄褐 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を若干含む
②2.5Y5/1 黄灰 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を少量含む
③2.5Y7/4 浅黄 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を若干含む
④10YR6/2 灰黄褐 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を若干含む(基盤層)
⑤10YR5/2 灰黄褐 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を少量含む(基盤層)
⑥2.5Y7/3 浅黄 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を若干含む(基盤層)
⑦2.5Y7/3 浅黄 粗砂混じり極細砂 直径1mm以下の礫を若干含む 橙褐色土を多く含む

10m(平面)
1m(断面)

第35図　溝2　平面・断面図（平面1:300，断面1:30）



第36図　溝１　遺物出土状況図①（1:30）

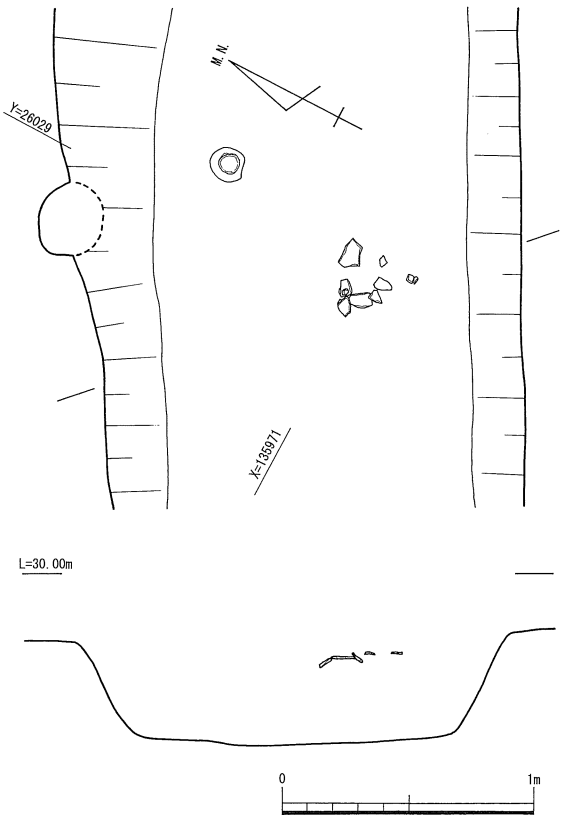
行する。全長は、北端が調査区外に延びるため不明である。確認できた部分は、長さ2.60m、最大幅0.40m、深さ0.12mを測る。軸は磁北から約29度西偏する。断面は浅い皿形を呈する。底部の標高はほとんど一定であるが、南端が約0.05m高い。埋土は１層のみである。褐灰色砂質土で、遺物は弥生土器甕などを少量含む（第52図-121・122）。

遺構の年代は、出土遺物から弥生時代後期と考える。

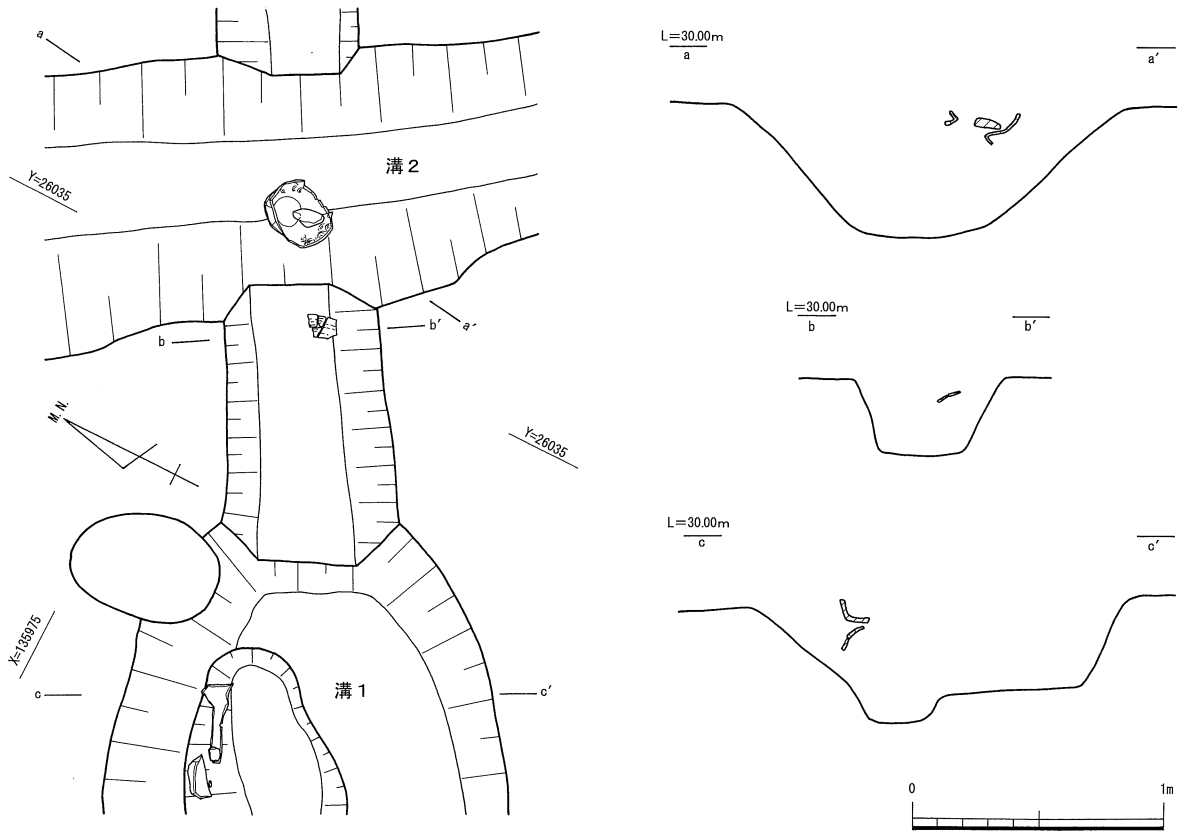
溝５（SD-05）

調査区北西端で検出した、南北方向へ直線的に延びる溝である（第40図）。溝４がすぐ西側に平行する。全長は、北端が調査区外に延びるため不明である。確認できた部分は、長さ2.50m、最大幅0.48m、深さ0.08mを測る。軸は磁北から約29度西偏する。断面は浅い皿形を呈する。底部の標高はほとんど一定である。埋土は１層のみである。褐灰色砂質土で、遺物は弥生土器をごく少量含むが、いずれも細片で図化できなかった。

遺構の年代は、出土遺物から弥生時代後期と考える。



第37図　溝１　遺物出土状況図②（1:30）



第38図　溝１・２　交差地点　遺物出土状況図（1:30）

溝６（SD-06）

調査区北西側で検出した、南北方向へ直線的に延びる溝である（第40図）。溝４・５とは溝３を挟んだ南側にある。規模は、長さ11.40m、最大幅1.04m、深さ0.12mを測る。北側から3.70m付近で一旦浅くなり途切れる。軸は磁北から約28度西偏し、溝４・５とほぼ同方位である。断面は浅い皿形を呈する。底部の標高はほとんど一定であるが、南端が約0.10m高い。埋土は２層に大別できるが、時期差は想定できない。黄灰色砂質土からは、遺物は弥生土器甕などが少量出土した（第52図-123～128）。

遺構の年代は、出土遺物から弥生時代後期と考える。

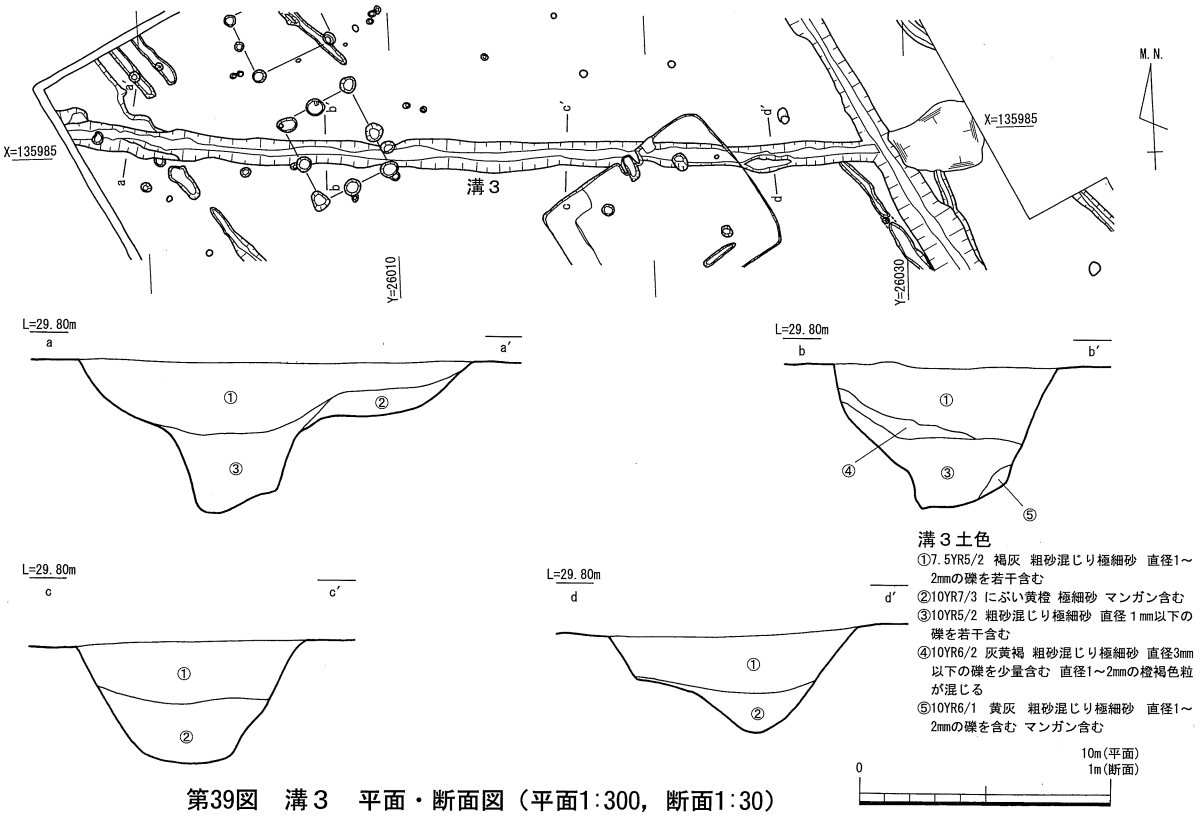
溝７（SD-07）

調査区中央部東端で検出した、南北方向へ直線的に延びる溝である（第42図）。北側に撹乱坑があるため全長は不明であるが、本来的に長い溝ではなかったと思われる。確認できた部分は、長さ4.40m、最大幅0.40m、深さ0.25mを測る。軸は磁北から約12度西偏する。断面は比較的深いU字形となっている。底部の標高は、ほぼ一定である。この溝は、南側で溝２と重複する。溝１との先後関係は、埋土の状況から同時期併存していた可能性が高く、溝２に伴う遺構と解釈した。

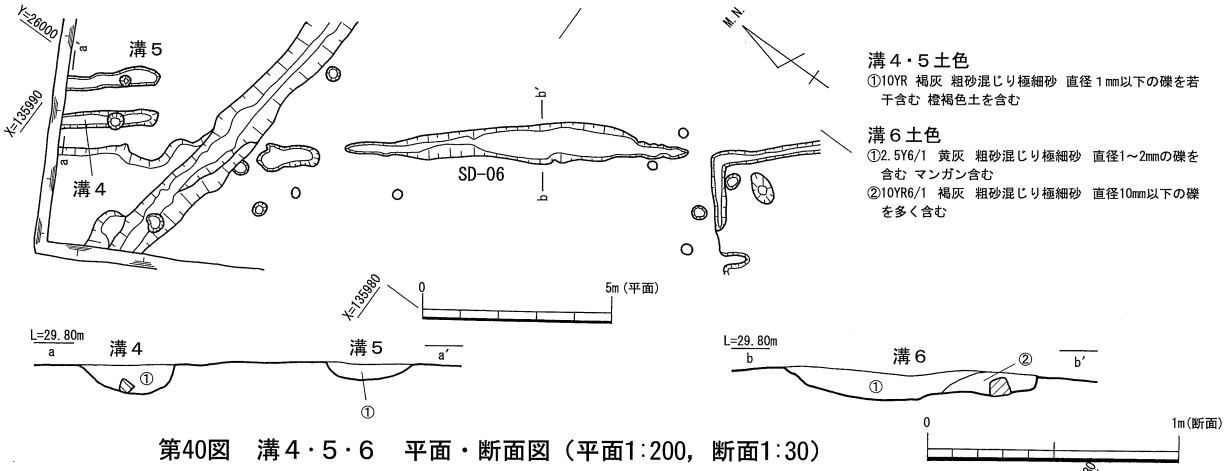
埋土の堆積状況は３層に大別できる。いずれの土層も東側から流入している。上層は黄灰色砂質土、中層は灰黄褐色粘質土、下層は灰黄色粘質土である。

遺物は全く出土しなかった。

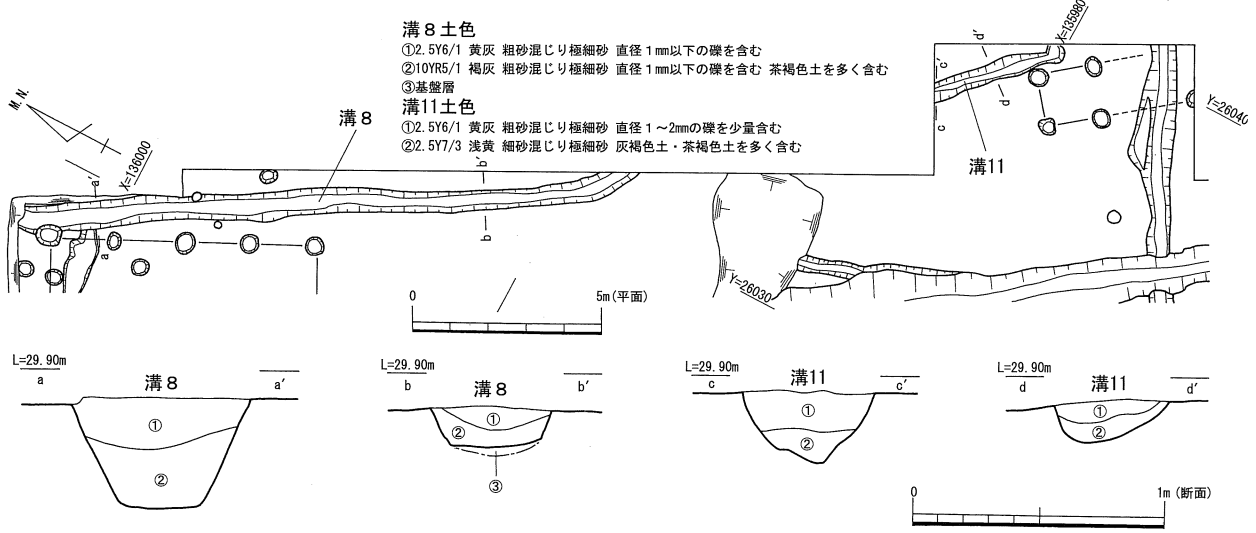
遺構の年代は消極的ながら、溝２と同時期、すなわち７世紀前半～末頃と考える。



第39図　溝３　平面・断面図（平面1:300，断面1:30）



第40図　溝４・５・６　平面・断面図（平面1:200，断面1:30）



第41図　溝８･11　平面・断面図（平面1:200，断面1:30）

溝８（SD-08）

調査区北東端で検出した、南北方向へ延びる溝である（第41図）。南側で約155度東側へ屈曲する。全長は、両端が調査区外に延びるため不明である。確認できた部分は、長さ16.50m、最大幅0.80m、深さ0.40～0.75mを測る。南側は調査区外になるが、方向的に延長線上に位置することから、溝11と同一遺構であった可能性がある。軸は磁北から約24度西偏し、付近に残る条里地割と方位が、ほぼ一致する。西側の溝２とほぼ平行する。断面は逆台形状を呈する。底部の標高は南端が最も高いことから、南側から北側へ流れていたと考えられる。この溝は、掘立柱建物２と重複する。掘立柱建物２との先後関係は、埋土の状況から溝８が先行すると考える。埋土の堆積状況は、上下２層に大別できる。上層は黄灰色砂質土で、下層は褐灰色粘質土である。

遺物は埋土より須恵器がごく少量出土したが、いずれも細片で図化できなかった。

遺構の年代は、他遺構との重複関係より７世紀前半頃と考える。

溝９（SD-09）

調査区中央部東端で検出した、南北方向へ直線的に延びる溝である（第42図）。規模は、長さ7.00m、最大幅0.55m、深さ0.10mを測る。削平を受けていたためか非常に浅く、北側から2.90m付近で一旦、途切れる。軸は磁北から約30度西偏する。断面は比較的浅い皿状を呈する。底部の標高は、南側の方が若干深い。この溝は北側で溝３と重複する。溝３との先後関係は、埋土の状況から溝９が後出する。埋土の堆積状況は２層に大別できる。

遺物は全く出土しなかった。

遺構の年代は積極的な根拠が希薄であるが、周囲の遺構と同じ年代、すなわち７世紀と考える。

溝11（SD-11）

調査区東端、調査区を東側へ拡張した箇所で検出した、北西－南東方向へ延びる溝である（第42図）。南端で約110度東側へ曲がる。全長は、両端が調査区外に延びるため不明である。確認できた部分は、長さ3.60m、最大幅0.55m、深さ0.15～0.30mを測る。先述したように、溝８と同一遺構であった可能性がある。軸は磁北から約35度西偏する。断面は北側が深いＶ字状、南側がやや深い皿状を呈し、溝８とは様相が異なる。底部の標高は南端が最も高いことから、南側から北側へ流れていたと考えられる。埋土の堆積状況は上下２層に大別できる。上層は黄灰色砂質土で、下層は浅黄色粘質土である。

遺物は全く出土しなかった。

遺構の年代は、溝８と同一遺構と想定するならば７世紀前半頃と考える。

溝12（SD-12）

調査区南西端で検出した、ほぼ東西方向へ延びる溝である（第43図）。全長は、東端が調査区外に延びるため不明である。確認できた部分は、長さ4.40m、最大幅0.85m、深さ0.15mを測る。軸は磁北から約72度西偏する。断面は非常に浅い逆台形状を呈し、他の溝と様相が異なっている。底部の標高は、ほぼ水平である。この溝は、溝17と重複する。溝17との先後関係は、調査時に別遺構と認識（検出当初、竪穴住居７を想定）して掘削したため、不明である。埋土の堆積状況は上下２層に大別できる。上層は灰色砂質土で遺物を少量含む。下層はにぶい黄橙色粘質土で遺物

を多く含む。

遺物は埋土より須恵器円面硯・坏・壺、土師器甕などが出土した（第52図-129～138）。大部分が埋土下層からの出土で、時期幅も狭く一括性が高い。

遺構の年代は、出土遺物より７世紀後半～末頃と考える。

溝13（SD-13）

調査区南端、竪穴住居９の北側で検出した。調査時には東西方向へ直線的に延びる溝と考えていたが、北側の立ち上がりが全く確認できないこと、他の溝と異なり、底部が箱形（断面Ｌ字状）になることから、整理段階において不明遺構１の一部として取り扱った。ただし、図面や台帳の表記はそのままであるので、記録として記しておく。

溝14（SD-14）

調査区南端、竪穴住居８の北側で検出した、東西方向へ直線的に延びる溝である（第43図）。規模は、長さ4.10m、最大幅0.45m、深さ0.20～0.30mを測る。中央付近が最も深くなり両端が浅くなる形状で、溝以外の遺構であった可能性もある。軸は磁北から約73度東偏し、北側に隣接する溝16とほぼ一致する。断面は深いU字形を呈する。この溝は、不明遺構１を切り込む形で検出している。埋土の堆積状況は１層である。にぶい黄橙色砂質土で遺物を少量含む。

遺物はほとんどが細片で、図化できたのは須恵器坏Ｃ身１点のみである（第52図-147）。

遺構の年代は、出土遺物から８世紀初頭と考える。

溝15（SD-15）

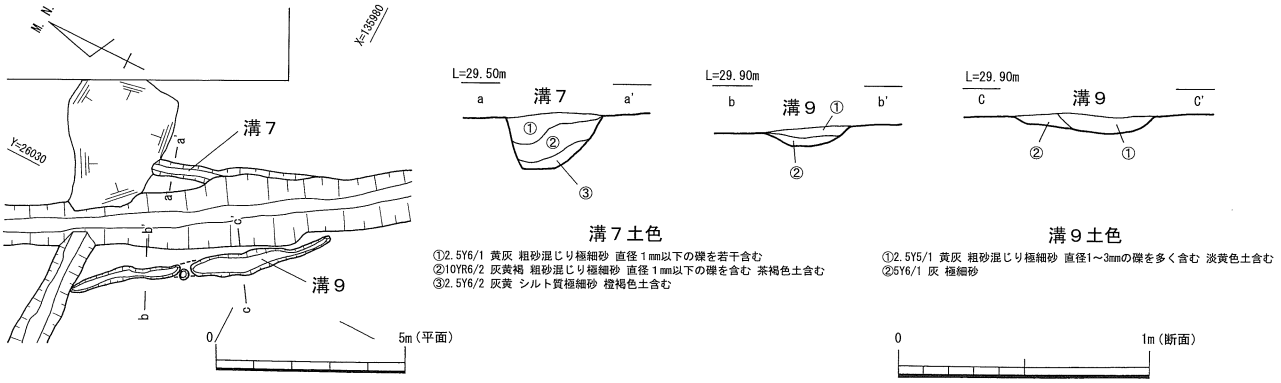
調査区南西部で検出した、東西方向へ直線的に延びる溝である（第43図）。全長は、東端が調査区外に延びるため不明である。確認できた部分は、長さ6.80m、最大幅0.55m、深さ0.30mを測る。軸は磁北から約72度東偏し、すぐ北側の溝19東半部分とほぼ一致する。断面は不整な逆台形状を呈する。底部の標高はほぼ水平であるが、東端がごく僅か（0.05m）高いことから、東側から西側へ流れていたと考えられる。この溝は、途中で溝２と交差し、溝19と重複する。溝２との先後関係は、埋土の状況から溝15が後出すると考える。また、溝19との先後関係は、明らかに溝19の埋土上に溝15の立ち上がりが確認できたので、溝15が後出することは明らかである。上層は黄灰色砂質土、中層は灰色粘質土、下層はにぶい黄橙色粘質土である。

遺物は須恵器、土師器などの細片が少量出土したのみで、図化できたのは、土師質の蛸壺１点のみである（第52図-148）。この遺物は埋土下層から出土した。

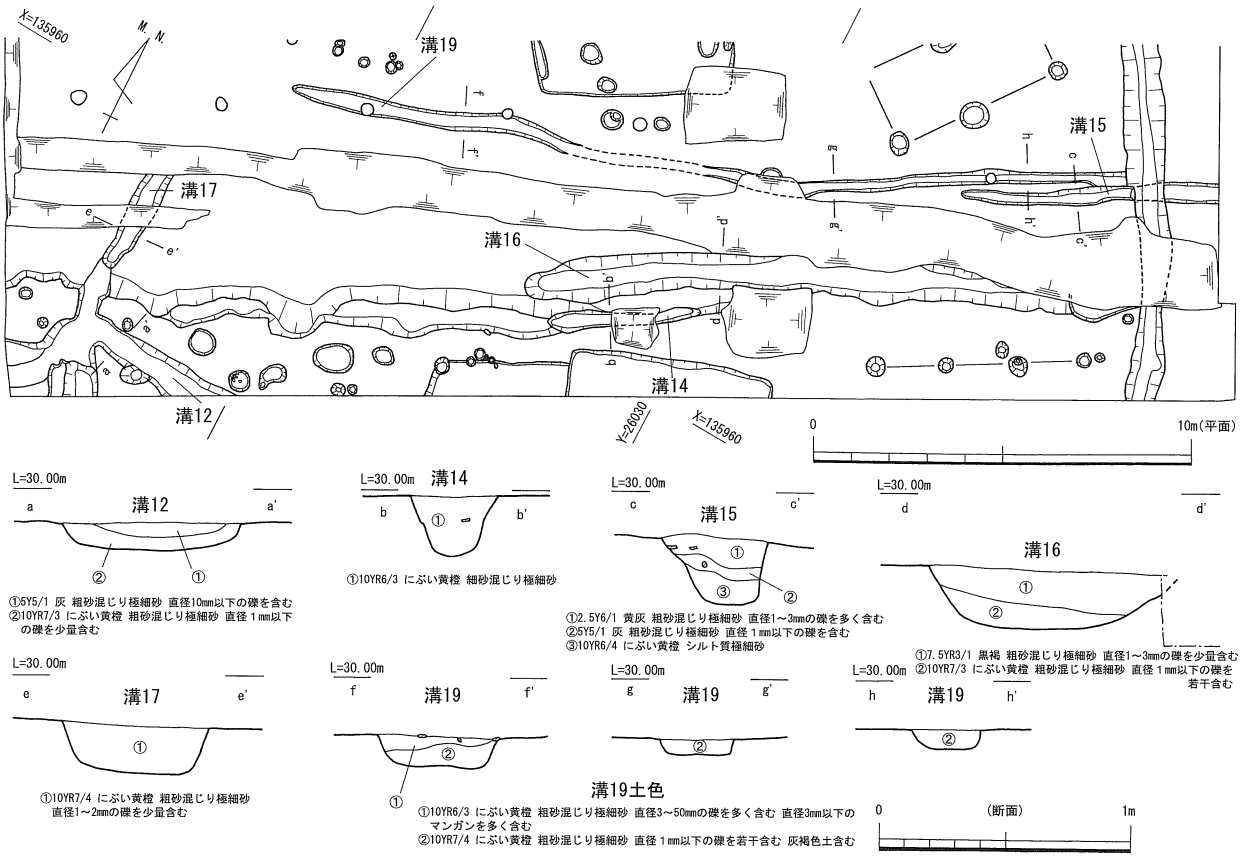
遺構の年代は、他遺構との重複関係より８世紀初頭～前半頃と考える。

溝16（SD-16）

調査区南部で検出した、東西方向へ延びる溝である（第43図）。北側立ち上がりの約半分、南側立ち上がりの一部に撹乱を受けており、また東端は不明遺構２と重複しているため、遺構の残存状況は不良である。さらに不明遺構１の段差に沿う形で遺構が存在するため、形状は不明瞭である。確認できた部分は、長さ14.40m、最大幅1.05m、深さ0.10～0.25mを測る。軸は磁北から約73度東偏する。断面は浅い皿状を呈する。底部の標高は東端が最も高いことから、東側から西側へ



第42図　溝7・9　平面・断面図（平面1:200，断面1:30）



第43図　溝12･14･15･16･17･19　平面・断面図（平面1:200，断面1:30）

流れていたと考えられる。この溝は、前述の通り不明遺構１・２と重複する。不明遺構１との先後関係は、埋土の状況から溝16が後出する。また不明遺構２との先後関係は、溝16を削る形で不明遺構２が穿たれており、溝16が先行することがわかる。埋土の堆積状況は、上下２層に大別できる。上層は黒褐色砂質土で遺物を含む。下層はにぶい黄橙色粘質土で遺物を多く含む。

遺物は須恵器坏・甕・壺などが大量に出土した（第52図-149～164）。大部分が埋土下層からの出土である。

遺構の年代は、出土遺物および他遺構との重複関係より７世紀末～８世紀初頭頃と考える。

溝17（SD-17）

調査区南西部で検出した、南北方向へ直線的に延びる溝である（第43図）。北端は、撹乱を受けているため全長は不明である。確認できた部分は、長さ3.00m、最大幅0.60m、深さ0.20mを測る。溝の中央付近に別の撹乱を受けている。南側は途中で急に浅くなる。軸は磁北から約17度東偏する。断面は逆台形を呈す。底部の標高は南端が最も高いことから、南側から北側へ流れていたと考えられる。この溝は、南側が浅くなってからもさらに南側に続き調査区外へ続く。この箇所は溝12や不明遺構１などが複雑に交錯しており、遺物も出土しなかったことから、溝17とは区別した。埋土は１層で、にぶい黄橙色粘質土である。

遺物は須恵器坏、土師器甕などが少量出土した（第52図-165・166）。

遺構の年代は、出土遺物から７世紀中葉頃と考える。

溝19（SD-19）

調査区南部で検出した、東西方向へ延びる溝である（第43図）。東端は、溝２と合流する。規模は、長さ22.40m、最大幅0.55m、深さ0.25～0.50mを測る。削平のため中央付近で浅くなり、約3.60m途切れている。西側は軸は磁北から約85度東偏するが、中央付近から軸は磁北から約72度東偏にと変化し、緩く屈曲する。断面は浅い皿形を呈する。底部の標高は先述のとおり中央付近が最も高くなるが、西側と東側を比較すると東側の方が高いことから、東側から西側へ流れていたと推測できる。この溝は、途中で溝15と重複する。溝15との先後関係は、埋土の状況から溝19が先行すると考える。埋土の堆積状況は、東西で異なっている。西側は上下２層、中央付近から東側は１層からなる。西側上層はにぶい黄橙色砂質土で、下層はにぶい黄橙色粘質土で遺物を含む。東側はにぶい黄橙色粘質土で遺物を少量含む。

遺物は須恵器坏などが出土した（第52図-167～170）。大部分が埋土下層からの出土である。

遺構の年代は、出土遺物および他遺構との重複関係より７世紀末頃と考える。

⑤　土坑

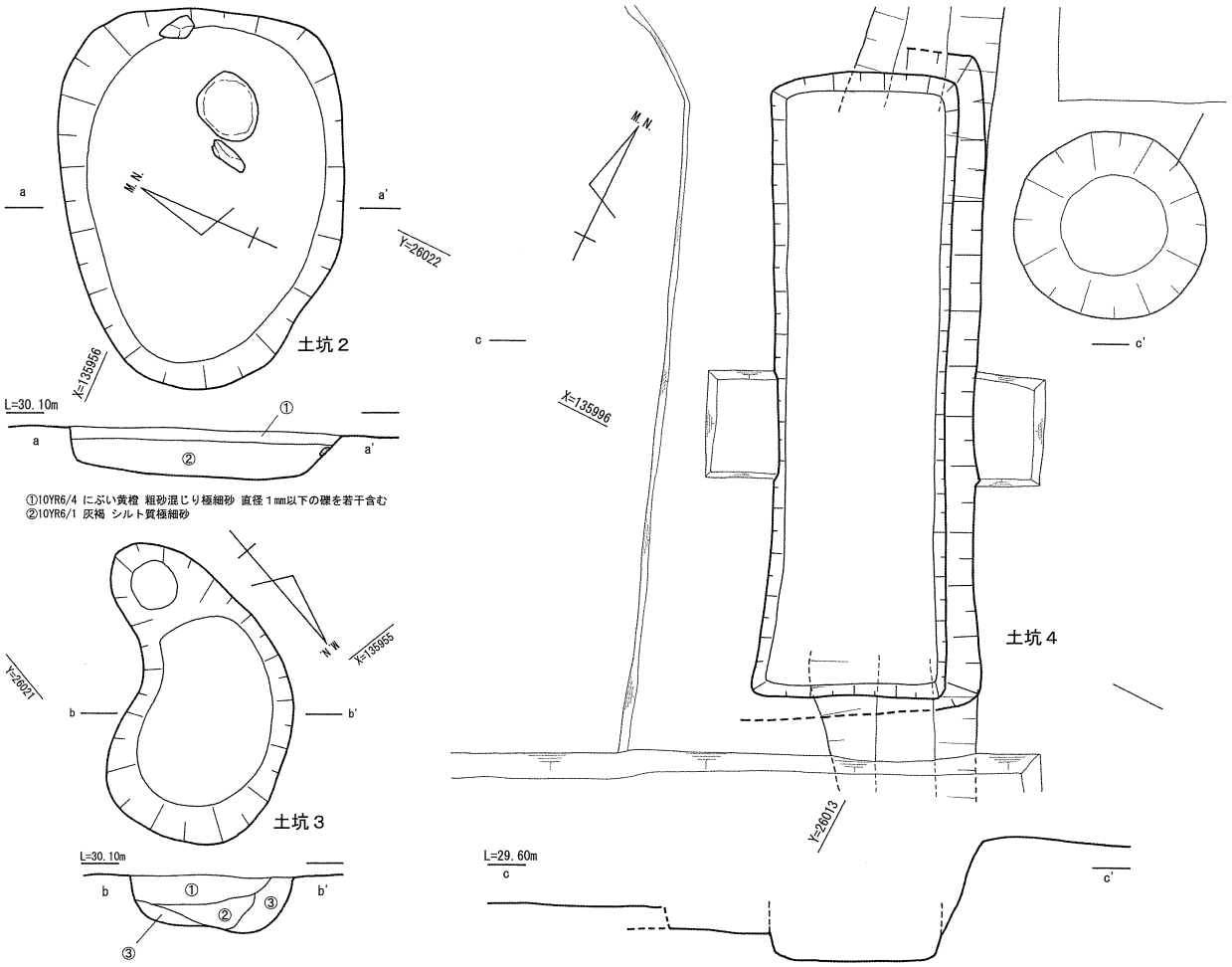
土坑は複数基検出した。大部分が調査区南側に位置する。このうち、主要な３基について報告する。

土坑２（SK-02）

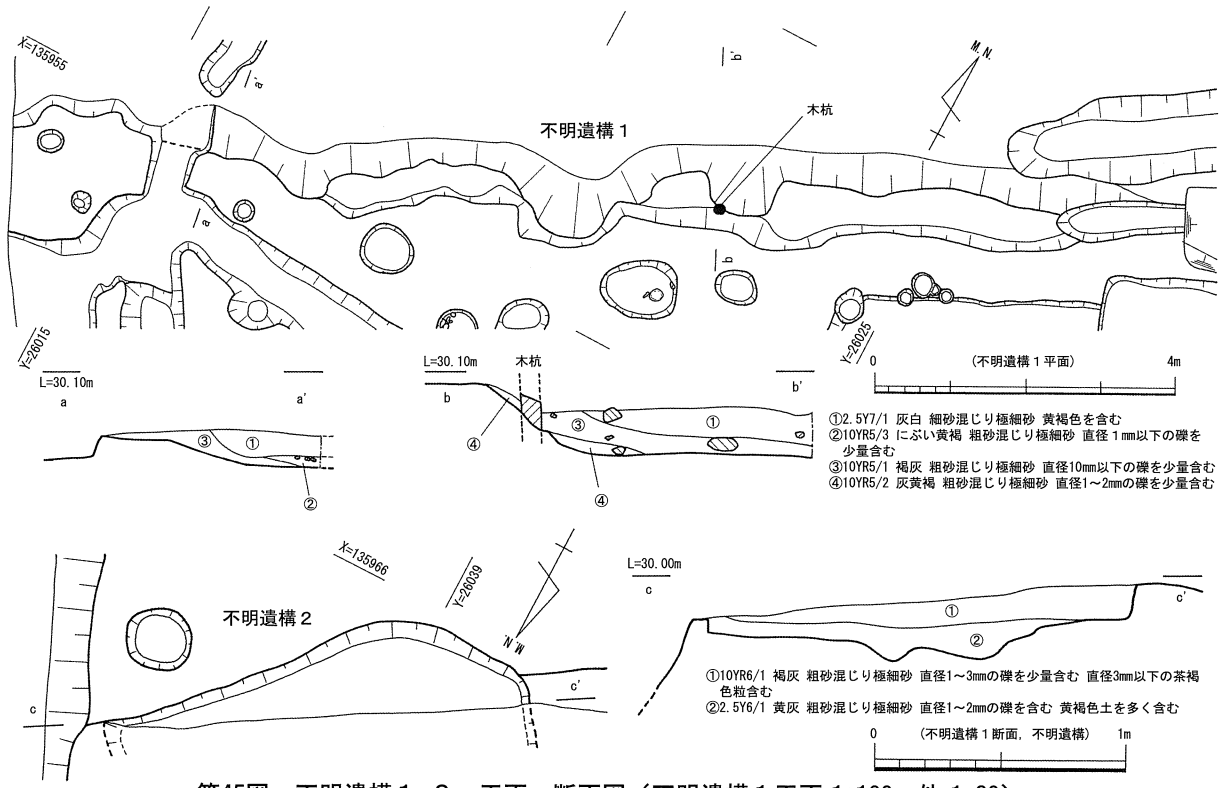
調査区南西側で検出された。主軸は磁北から約72度東偏する。平面は不整な楕円形を呈し、長径1.02m、短径0.72m、深さ0.13mを測り、断面は浅い逆台形を呈する。底面はほぼ水平である。埋土は上下２層に分かれるが、いずれも水平堆積している。遺物は須恵器細片が少量出土した。

土坑３（SK-03）

調査区南西端、土坑２のすぐ西側で検出された。主軸は磁北から約48度東偏する。平面はくびれた不整な楕円形を呈する。長径0.84m、短径0.43m、深さ0.16mを測り、断面は椀形を呈する。埋土は複数の土層に分層することが可能で、土砂の複雑な流入が読み取れる。遺物は須恵器細片が１点のみ出土している。



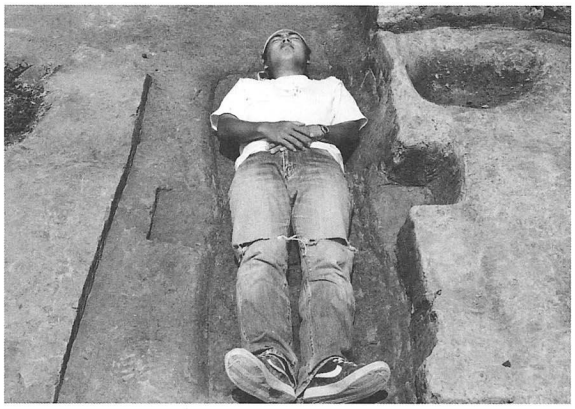
第44図　土坑２・３・４　平面・断面図（1:20）



第45図　不明遺構１・２　平面・断面図（不明遺構１平面 1:100，他 1:30）

土坑４（SK-04）

調査区北端、竪穴住居５の東辺と重複して検出された（第44図）。竪穴住居５が構築される以前の遺構である。削平が激しいため、検出当初から確認できなかった。掘り方が２段になっていること、断面形が箱形になっていること、その規模などから、木棺墓であった可能性が高い（第46図）。主軸は磁北から約17度西偏する。平面は長方形で中央部が若干くびれる。木棺は内法で長辺1.67m、短辺0.46m、残存する深さ0.09mを測る。墓壙は半分以上が竪穴住居５のために削平されている。平面は隅丸方形で、木棺を納められる最低限の広さしか掘削されていない。長辺1.80m、短辺0.64mを測る。遺物は埋土上層から土師器細片が少量出土したのみで、遺構の時期は不明であるが竪穴住居５の築造以前であることから、弥生時代のものであると推測できる。



第46図　土坑４　埋葬想定風景

⑥　不明遺構

明確な性格が分からなかった遺構を不明遺構と一括した。

不明遺構１（SX-01）

調査区南端で検出された段状の遺構である（第45図）。南側から北側にかけて平坦面と斜面が交互に階段状になっているが、平面形は蛇行している。基盤層を削り出し、平坦面を作っている。長さ7.80m、幅0.80m、比高差は約0.3mを測る。斜面部の１箇所では杭が打たれていた。

遺物は埋土上層より瓦類が出土したほか、須恵器・土師器が出土した（第56図）。

遺構の性格としては、田畑の耕作、畦の痕跡や、溝の片方の肩が崩れた状態などが推測できる。なお、先述のとおり調査時には西側を不明遺構１、東側を溝13と呼称していたが、整理段階において不明遺構１に統一した。

遺構の年代は出土遺物および他遺構との重複関係より７世紀代と考える。

不明遺構２（SX-02）

調査区南東端で検出された（第45図）。平面形はくの字状にくびれているが、北側が撹乱されており形状は不明である。長さ1.71m、残存幅0.38m、深さ0.3mを測る。底部は凸凹があり水平ではない。遺物は出土していない。

遺構の年代は他遺構との重複関係より７世紀代と考える。

第５節　遺物

①　土器・土製品

土器・土製品は、全部でコンテナ17箱分出土した。他に石器、瓦も出土したが、少数であったため、②③に一括して掲載した。

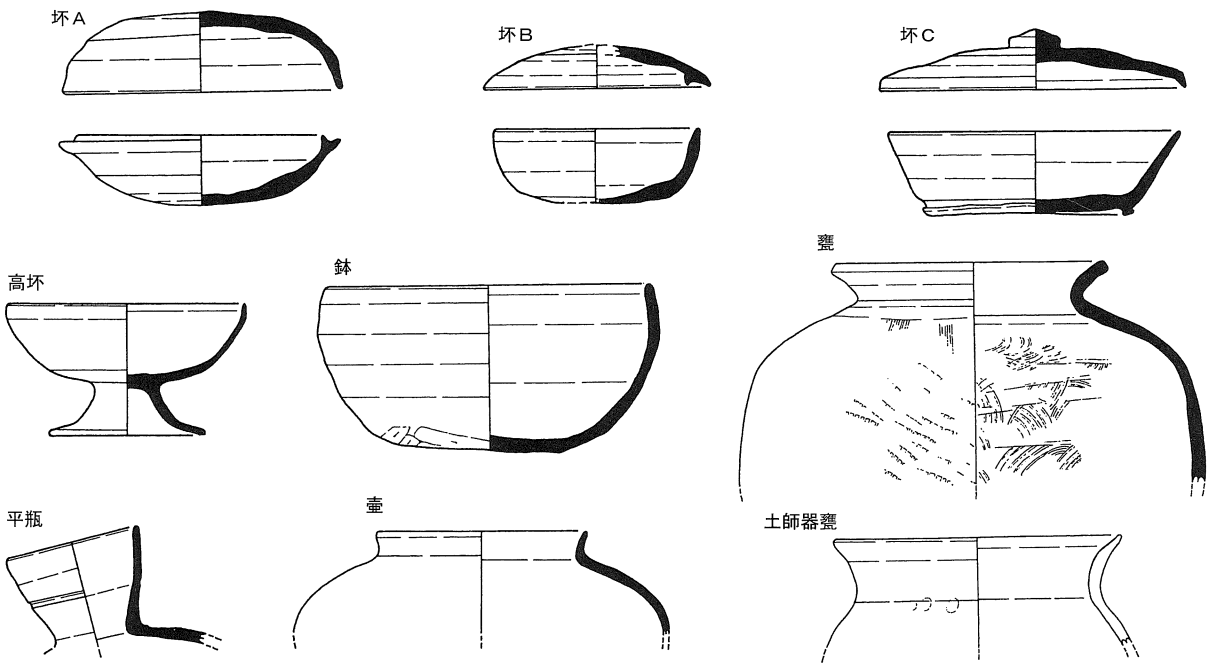
はじめに土器各器種の名称について提示しておく（第47図）。そのうち主流を占める須恵器坏類については、形式分類を行った。

坏Ａ　いわゆる古墳時代にみられるタイプの坏蓋・坏身。底部外面の調整は、回転ヘラ削りを施すものと、ヘラ切り未調整のものがある。

坏Ｂ　蓋は天頂部に摘み、口縁部にかえりが付く。身は高台をもたないタイプである。口径約12cm程度。身の底部は平坦なものから丸みを帯びるものまで様々な形態がある。底部外面の調整は、回転ヘラ削りを施すものと、ヘラ切り未調整のものがある。

坏Ｃ　身が高台をもつタイプ。蓋は天頂部に摘みが付く。つまみの形状は宝珠形のものや扁平なものまである。口縁部は、当遺跡から出土した個体はかえりをもたないものが大半である。口径約12～17.5cm程度。底部外面の調整は、回転ヘラ削りを施すものと、ヘラ切り未調整のものがある。

各形式の中でも技法・形態的な特徴からいくつかの細形式に細分されるが、当遺跡が小・中規模の消費地遺跡（集落遺跡）であり、窯跡のようなまとまった資料が大量に出土していないことや、各個体間での違いが著しいことなどから、あえて細分は行わなかった。



第47図　主要器種の名称と坏形式分類（甕は１：５，その他の器種は１：４）

須恵器の年代については、近年坂出市打越窯やさぬき市志度末窯などの発掘資料をもとに、既に様々な編年が試みられている（松本・岩橋1984・1985、佐藤1993・1997）。しかし最近更なる発掘調査資料の追加により、それまでの畿内編年（陶邑編年・飛鳥編年）から時期を判定する方法ではなく、香川県下の生産遺跡・消費遺跡出土須恵器をもとに編年が可能となってきている。本報告書では、最近報告された信里氏による分類を採用することとする（信里2002）。まず、分類について簡単に触れておく。信里氏は、生産地（窯跡）出土須恵器坏類をもとに形式分類を行い、各形式の消長を生産地（窯跡）遺跡・消費地（集落・墳墓）遺跡の資料から追っている。そしてその消長から様相を設定するものである。各形式の詳細については報告書を参照されたい（信里2002）。ちなみに信里報告書の形式分類における「蓋A」・「杯A」が本報告書の「坏A」、「蓋B」が「坏B蓋」、「杯B」・「杯C」が「坏B身」、「蓋C」・「蓋D」は「坏C蓋」、「杯D」は「坏C身」に相当する。信里分類では各形式を形態や技法より、さらに蓋A１形式・蓋A２形式・・・と細分している。各様相と凡その年代観は以下のとおりである。各様相の説明文中の器種は信里氏の器種名称に依る（信里2002）。なお畿内編年との併行関係や実年代については現在もなお流動的であり安易な比定は困難であり、現時点での見解にすぎないことを断っておく。

様相１　蓋A１形式、杯A１形式、蓋B１～B３形式、杯B１・B４・B６形式、高杯B１・B２形式が存在する。天井部・底部に回転ヘラケズリを施す蓋・杯A１形式が主流である。陶邑編年のTK217併行期（古段階）、飛鳥編年Ⅰ（７世紀前半）に相当する。

様相２　蓋A２形式、杯A２形式、蓋B１～B８形式、杯B１～B５形式、杯C１～C７形式、高杯A１～A３、高杯B１・B２形式、皿A１・A３・B１形式が存在する。蓋・杯A形式は本様相まで残存し、回転ヘラ切り未調整のA２形式で占められる。蓋B形式が様相１に比べ急速に増加する。口径は縮小傾向にあり、扁平器形の蓋B６・B７が出現する。杯Bは口径が縮小する。杯B１・B４形式に加えて比較的体部が深い杯B２・B３形式や、器高が低く皿型の杯B５形式が出現する。杯C形式は本様相より出現する。陶邑編年のTK217併行期（新段階）・TK46併行期、飛鳥編年Ⅰ新段階～Ⅱ古段階（７世紀中頃）に相当する。

様相３　蓋B１～B７形式、杯B１～B５形式、杯C１～C７形式、蓋C１～C６形式、蓋D１～D６形式、杯D１～D６形式、皿A１～A４・B１・B２形式、鉢A～C形式、台付椀A・B形式が存在する。蓋B形式は口径が小さいものは少数にとどまる。摘みは扁平な擬宝珠形を呈し、かえりも明確に突出するものはない。杯B形式は口径が大きくなり、器高が低く扁平な体部をもつものや、底部が明確な平底を呈するものも出現する。セット関係と思われる蓋C・D形式、杯D形式は本様相より出現する。杯D形式はD３・D４形式が主流である。陶邑編年のTK48併行期、飛鳥編年Ⅳ（７世紀後半～７世紀末）に相当する。

様相４　蓋D２～４・６形式、杯D２～４形式、杯B１・２形式、杯C５・C７・C８形式、高杯A１～A３・B２形式、皿A２・A３・C１・E形式が見られる。様相３の蓋B・蓋C形式は消滅する。蓋D形式はやや大型の扁平な摘みを施し、口縁端部が短く折り返されるD２・D６形式が主体となる。杯C形式は口径が大きくなり底部が平底化する。杯D形式は高台が低くなり、施される位置も底部中央より外側へ移動する。陶邑編年のTK21併行期、飛鳥編年Ⅴ（７世紀末～８世紀初頭）に相当する。

本報告ではこの編年を指標に出土土器を検討していくこととする。ただし信里氏も触れているように（信里2002)、良好な一括資料が現時点では存在していない部分もあり、様相の設定には更なる検討が必要である。例えば杯A形式の消滅時期が生産地ごとに異なる様相を示すことや、杯D形式の初現期と考えられる資料が若干ながら出土していることから最古段階の杯D形式をもつ様相（飛鳥編年Ⅲに相当）が存在する可能性などが挙げられる。また畿内編年との併行関係も直接的な比定は困難であり、須恵器形式の共伴状況および、消費地（集落）遺跡や墳墓で須恵器とともに出土する所謂畿内産土師器とその模倣品から推定している。さらに杯C形式については、畿内においては見られない形式である。これらのことから「部分的ではあるが併行関係を推定する手がかりは存在するが、あくまでも相対的な１点を共有する程度のもの（信里2002)」である。よって本報告書では基本的に信里編年に準拠するが、部分的に畿内編年も交えて検討していくこととする。

竪穴住居出土遺物（第48図）

竪穴住居は、竪穴住居１から竪穴住居９まで検出されたが、遺物が出土したのは、竪穴住居１・２・４・５・８・９である。床面直上からの出土が多いが、破片が多く、原位置を保っていたものはほとんどない。

【竪穴住居２】

床面から、須恵器坏A蓋（１・２)、坏A身（３～６)、坏C身（７）が出土した。坏A蓋（１・２)は天頂部が高く丸みをもつ形状である。(１)は天頂部に左回りのヘラ削りを施す。坏A身(３～６)は、いずれも口縁端部立ち上がりが短い。(３)は陶邑編年のTK209併行期、(５・６)はTK217併行期に相当する。坏C身（７）は、高台部のみ残存する。高台は断面長方形で外側に踏ん張る。様相４に該当するが細片であり他の遺物と年代が異なるため、混入である可能性が考えられる。

竈内からは、土師質土玉（８)、土師器甑（９）が出土した。土師質土玉（８）は、直径0.7～0.8㎝、厚み0.6㎝を測る。中央に穿孔を施す。甑（９）は体部の一部と把手のみ残存する。断面は楕円形を呈し、先端がわずかに上方を向く。体部には把手貼り付けのための指押さえ痕がみられる。

竪穴住居２は概ね様相１（７世紀前半）と推定される。

【竪穴住居４】

床面から、土師器甕口縁部（12）が出土した。端部は丸く収めやや外反する。

竈内からは、須恵器坏B身（10)、台付壺（11）が出土した。坏B身（10）は口縁端部付近でわずかに屈曲する。台付壺（11）は脚部下半のみ残存する。脚部端部は肥厚しやや上方外側につまみ出す。

【竪穴住居５】

埋土から、須恵器坏A蓋（15)、坏B身（16・18）が出土した。坏A蓋（15）は、天頂部がやや扁平で回転ヘラ削りを施す。体部から口縁部にかけては緩やかに屈曲する。坏B身（16・18）は口縁部のみ残存する。(16）は口縁端部内面に面を持ち、やや外反する。(18）は内弯し、口縁端部は内面がわずかに凹み玉縁状の形状を呈す。

床面からは、須恵器坏A身（13)、甕（19)、土師器（22）が出土した。坏A身（13）は口縁端部

の立ち上がりが短い。陶邑編年のTK217併行期に相当する。甕（19）は口縁端部が外側に折れる。土師器（22）は端部を丸く収める。

竈内からは、須恵器坏A身（14・17）、土師器甕（20・21）が出土した。坏A身で（14）は口縁端部の立ち上がりが短い。（17）は底部のみ残存する。ヘラ切り後、未調整である。土師器甕（20・21）は、口縁部を横ナデする。端部は丸く収めやや外反する。（20）は二次焼成痕があり、出土状況からも竈内で使用されていた可能性がある。

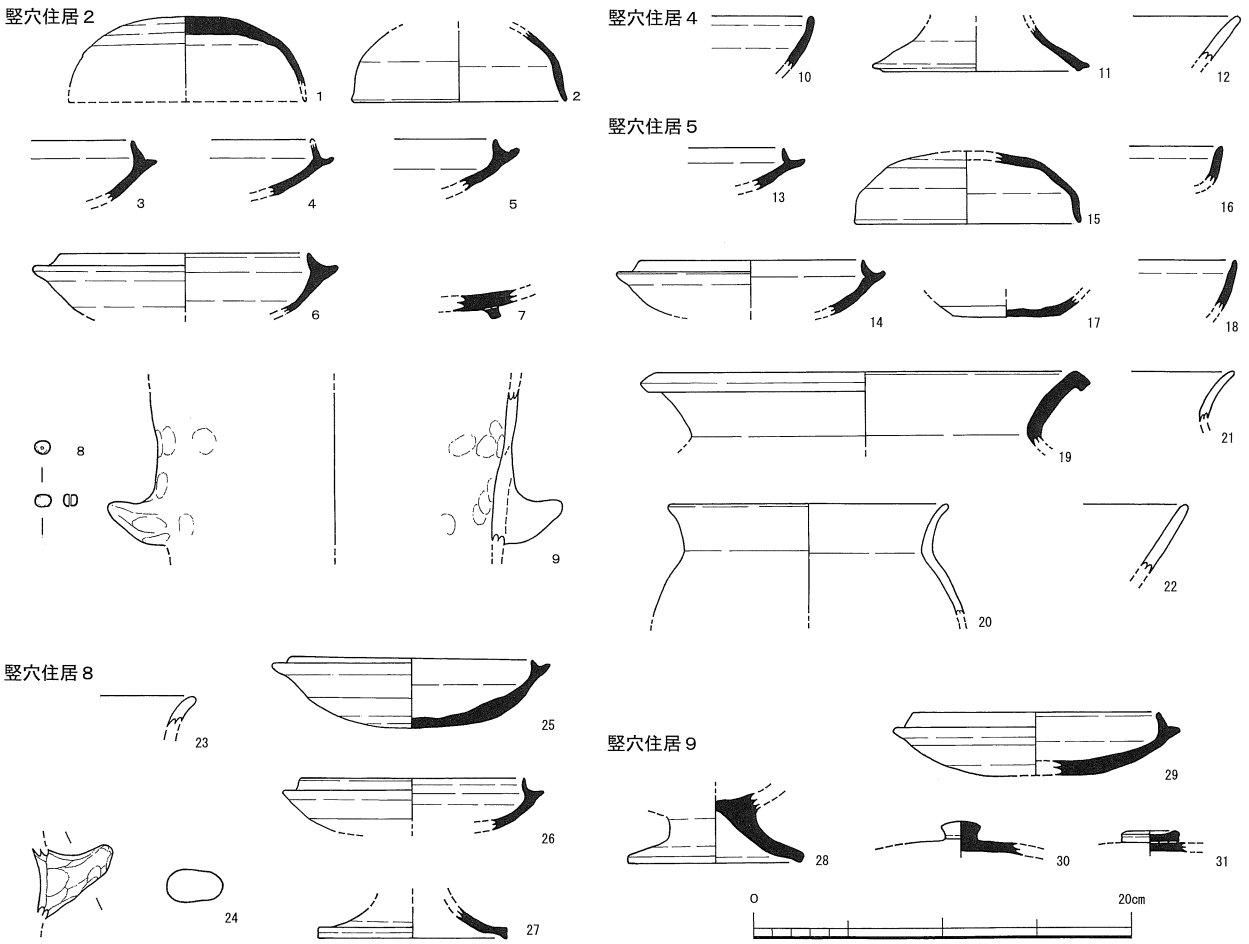
竪穴住居５は様相１～様相２（７世紀前半～中頃）に推定される。

【竪穴住居８】

埋土から、須恵器坏A身（26）、高坏（27）、土師器甕（23）、土師質煮炊具把手（24）が出土した。坏A身（26）は口縁端部の立ち上がりが短い。底部は回転ヘラ削りを施す。陶邑編年のTK217併行期に相当する。高坏（27）は脚部下半のみ残存する。脚部端部は下方につまみ出す。土師器甕（23）は、口縁端部のみ残存し丸く収める。土師質煮炊具把手（24）は断面が楕円を呈し、先端はわずかに上方を向き、丸みを帯びる。

床面からは、須恵器坏A身（25）が出土した。口縁端部は立ち上がりが短い。底部はやや扁平で左回りの雑なヘラ削りを施す。陶邑編年のTK217併行期に相当する。

竪穴住居８は、様相１（７世紀前半）に該当すると考えられる。



第48図　竪穴住居出土遺物実測図（１：４）

【竪穴住居９】

埋土から、須恵器坏C蓋（30・31）が出土した。(30）は天頂部に回転ヘラ削りを施し、押し潰された乳頭形のつまみを貼り付ける。天頂部のみ残存しており、坏B蓋になる可能性もある。(31）はつまみ部のみ残存する。つまみの形状は扁平で天頂部が凹む。様相４に該当する。

床面からは、須恵器坏A身（29)、高坏（28）が出土した。坏A身（29）は、口縁端部の立ち上がりが短い。底部はやや扁平で左回りのヘラ削りを施す。陶邑編年のTK209併行期に相当する。高坏（28）は脚部のみ残存する。低脚である。脚部端部は面を持つ。

竪穴住居９は埋土と床面の遺物とで時期差がみられる。床面出土遺物は様相１（７世紀前半）に該当する。

溝出土遺物

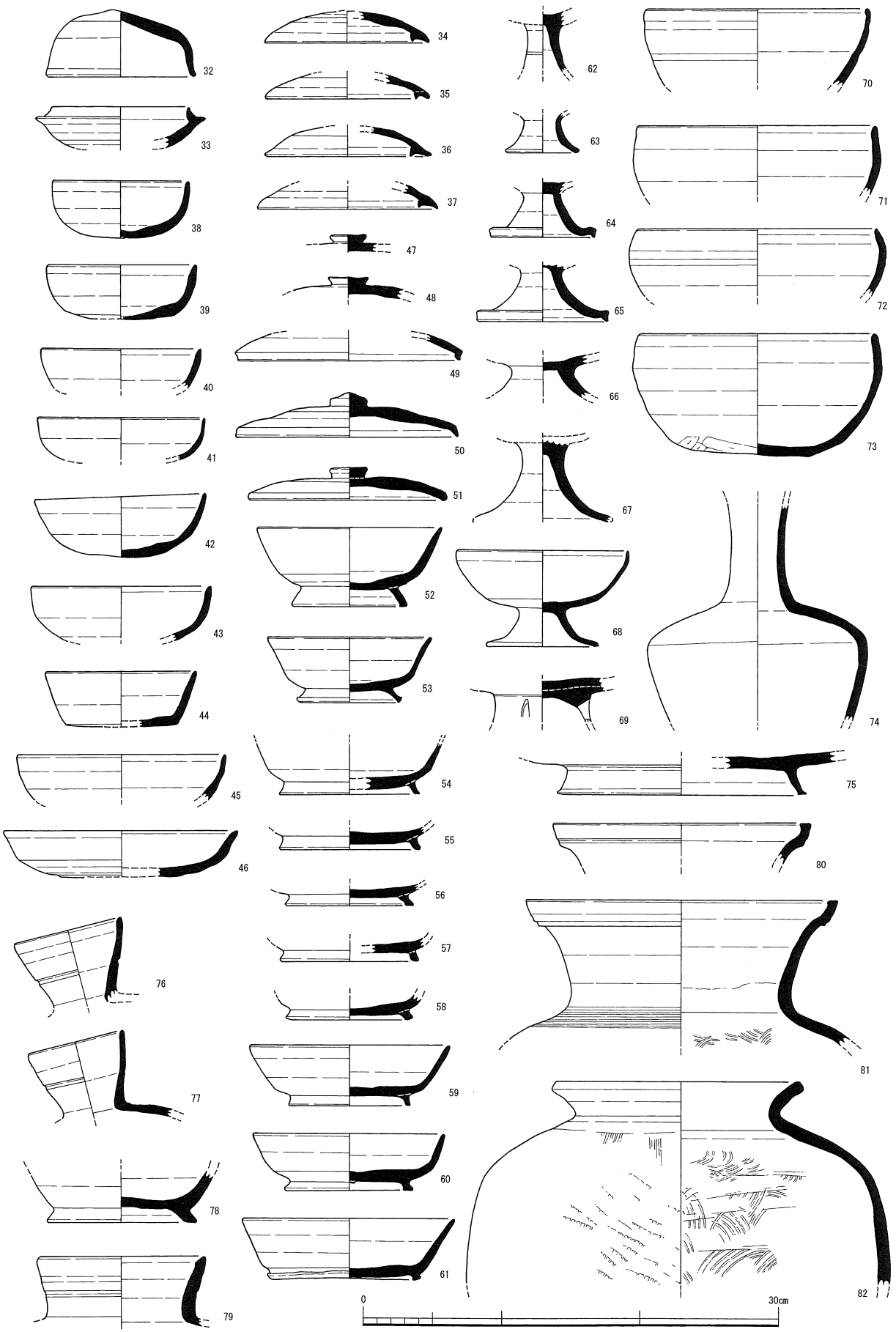
溝埋土中より多数の遺物が出土した。中でも、溝１・２からは完形に近い遺物が多量に出土している。その一方、溝７・９からは全く出土していない。

【溝１】（第49・50図）

当遺跡のなかで溝からは多くの遺物が出土したが、その中で最も出土量が多かったのが、溝１である。

埋土上層から、須恵器坏A身（33)、坏C蓋（47)、坏C身（60）が出土した。坏A身（33）は、復元口径が9.80cmと小さく、口縁端部立ち上がりは短い。底部に回転ヘラ削りを施す。陶邑編年のTK217併行期に相当する。坏C蓋（47）はつまみ部のみ残存する。扁平な形状である。坏C身（60）は、底部から体部にかけてやや丸みをもち、口縁部にかけてわずかに外側に開く形状である。高台は台形を呈し、底部のやや内側に取り付く。様相３に相当する。

埋土中は、須恵器坏A蓋（32)、坏B蓋（34～37)、坏B身（38～46)、坏C蓋（48～51)、坏C身（52～59・61)、高坏（62～69)、鉢（70～73)、長頸壺（74)、台付盤皿B（75)、平瓶（76・77)、台付壺（78)、短頸壺（79)、甕（80～82)、土師器甕（84・86・89)、土師質煮炊具把手（88)、土師質蛸壺（87)、土師質竈（90)、弥生土器甕（83・85）が出土した。坏A蓋（32）は、天頂部が高く丸みをもつ形状である。口縁端部はやや外側に外反する。天頂部に回転ヘラ削りを施す。陶邑編年のTK217併行期に相当する。坏B蓋（34～37）は、いずれも口縁部若しくは天頂部までで、つまみ部は残存していない。口径は復元径であり、坏C蓋になる可能性もある。(34～36）は、天頂部に回転ヘラ削りが確認できる。坏B身（38～46）のうち、(44）のみ底部から体部にかけて直に立ち上がる。残りの個体は底部から体部にかけて丸みを帯びる。各個体の形状は、口縁端部や体部・底部ともにまちまちである。底部の調整は、(39）はヘラ切り未調整、(42・44・46）は回転ヘラ削りを施す。坏C蓋（48～51）のうち、(48）はつまみ部のみ残存する。扁平で天頂部が凹んだ形状である。(49）は口縁部のみ残存する。かえりのない形状で端部は直に折れた後、やや外側につまみ出す。(50）はほぼ完形で口縁はやや外側に折れ、端部は先細りである。つまみは宝珠が扁平に潰された形を呈す。天頂部は回転ヘラ削りを施す。(51）もほぼ完形である。口縁端部の屈曲は不明瞭で、端部が若干内側に曲がり丸く収める。つまみは扁平で天頂部がわずかに下に凹んだ形状である。天頂部は回転ヘラ削りを施す。坏C身（52～59・61）は、高台の形状をみると３段階に分類される。(52・53）は高台が長く下方外側に張り出している。底部は回転ヘラ削りを施す。(52）



第49図　溝１出土遺物実測図①（１：４）

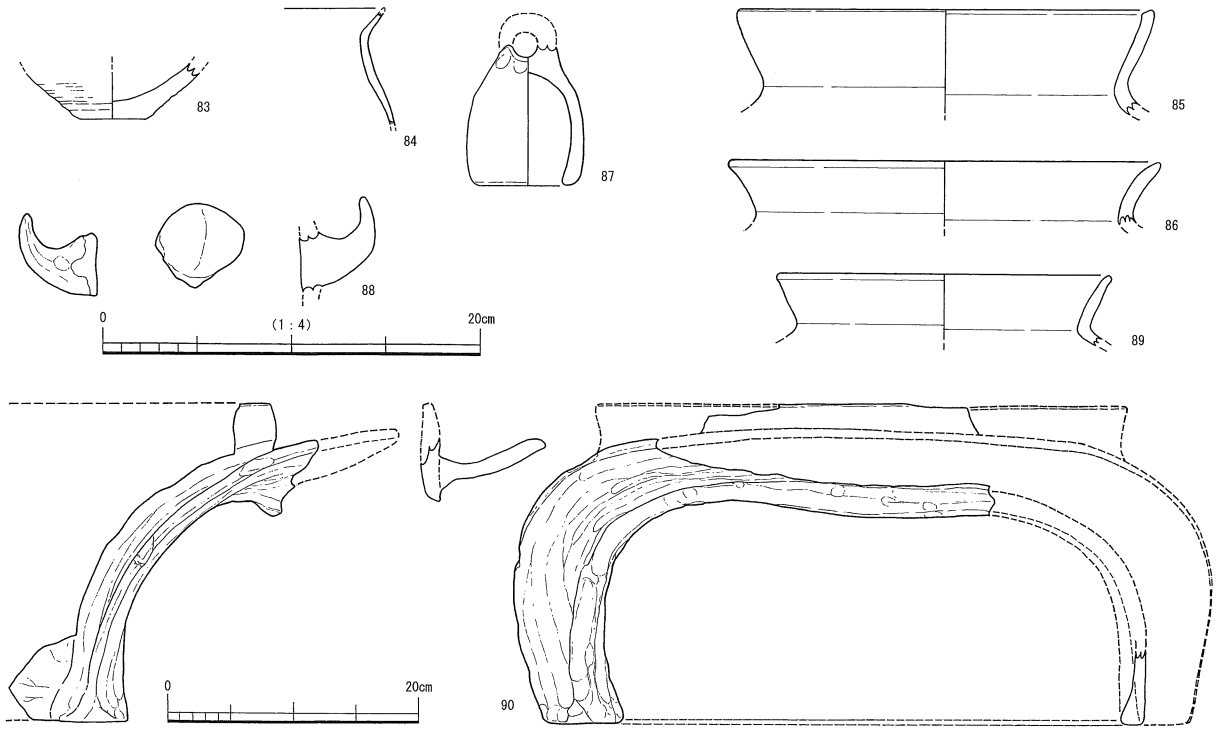
は底部から体部にかけて丸みを帯び、口縁は若干外反し端部は先細りである。坏部は器高4.0cmと深い。高台はわずかに内弯している。(53) は体部が底部付近から屈曲し、口縁にかけて外反する。口縁端部も外反し丸く収める。高台は外反し端部は肥厚する。(54～58) は高台がやや短く外側に張り出している。(54) は体部下半で屈曲する。(54・55・58) は底部に回転ヘラ削りを施す。(56) はヘラ切り未調整である。(59・61) は高台が短い。底部から体部にかけて直に屈曲し、口縁部にかけて外側に直線的に開く形状である。底部は回転ヘラ削りを施す。(59) は高台が底部のやや内側に取り付く。(61) は高台がかなり短く、底部から体部にかけての屈曲部分に貼り付く。(52・53) は飛鳥編年Ⅲ、(54～58) は様相３（飛鳥編年Ⅳ)、(59・61) は様相４（飛鳥編年Ⅴ）に該当する。高坏 (62～69) はいずれも脚部のみ残存し、長脚のもの (62・67) と低脚のもの (63～66・68・69) とがある。(62) は脚部中央付近に沈線を一条有す。(63・68) は脚部短部を丸く収める。(68) の坏部は口縁部がやや内弯し端部を丸く収める。(64・65) は脚部端部を下方につまみ出す。(69) は三方に三角形の透かしが入る。鉢 (70～73) はいずれも口縁部付近で内弯し張る。(70) は口縁端部を丸く収める。(71～73) は口径がほぼ同じで口縁端部は緩やかな面をもつ。(73) は底部まで残存しており手持ち削りを施す。いずれも焼成は不良である。様相３に相当する。長頸壺 (74) は肩部が丸みを帯び、やや張る形態である。飛鳥編年Ⅳに該当する。台付盤皿B (75) は底部に回転ヘラ削りを施す。高台は外側に張り出す。平瓶 (76・77) はいずれも頸部のみ残存する。わずかに内弯し、沈線が一条入る。台付壺 (78) は高台から底部下半にかけて残存する。高台はハの字状に開く。(74) と同一個体の可能性がある。短頸壺 (79) は口縁部から頸部まで残存する。口縁はやや外側に開き、端部は内面に面をもつ。甕 (80～82) のうち (80・81) は口縁部付近で屈曲し端部は平坦な面をもつ。(81) は体部外面にカキ目、内面に同心円の当て具痕が確認できる。(82) は頸部から口縁部にかけて直線的に外反し、端部は外面に面をもつ。体部外面は平行叩きを施し、内面は同心円の当て具痕の後横方向のスリ消しを施す。土師器甕 (86・89) は口縁部が外反し、端部は丸く収める。(84) は甕体部である。調整は磨滅のため不明である。土師質煮炊具把手 (88) は屈曲し先端は上方を向き、丸みを帯びる。飛鳥Ⅳ～Ⅴに該当すると考えられる。土師質タコ壺 (87) は、釣鐘形イイダコ壺。吊手部上半が欠損している。吊手部下半には指オサエ痕が残り、吊手部は体部から作り出したものと推定する。内面にはナデ痕が残る。縄孔の復元径は1.3cmである。土師質竈 (90) は、掛口・庇・炊口・基部の一部が残存する。掛口は直線的に立ち上がり端部がやや内傾する。庇は付け庇である。庇はやや上方にせり出す。庇より掛口が高い。炊口は真ん中が凹んだ半円形を呈する。調整はナデ調整である。

弥生土器は３点出土した。(83) は甕底部である。外面にタタキを施す。(85) は甕口縁部である。端部に面を持ち、やや内弯する。

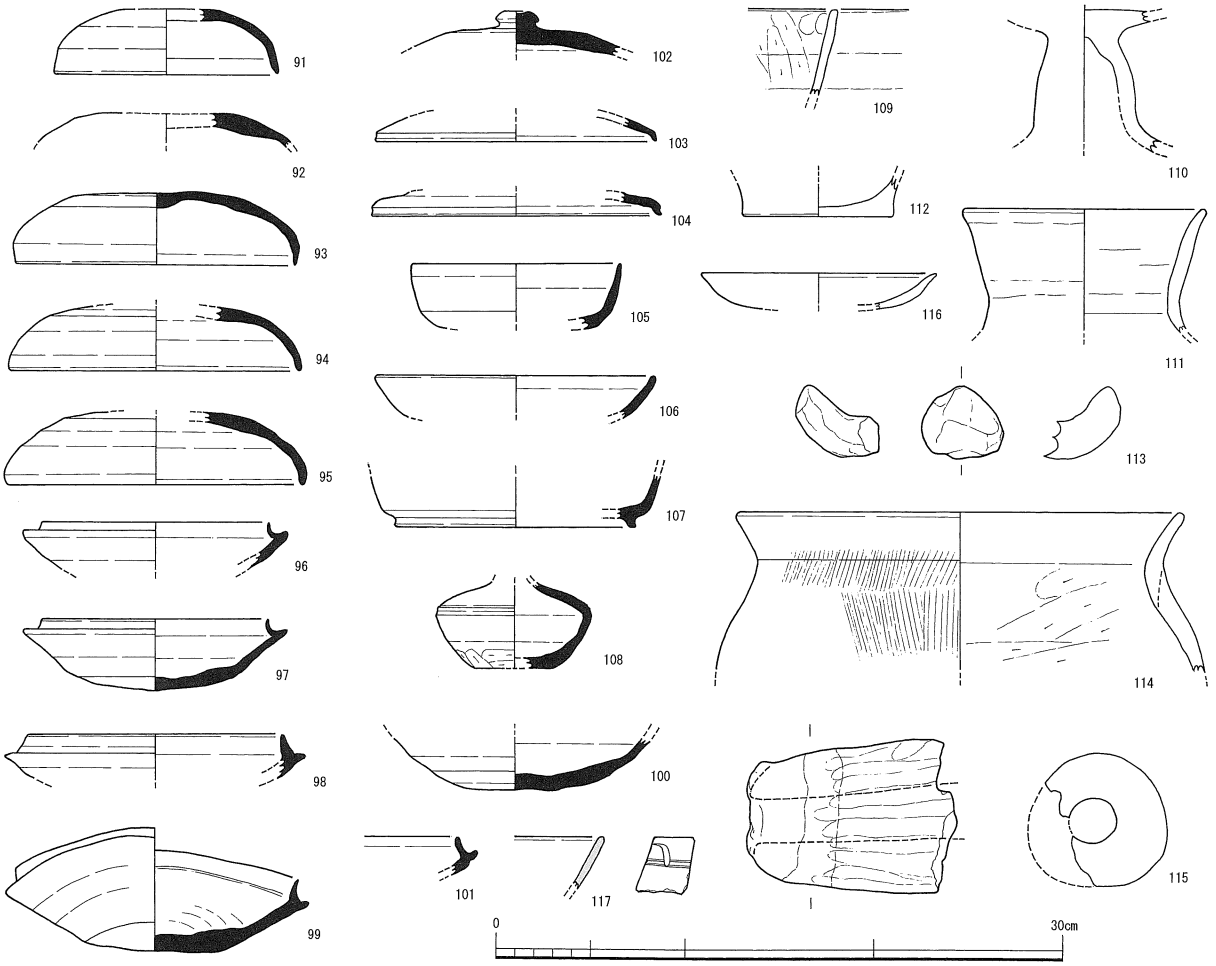
溝１は、７世紀後半を中心に、様相２～様相４（７世紀中頃～８世紀初頭）の年代であると考えられる。

【溝２】（第51図）

埋土上層から、須恵器坏A蓋 (91・94・95)、坏A身 (97・99・100)、高坏蓋 (102)、瑕 (108)、土師質甑 (109)、土師器甕 (114)、土師質フイゴ羽口 (115)、弥生土器高坏 (110)、弥生土器壺 (111) が出土した。須恵器坏A蓋 (91・94・95) のうち (91) は復元口径が12.0cm、(94・95) は15.5～15.8cmである。底部は回転ヘラ削りを施す。(94・95) は陶邑編年のTK217併行期に該当する。坏A身 (97・99・100) のうち (97・100) は底部に回転ヘラ削りを施す。(99) はヘラ切り未



第50図　溝１出土遺物実測図②（１：４，No.90のみ１：６）



第51図　溝２出土遺物実測図（１：４）

調整である。焼け歪みが著しい。立ち上がりは短い。高坏蓋（102）はつまみと天頂部のみ残存する。つまみは宝珠がつぶれた扁平な形状をしている。天頂部は回転ヘラ削りを施す。瑳（108）は肩部で屈曲し、底部は平底を呈す。底部外面は手持ちヘラ削りを施す。肩部に三条の沈線が入る。甑（109）は口縁部のみ残存する。粘土紐の単位が確認できる。土師器甕（114）は口縁部がやや外反し端部は丸く収める。体部外面はハケを内面は板ナデおよび削りを施す。フイゴ羽口（115）は外面先端に融解物が付着しており、実際に使用していたとみられる。（第４章）弥生土器高坏（110）は脚部のみ残存する。弥生土器壺（111）は口縁部のみ残存する。

埋土中は、須恵器坏A蓋（92・93）、坏A身（96・98・101）、坏B身（105・106）、坏C蓋（103・104）、坏C身（107）、土師器皿（116）、土師質煮炊具把手（113）、弥生土器壺（112）、青磁埦（117）が出土した。坏A蓋（92・93）は天頂部に回転ヘラ削りを施す。（93）は口縁部が内弯する。坏A身（96・98・101）は口縁部のみ残存する。（96・101）は立ち上がりが短い。陶邑編年のTK217併行期に該当する。（98）は立ち上がりがやや厚く、突出する。坏B身（105・106）は口縁部から体部にかけて残存する。坏C蓋（103・104）は口縁部のみ残存する。口縁は屈曲し、（104）は端部を下方外側につまみ出す。坏C身（107）は底部から体部にかけてほぼ直に立ち上がる。短い高台が貼り付く。皿（116）は口縁部が外側に開く。土師質煮炊具把手（113）は断面が楕円を呈し、先端はわずかに上方を向き、丸みを帯びる。弥生土器壺（112）は底部のみ残存する。青磁埦（117）は口縁部のみ残存する。紋様（劃花紋）から龍泉窯のものであり12世紀代に該当する。混入であると考えられる。

溝２は様相１・様相２（７世紀前半～７世紀中頃）を中心に、様相１～様相４（７世紀前半～７世紀末）の年代が考えられる。

【溝３】（第52図）

埋土中から、弥生土器壺（118・120）、須恵器台付壺（119）が出土した。（118）は口縁部に凹線紋を三条巡らす。（120）は口縁内面に竹管紋と円形浮紋を巡らす。（119）は高台のみ残存する。（118・120）は弥生時代後期に該当する。（119）は高台のみ残存する。外側に開き端部は肥厚する。混入と考えられる。

溝３は、弥生時代後期と推定される。

【溝４】（第52図）

埋土中から、弥生土器壺（121・122）が出土した。口縁部に凹線紋を巡らす。弥生時代後期に該当する。

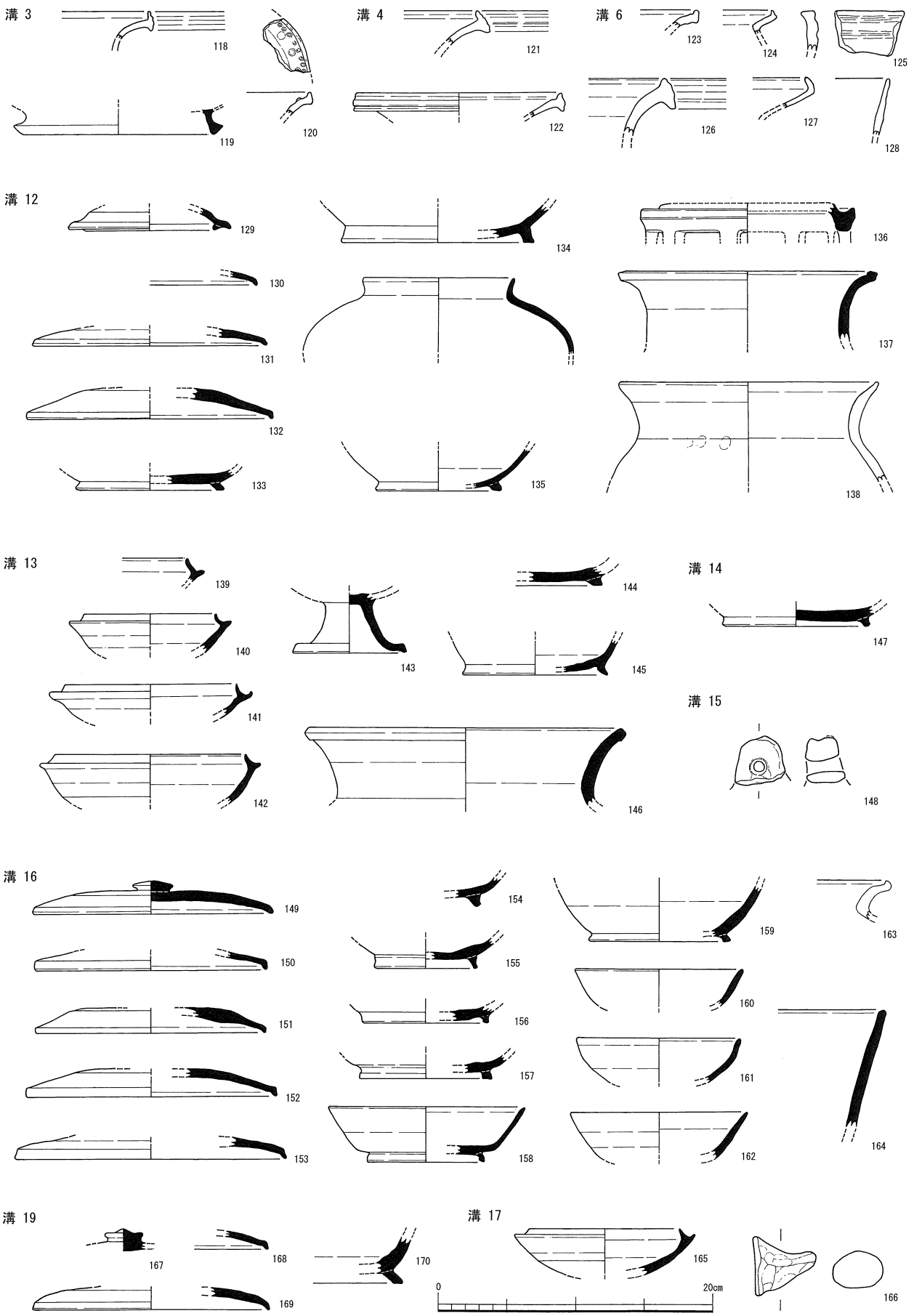
【溝６】（第52図）

弥生土器高坏（127）、弥生土器壺（125・126）、弥生土器甕（124・128）、土師器甕（123）が出土した。（127）は口縁部が内側に屈曲する。弥生時代後期に該当する。（125）は口縁部のみ残存する。強いナデを施す。（126）は口縁部に凹線紋を三条巡らす。（124）は口縁部のみ残存する。弥生時代後期に該当する。（128）は口縁部のみ残存する。（123）は口縁端部のみ残存する。端部は面をもち上方につまみ出す。他の遺物との年代から混入であると考えられる。

溝６は、弥生時代後期と推定される。

【溝12】（第52図）

埋土中から、須恵器坏B蓋（129）、坏C蓋（130～132）、坏C身（133）、台付壺（134）、小形台付壺（135）、甕（137）、須恵質円面硯（136）、土師器甕（138）が出土した。坏B蓋（129）は短いか



第52図　溝３～19出土遺物実測図（１：４）

えりが取り付く。坏C蓋（130～132）のうち（130・131）は、口縁端部にかけての屈曲が丸みを帯び、やや鈍角に折れる。（132）は口縁端部にかけての屈曲が鋭く、直に下方へ折れる。底部は平坦である。７世紀末と考えられる。坏C身（133）は底部のみ残存する。外側に踏ん張った形状の高台が貼り付く。７世紀末と考えられる。台付壺（134）は底部のみ残存する。高台は長く外側に踏ん張っている。小形台付壺（135）は口縁がやや外側に開き、端部を丸く収める。肩部は丸みを帯びる。底部は、短くハの字に広がった高台が貼り付く。甕（137）は口縁部から頸部にかけてのみ残存する。頸部はやや直に立ち上がり、口縁部で屈曲し外傾する。端部は面をもつ。円面硯（136）は片桐分類の円面硯Ⅲ－Ｃ類に属する（片桐1995）。８世紀代のものである。溝２からも破片で出土しており同一個体と推測される。土師器甕（138）は口縁部から体部上半にかけて残存する。頸部はやや直線的にたちあがり口縁部付近でやや外反する。端部はわずかに緩やかな面をもつ。飛鳥Ⅳと考えられる。

溝12は、様相３～様相４（７世紀後半～７世紀末）と推定される。

【溝13】（第52図）

埋土中から、須恵器坏A身（139～142）、坏C身（144・145）高坏（143）、甕（146）が出土する。坏A身（139～142）はすべて受け部立ち上がりが短く内傾する。陶邑編年のTK217併行期に該当する。（142）は底部に回転ヘラ削りを施す。坏C身（144・145）は底部のみ残存する。（144）は短い高台が貼り付く。（145）は細い高台をつまむ様に貼り付ける。様相４と推定される。高坏（143）は脚部のみ残存する。短脚で端部はつまみ面をもつ。甕（146）は口縁端部を折り返し肥厚する。

溝13は、様相１～２（７世紀前半～中頃）と様相４（８世紀初頭）に位置付けられる。

【溝14】（第52図）

埋土中から、須恵器坏C身（147）が出土した。底部のみ残存する。高台は短く、ややハの字状に貼り付く。様相４（８世紀初頭）と考えられる。

【溝15】（第52図）

埋土中から、土師質タコ壺（148）が出土した。イイダコ壺である。吊手部のみ残存している。残存部位から吊手部は体部から作り出されたものと推測する。吊手部上面には備讃瀬戸地域に特徴的な、溝状の凹みがみられる（乗松2004）。凹みはナデによってしっかりと形成されている。縄孔の直径は1.1cmである。

【溝16】（第52図）

埋土中から、須恵器坏B身（160～162）、坏C蓋（149～153）、坏C身（155～158）、台付壺（154・159）、鉢（164）、土師器甕（163）が出土した。坏B身（160～162）は端部を丸く収め外傾する。坏C蓋（149～153）はいずれも口縁端部で屈曲しかえりをもたない。様相４に相当する。（149・151・152）は天頂部に回転ヘラ削りを施す。（149）は扁平な宝珠形のつまみを貼り付ける。坏C身（155～158）のうち（155～157）は底部のみ残存する。短い高台を貼り付ける。（158）は底部から体部にかけてやや鋭く屈曲し、大きく外傾する。高台は短く底部やや内側に取り付く。様相４に該当する。台付壺（154・159）は短い高台がハの字状に貼り付く。（159）は体部下半が丸みを帯びる。鉢（164）は直線的に外傾し、口縁端部は面を持つ。土師器甕（163）は頸部で屈曲し大きく外反する。口縁端部は内側に巻き込む。飛鳥編年Ⅴに相当する。

溝16は、様相４（７世紀末～８世紀初頭）と推定される。

【溝17】（第52図）

埋土中から、須恵器坏A身（165）、土師質煮炊具把手（166）が出土した。坏A身（165）は受け部立ち上がりが短く、底部はヘラ切り後ナデを施す。様相２に該当する。煮炊具把手（166）は楕円形の断面を呈し、先端はわずかに上方を向く。

溝17は、様相２（７世紀中頃）と推定される。

【溝19】（第52図）

埋土中から、須恵器坏C蓋（167～169）、台付壺（170）が出土した。167は天頂部のみ残存する。扁平な宝珠形のつまみを貼り付ける。（168・169）は口縁端部で屈曲しかえりをもたない。（169）は天頂部に回転ヘラ削りを施す。３個体とも様相４（７世紀末）に該当する。台付壺（170）はハの字状に踏ん張った高台が貼り付く。

土坑出土遺物（第53図）

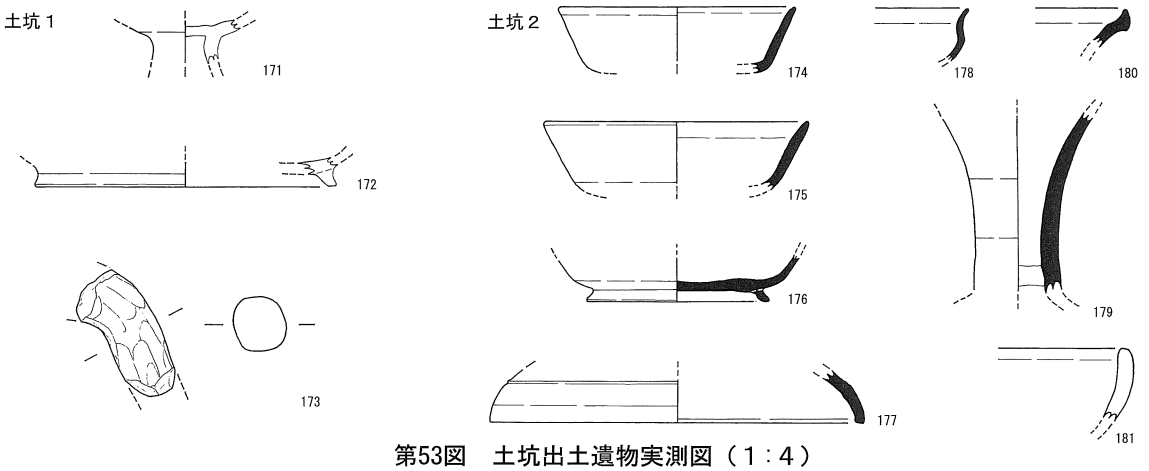
【土坑１】

埋土から、土師器高坏（171）、台付坏（172）、土師器鍋（173）が出土した。（171）は坏部と脚部との接合部分、（172）は高台、（173）は脚部のみ残存する。

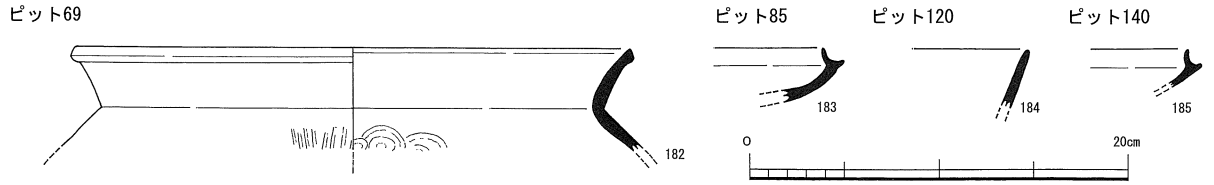
【土坑２】

埋土中から、須恵器坏B（174・175）、坏C身（176）、台付壺（177）、小形埦（178）、長頸壺（179）、甕（180）、土師器鉢（181）が出土した。坏B（174・175）は大きく外傾し口縁端部は丸く収める。（175）は坏C身の可能性もある。坏C身（176）は底部から体部にかけてやや丸みをもち、短い高台がハの字状に貼り付く。台付壺（177）は脚部のみ残存する。膨らみをもち沈線が一条巡る。端部は平坦な面をもつ。小形埦（178）は頸部で屈曲し、口縁は外反し端部を丸く収める。長頸壺（179）は頸部のみ残存する。甕（180）は口縁部のみ残存する。土師器鉢（181）は、内弯し端部はわずかに肥厚する。

土坑２は、様相３（７世紀末）と推定される。



第53図　土坑出土遺物実測図（１：４）



第54図　ピット出土遺物実測図（1：4）

ピット出土遺物（第54図）

【ピット69】

埋土下層から、須恵器甕（182）が出土した。口縁端部は面をもつ。体部外面は平行叩きを施し、内面には同心円の当て具痕が残る。

【ピット85】

埋土中から、須恵器坏A身（183）が出土した。受け部立ち上がりは短い。陶邑編年のTK217併行期（新段階）に相当する。

【ピット120】

埋土中から、須恵器坏C身（184）が出土した。口縁部のみ残存する。直線的に外傾し端部は丸く収める。

【ピット140】

埋土中から、須恵器坏A身（185）が出土した。受け部立ち上がりは短い。陶邑編年のTK217併行期（新）に相当する。

不明遺構出土遺物（第55図）

【不明遺構１】

埋土中から、須恵器坏A蓋（186）、坏A身（187）、坏B蓋（195）、坏B身（188～190）、坏C蓋（196～198）、坏C身（191・194・199～204）、高坏（192・193）、壺（205・206・211）、台付壺（212）、甕（207～210・213・214）が出土した。坏A蓋（186）は天頂部に雑な回転ヘラ削りを施す。坏A身（187）は、受け部立ち上がりが短い。坏Aは陶邑編年のTK217併行期に該当する。坏B蓋（195）は口縁部のみ残存する。坏B身（188～190）のうち、（188）は体部が外反する。（189・190）は体部が内弯する。坏C蓋（196～198）はいずれも口縁部で屈曲しかえりをもたない。（198）は残存部から推測して天頂部が丸みを帯びたドーム形の形状となる。７世紀末～８世紀初頭に位置付けられる。坏C身（191・194・199～204）のうち（191）は体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。（194・199～203）は底部のみ残存する。（194）は台付壺になる可能性もある。（199～203）はいずれも断面が方形の短い高台をややハの字状に底部に貼り付ける。（204）は底部から体部にかけて鋭く屈曲し口縁部にかけて直線的にわずかに外傾する。口縁端部はやや先細りする。底部は回転ヘラ削りを施し、短い高台を貼り付ける。８世紀初頭と考えられる。高坏（192・193）は脚部のみ残存する。（193）は、端部が屈曲し面をもつ。壺（205・206・211）のうち、（205・211）は小形で口縁端部外面に面をもつ。（206）は頸部から口縁部にかけて直線的に外傾する。台付壺（212）は脚部のみ残存する。膨らみをもち踏ん張った形状をしている。端部は平坦な面をもつ。沈線が一条巡る。甕（207～210・213・214）のうち、（207）は口縁端部を丸く収める。（209・214）は口

縁端部外面に緩やかな面をもつ。(214) は頸部外面にカキ目を体部外面に平行叩きを施す。体部内面は同心円の当て具痕が残る。(208) は外反し口縁端部を内側に巻き込む。(210) は口縁端部を上方につまみあげ、端部外面は面をもつ。(213) は外反し、口縁端部を折り返し玉縁状に肥厚する。口縁部から頸部にかけて外面にカキ目を施す。

不明遺構１は様相１～４（７世紀前半～８世紀初頭）に推定される。

【不明遺構22】

埋土中から、須恵器台付埦 (215) が出土した。肩部で鋭く屈曲する。口縁端部は外側につまみ出す。

② 石器

石器は、計２点出土した（第56図-215・216)。

(215・216) は石鏃である。いずれも遺構面精査時に採集されたもので、遺構に伴うものではない。(215) は平基式打製石鏃である。サヌカイト製の完形品で風化は少ない。(216) も平基式打製石鏃である。サヌカイト製で調整加工は粗い。また風化が進んでおり、剥離面の鋭さは失われている。未製品の可能性も否定できない。また新しい欠損が多く、遺存状況は不良である。裏面の一部にポジティブな大剥離面が見られる。いずれも弥生時代のものと考えられる。この他にもサヌカイトチップが12点出土した。出土位置別の内訳は、竪穴住居１・２・５が各１点、竪穴住居４が２点、溝１が１点、溝２・12が各２点、遺構面精査・表面採集各１点となっており、特定の位置・遺構には集中していない。

③ 瓦

瓦は計３点図化した（第56図-218～220)。この他にも数点の平瓦が出土しているが、いずれも調査区南端の不明遺構１（SX-01）の上面からの出土である。また、(220) と比較するための参考資料として、仲村廃寺出土軒丸瓦（安藤文良氏所蔵資料）の実測図を併せて掲載した。(218) は平瓦である。接合はできなかったが、同一個体と思われる破片が他に３片出土している。遺存状態は不良で、四方いずれの箇所も欠損している。凸面は二方向からの平行タタキが施されている。まず縦方向の平行タタキのち、斜め方向のタタキが施されている。凹面は、１cmあたり８条の細かな布目痕が残存しているが、一部はナデ消しが行われている。須恵質だが焼成は不良で内外面は灰白色、断面はにぶい黄橙色を呈する。(219) は丸瓦である。遺存状態は不良で、狭端面および側端部の一部が残存しているに過ぎない。側端面は、ほぼ直線的に面取りがなされている。凸面は横方向のナデが丁寧に施されている。凹面は１cmあたり７条の細かな布目痕が残存している。焼成は良好で内外面・断面ともに褐灰色を呈する。(220) は十六葉素弁蓮華紋軒丸瓦である。瓦当部の外縁側から弁の端側１／３程度までしか残存していない。丸瓦部とは接合面で剥離している。焼成は良好堅緻で、瓦当面は青灰色、凸面および断面は、灰色を呈する。間弁に笵傷がわずかに確認できる。この軒丸瓦は、参考資料としてあげた仲村廃寺出土のものと同笵と推測され、両遺跡との密接な関係が予想できる。この資料は瓦当の１／４程度が残存している。中房は残存していない。瓦当上面には笵型から抜き出した痕跡が確認できる。裏面には丸瓦部との接合時のキザミ目、粘土充填もみられる。なお、丸瓦部は全く残存していない。(218～220) はいずれも７世紀中葉～後半頃と推測される。

不明遺構１

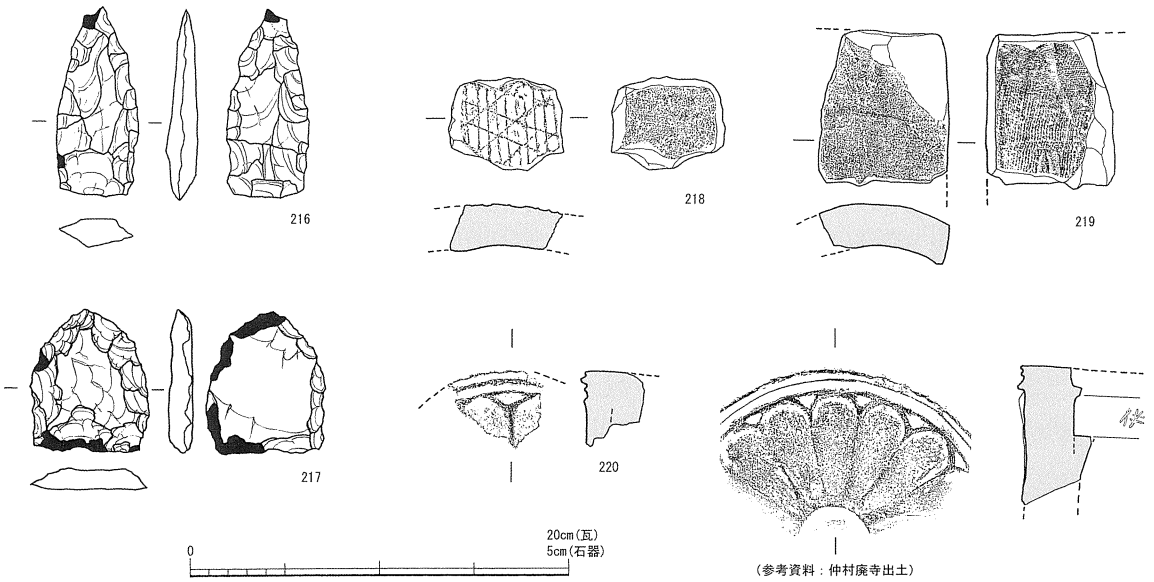
186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214

不明遺構２

215

0 20cm

第55図　不明遺構出土遺物実測図（１：４）



第56図　石器・瓦実測図（石器１：１，瓦１：４）

第１表　遺物観察表①

番号	遺構名	層位名	器種名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調 外面	色調 内面	色調 断面	調整 外面	調整 内面	胎土		焼成	備考
1	SH02	床面	須恵器　坏Ａ　蓋	(12.50)	(4.55)		60	5YR6/1　褐灰	10YR8/2　灰白	2.5Y8/1　灰白	天頂部：回転ヘラケズリ(ロクロ右)、回転ナデ	回転ナデ、天頂部：一定方向ナデ	密	直径１㎜の砂粒を若干含む	不良	
2	SH02	床面	須恵器　坏Ａ　蓋	(11.20)	(3.65)	―	20	5Y4/1　灰	5Y6/1　灰	5Y6/1　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を多く含む	不良	
3	SH02	北西区　畦	須恵器　坏Ａ　身	―	(3.20)	―	口縁10	N6/　灰	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好	TK209
4	SH02	北西区　床面	須恵器　坏Ａ　身	―	―	―	受部10	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の黒色粒を含む	良好	
5	SH02	南西区床面	須恵器　坏Ａ　身	―	―	―	口縁10	5Y6/1　灰	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１～２㎜の黒色粒を少量含む	やや不良	TK217
6	SH02	床面遺物	須恵器　坏Ａ　身	(13.20)	―		20	N8/　灰白	N8/　灰白	N8/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密		良好	TK217
7	SH02	床面	須恵器　坏Ｃ　身	―	―	―	高台10	5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	回転ナデ	回転ナデ	やや粗	直径１～２㎜の黒色粒を多く含む	良好	7世紀末？
8	SH02	竈内	土師質　土玉	直径0.8	厚み0.6	穿孔径0.1	100	2.5Y3/1　黒褐	2.5Y3/1　黒褐		ナデ	ナデ	密		良好	
9	SH02	竈内	土師器　甑	―	―	―	胴部把手	7.5YR7/6　橙	2.5YR6/6　橙	5YR6/6　橙	ナデ	ナデ	やや粗	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	良好	
10	SH04	焼土坑内　埋土	須恵器　坏Ｂ　身	―	―	―	―	N5/　灰	N5/　灰	5P5/1　紫灰	回転ナデ	回転ナデ	密		良好堅緻	
11	SH04	竈東側焼土塊焼土	須恵器　台付壺	―	―	(10.70)	脚部20	N7/　灰白	N8/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好	
12	SH04	北東区　床面	土師器　甕	―	―	―	口縁	7.5YR4/1　褐灰	5YR5/4　にぶい赤褐	7.5YR4/1　褐灰	横ナデ	横ナデ	密	直径１ mm 以下の白色粒を少量含む	良好	
13	SH05	南西区床面	須恵器　坏Ａ　身	―	―	―	口縁10	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を少量含む	良好	TK217
14	SH05焼土坑	焼土坑上層　床面レベル	須恵器　坏Ａ　身	(11.80)	―	―	10	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密		良好	TK217
15	SH05	１区	須恵器　坏Ａ　蓋	(12.00)	―	―	―	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ、天頂部：回転ヘラケズリ	回転ナデ	密		良好	
16	SH05	６区	須恵器　坏Ｂ　身	―	―	―	―	N6/　灰	N5/　灰	N5/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１ mm 以下の白色粒を若干含む	良好	
17	SH05	焼土坑　埋土中下層	須恵器　坏Ａ　身	―	―	(5.70)	底部	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	底部：ヘラ切り未調整	回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を含む	良好堅緻	ヒダスキの跡有り
18	SH05		須恵器　坏Ｂ　身	―	―	―	―	N5/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好堅緻	
19	SH05	北西区床面精査	須恵器　甕	22.40	(4.00)	―	口縁10	N6/　灰	5Y7/1　灰白	N7/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を少量含む	良好	
20	SH05焼土坑	埋土中　下層	土師器　甕	(15.00)	―	―	口縁10	10R6/4　にぶい赤橙	10R4/2　灰赤	10R2/3 極暗赤褐	口縁部：横ナデ、体部：ナデ？	口縁部：横ナデ、体部：板ナデ？	やや粗	直径１～２㎜の白色粒を含む	良好	表面摩滅しており調整不明瞭　二次焼成有
21	SH05	焼土坑　埋土中下層	土師器　甕	―	―	―	口縁	5YR5/6　明赤褐	5YR5/6　明赤褐	5YR5/6　明赤褐	横ナデ	横ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	良好	
22	SH05	北西区 床面　床面精査	土師器？	―	―	―	口縁	5YR7/8　橙	5YR7/8　橙	5YR7/8　橙	横ナデ	ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を含む	良好	
23	SH08	埋土中	土師器　甕	―	―	―	―	10YR7/4　にぶい黄橙	7.5YR5/4　にぶい褐	7.5YR5/4　にぶい褐	口縁端部：横ナデ	口縁端部：横ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を含む	良好	
24	SH08	埋土中	土師器　甕	―	―	―	把手100	10YR6/3　にぶい黄橙	10YR5/1　褐灰	10YR5/1　褐灰	ナデ、指オサエ	ナデ	やや粗	直径１～３㎜の白色粒を多く含む	良好	
25	SH08	床面	須恵器　坏Ａ　身	12.80	3.60	―	80	10Y8/1　灰白	10Y8/1　灰白		回転ナデ、底部：回転ヘラケズリ(左回り)	回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を少量含む	やや不良	ヘラケズリ雑
26	SH08	埋土中	須恵器　坏Ａ　身	(16.00)	―	―	口縁20	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を少量含む	良好	TK217
27	SH08	埋土中	須恵器　高坏	―	―	(10.00)	脚端部30	5Y6/1　灰	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の黒色粒を多く含む	良好	
28	SH09	床面	須恵器　高坏	―	(脚部 3.60)	(脚部 9.40)	20	2.5GY7/1 明オリーブ灰	2.5GY7/1 明オリーブ灰	2.5GY7/1 明オリーブ灰	脚部：回転ナデ、坏脚接合部：貼付ナデ	坏部･見込み部：一方ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を多く含む	良好堅緻	
29	SH09	床面	須恵器　坏Ａ　身	(13.00)	3.30	―	15	5G5/1　緑灰	7.5Y5/1　灰	5RP6/1　紫灰	回転ナデ、底部：ヘラケズリ(左回り、ロクロは右)	回転ナデ、見込み部：一方ナデ	密	直径１～３㎜の白色粒を含む	良好堅緻	TK209　ヘラケズリ丁寧

第２表　遺物観察表②

番号	遺構名	層位名	器種名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調			調整		胎土		焼成	備考
								外面	内面	断面	外面	内面				
30	SH09	北西端部　埋土上層	須恵器　坏Ｃ　蓋	―	―	―	―	N6/1　灰	N7/1　灰白	N7/1　灰白	天頂部：回転ヘラケズリ、つまみ：貼付ナデ	見込み部：回転ナデ、多方向のナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好	7世紀後半
31	SH09	北西端部　埋土上層	須恵器　坏Ｃ　蓋	―	―	―	―	7.5Y5/1　灰	10Y6/1　灰	7.5YR4/2　灰褐	つまみ：貼付ナデ	見込み部：ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	やや不良	7世紀末～8世紀前半
32	SD01	埋土中	須恵器　坏Ａ　蓋	11.00	5.80	―	80	N7/　灰白	N6/　灰		回転ナデ、天頂部：回転ヘラケズリ(雑)	回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	良好	ヘラケズリ雑
33	SD01	埋土上層	須恵器　坏Ａ　身	(9.80)	―	―	15	2.5GY6/1 オリーブ灰	10Y6/1　灰	10Y6/1　灰	回転ナデ、底部：回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	直径１～３㎜の白色粒を少量含む	良好	
34	SD01	埋土中	須恵器　坏Ｂ　蓋	(12.00)	―	―	20	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	回転ナデ、頂部：ヘラケズリ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を少量含む	やや不良	
35	SD01	埋土中	須恵器　坏Ｂ　蓋	(11.80)	―	(かえり径10.00)	15	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	回転ナデ、天頂部：回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	やや不良	7世紀後半
36	SD01	埋土中	須恵器　坏BorC 蓋	(かえり径8.90)(最大径12.00)	―	―	15	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ、天頂部：回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を少量含む 直径１㎜以下の黒色粒を多く含む	良好	復元口径より坏Ｂと考えられるがかえりの幅が広いため坏Ｃの可能性も有
37	SD01	埋土中	須恵器　坏BorC 蓋	(かえり径10.20)(最大径12.90)	―	―	―	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の黒色粒を含む	やや不良	復元口径からすると坏Ｂになるが、かえりの幅が広いため坏Ｃになる可能性有
38	SD01	東拡張区　埋土	須恵器　坏Ｂ　身	(9.80)	4.10	―	50	7.5Y6/1　灰	7.5Y6/1　灰	7.5Y7/1　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	不良	粘土ヒモ痕有
39	SD01	埋土中	須恵器　坏Ｂ　身	10.60	3.90		75	N6/　灰	N7/　灰	N7/　灰	回転ナデ、底部：ヘラ切り未調整	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を多く含む	やや不良	作りが雑　7世紀中葉
40	SD01	埋土中	須恵器　坏Ｂ　身	(11.40)	―	―	―	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の黒色粒を含む	やや不良	
41	SD01	畦2	須恵器　坏Ｂ　身	(10.00)	―	―	10	N6/　灰	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好	
42	SD01	埋土中	須恵器　坏Ｂ　身	12.50	4.40	―	60	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ、底部：回転ヘラケズリ(左回り)	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を含む	良好	
43	SD01	埋土中	須恵器　坏Ｂ　身	(12.90)	―	―	12	2.5GY7/1 明オリーブ灰	2.5GY7/1 明オリーブ灰	2.5GY7/1 明オリーブ灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	不良	
44	SD01	埋土中	須恵器　坏Ｂ　身	10.80	4.00	8.10	40	5Y7/1　灰白	N7/　灰白		回転ナデ、底部：回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好	7世紀中葉～後半体部底部から直に立ち上がる
45	SD01	埋土中	須恵器　坏Ｂ　身	(15.00)	―	―	口縁部	5Y6/1　灰	5Y6/1　灰	5Y6/1　灰	回転ナデ	回転ナデ	やや粗	直径１㎜前後の白色粒を少量含む	不良	
46	SD01	埋土中	須恵器　坏Ｂ　身	(17.00)	3.30	―	25	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ、底部：回転ヘラケズリ(左回り)	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を多く含む	良好	
47	SD01	埋土上層	須恵器　坏Ｃ　蓋	―	―	―	―	7.5Y8/1　灰白	7.5Y8/1　灰白	7.5Y8/1　灰白	天頂部：つまみ貼付ナデ	見込み部：回転ナデ	密	直径１㎜以下の黒色粒を多く含む	良好	7世紀末～8世紀初頭
48	SD01	畦2除去時	須恵器　坏Ｃ　蓋	―	―	―	つまみ100	2.5Y7/1　灰白	2.5Y7/1　灰白	2.5Y7/1　灰白	天頂部：つまみ貼付ナデ	見込み部：回転ナデ	密	直径１㎜前後の黒色粒を含む	良好	
49	SD01	SH01南	須恵器　坏Ｃ　蓋	(15.90)	―	―	10	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を若干含む	良好堅緻	
50	SD01	埋土中	須恵器　坏Ｃ　蓋	16.10	3.20	―	80	N6/　灰	N6/　灰		回転ナデ、天頂部：回転ヘラケズリ(左回り)、つまみ：貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を少量含む	良好堅緻	
51	SD01	埋土中	須恵器　坏Ｃ　蓋	14.00	2.30	―	80	N7/　灰白	N7/　灰白		回転ナデ、天頂部　ヘラケズリ(左回り)、つまみ：貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の黒色粒を含む	良好	
52	SD01	埋土中	須恵器　坏Ｃ　身	13.20	5.80	8.20	60	N7/　灰白	N7/　灰白		回転ナデ、底部　回転ヘラケズリ、高台貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を少量含む	やや不良	
53	SD01	埋土中	須恵器　坏Ｃ　身	11.60	5.70	7.00	40	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ、底部：回転ヘラケズリ、高台：貼付ナデ	回転ナデ、見込み部：一方ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を多く含む	良好	高台しっかりしている 7世紀中葉～後半
54	SD01	埋土中	須恵器　坏Ｃ　身	―	(3.60)	10.10	40	N6/　灰	7.5Y8/1　灰白	7.5Y8/1　灰白	回転ナデ、底部：回転ヘラケズリ、高台貼付ナデ	回転ナデ、見込み部：ナデ	密	直径１～３㎜の白色粒を含む 直径１㎜前後の黒色粒を含む	不良	７世紀末

第３表　遺物観察表③

番号	遺構名	層位名	器種名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調			調整		胎土		焼成	備考
								外面	内面	断面	外面	内面				
55	SD01	埋土中	須恵器　坏C　身	―	―	(10.00)	底部25	N7/　灰白	N8/　灰白	N8/　灰白	底部：回転ヘラケズリ、高台：貼付ナデ	底部：回転ナデ、一方ナデ	やや粗	直径１㎜前後の白色粒を多く含む	不良	
56	SD01	SH01南北畦 埋土中	須恵器　坏C　身	―	―	9.20	底部60	N6/　灰	N5/　灰	N6/　灰	底部：ヘラ切り未調整	底部：回転ナデ、一方ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を含む	良好堅緻	
57	SD01	埋土中	須恵器　坏C　身	―	―	(10.00)	―	7.5Y7/1　灰白	7.5Y8/1　灰白		底部、高台：貼付けナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の黒色粒を多く含む	不良	
58	SD01	除去時	須恵器　坏C　身	―	―	8.20	―	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	底部：回転ヘラケズリ、高台：貼付ナデ	見込み部：回転ナデ、一方ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を多く含む	良好	7世紀後半～末
59	SD01	埋土中	須恵器　坏C　身	(13.50)	4.30	7.80	50	7.5Y8/1　灰白	2.5Y8/3　淡黄		回転ナデ、底部：回転ヘラケズリ、高台：貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１～２㎜の黒色粒を多く含む	不良	
60	SD01	埋土上層	須恵器　坏C　身	13.90	4.00	―	95	N7/　灰白	N7/　灰白		回転ナデ、底部：回転ヘラケズリ(左回り)、高台貼付	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を多く含む	良好	7世紀末～8世紀初頭 高台内側に付く
61	SD01	埋土中	須恵器　坏C　身	(15.30)	4.40	10.00	50	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ、底部：回転ヘラケズリ、高台貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を少量含む	良好	7世紀末～8世紀初頭
62	SD01	埋土中	須恵器　高坏	―	―	―	―	7.5YR6/1　褐灰	N5/　灰	5YR6/3　にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	良好堅緻	7世紀前半
63	SD01	埋土中	須恵器　高坏	―	―	5.40	底部10	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ	脚端部　回転ナデ、脚部しぼり	密	直径１㎜以下の黒色粒を少量含む	良好	
64	SD01	埋土中	須恵器　高坏	―	―	(7.60)	脚部80	10YR7/4　にぶい黄橙	2.5YR8/4　淡黄	7.5YR6/6　橙	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	不良	
65	SD01	埋土	須恵器　高坏	―	(脚部4.00)	脚部9.70	脚部90	5Y7/1　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ、坏・脚部：貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を多く含む	良好	
66	SD01	埋土中	須恵器　高坏	―	―	―	―	N6/　灰	N7/　灰白	表面2.5Y4/2灰赤、中N7/　灰白	回転ナデ、坏部・脚部・接合部：貼付ナデ	回転ナデ、坏部･見込み部：一方ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を少量含む	良好堅緻	
67	SD01	埋土中	須恵器　高坏	―	―	―	脚部40	N6/1　灰	N6/1　灰	N6/1　灰	脚部：回転ナデ	脚部　回転ナデ、天頂部：ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を多く含む	良好	
68	SD01	埋土	須恵器　高坏	―	―	(8.00)	50	N6/1　灰	N6/1　灰	N6/1　灰	回転ナデ、底部：回転ヘラケズリ、脚部：貼付ナデ	回転ナデ、坏部･見込み部：一方ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を多く含む	不良	図上復元
69	SD01	埋土中	須恵器　高坏？	―	―	―	―	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	回転ナデ、脚部：三方透かし	回転ナデ、坏部･見込み部：ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を少量含む	良好	
70	SD01	埋土中	須恵器　鉢	(15.90)	―	―	口縁15	7.5Y6/1　灰	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	回転ナデ	回転ナデ	粗	直径１～３㎜の白色粒を多く含む	不良	7世紀後半
71	SD01	埋土中	須恵器　鉢	(17.30)	―	―	口縁～体部	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	やや不良	
72	SD01	埋土中	須恵器　鉢	(17.00)	―	―	―	2.5GY8/1　灰白	2.5GY8/1　灰白	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１～２㎜の黒色粒を少量含む	不良	7世紀後半
73	SD01	埋土中	須恵器　鉢	(17.20)	8.90	―	―	N5/　灰	N7/　灰白		回転ナデ、底部：手持ちケズリ	回転ナデ	密	直径１～３㎜の白色粒を含む	不良	
74	SD01	埋土中	須恵器　壺	胴部最大16.00	―	―	頸部70 体部50	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を若干含む	良好	頸部～肩部に自然釉付着
75	SD01	畦2	須恵器　台付盤	―	―	(9.00)	底部25	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	底部　回転ヘラケズリ(左回り)、高台：貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を若干含む	良好	
76	SD01	埋土中	須恵器　平瓶	(7.90)	―	―	頸部40	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ、口縁～頸部：沈線一条有	回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	良好堅緻	
77	SD01	埋土中	須恵器　平瓶	7.10	―	―	口縁部70	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	回転ナデ、頸部：一条沈線	回転ナデ	密	直径１㎜以下の黒色粒を含む	良好	
78	SD01	埋土中	須恵器　台付壺	―	―	10.50	底部60	7.5Y7/1　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	底部：回転ヘラケズリ、胴部：回転ナデ	回転ナデ	やや粗	直径１㎜以下の白色粒を多く含む	やや不良	
79	SD01	埋土中	須恵器　甕	(11.80)	―	―	頸部40	5BG5/1　青灰	5BG5/1　青灰	5BG5/1　青灰	口縁～頸部　回転ナデ	口縁～頸部：回転ナデ、体部：同心円当て具痕	密	直径１㎜以下の白色粒を含む	良好堅緻	
80	SD01	埋土中	須恵器　甕	(18.60)	―	―	口縁	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を含む	良好堅緻	
81	SD01	埋土中	須恵器　甕	(22.60)	―	―	頸部40	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ、肩部：カキメ	肩部：同心円叩き、ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を少量含む	良好堅緻	
82	SD01	SD01･02交点	須恵器　甕	17.80	(14.00)		口縁部90 体部20	2.5Y8/1　灰白	2.5Y8/1　灰白	2.5Y8/1　灰白	平行叩き(木目に直行)、横方向の指ナデ･板ナデ	当て具痕(同心円文)、部分的に板ナデ･指ナデによる横方向のスリ消し	密	直径１㎜前後の黒色粒を少量含む	良好	外面叩きは、体部上半は縦方向、体部中央はナナメ方向に入る
83	SD01	埋土中	土師器　甕	―	―	―	底部80	10YR6/3　にぶい黄橙	10YR7/3　にぶい黄橙	5YR6/1　灰	タタキ	ナデ	密	直径１～5mmの白色粒を含む	良好	

第４表　遺物観察表④

番号	遺構名	層位名	器種名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調			調整		胎土		焼成	備考
								外面	内面	断面	外面	内面				
84	SD01	SH01南北畦埋土中	土師器　甕	―	―	―	口縁	5YR5/6　明赤褐	7.5YR6/6　橙	5YR5/6　明赤褐	不明	口縁：横ナデ、体部：ケズリ？	やや粗	直径１～３㎜の白色粒を含む	良好	
85	SD01	埋土中	弥生土器　甕	21.80	―	―	口縁～頸部	7.5YR6/3　にぶい褐	7.5YR6/3　にぶい褐	10YR4/1　褐灰	不明	ナデ	やや粗	直径１～３㎜の白色粒を多く含む	良好	
86	SD01	埋土中	土師器　甕	(22.60)	―	―	口縁部20	5YR5/6　明赤褐	7.5YR6/4　にぶい橙	5YR5/6　明赤褐	横ナデ	横ナデ	やや粗	直径１～4mm の白色粒を多く含む	良好	
87	SD01	埋土中	土師質　イイダコ壺	―	―	―	吊手部	5YR5/6　明赤褐	5YR5/6　明赤褐	5YR5/6　明赤褐	ナデ	ナデ	やや粗	直径１～３㎜の白色粒を多く含む	良好	
88	SD01	SH01南北畦埋土中	土師器　煮炊具	―	―	―	把手	5YR6/6　橙	5YR6/6　橙	5YR6/6　橙	ナデ	ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を多く含む	良好	
89	SD01	埋土中	土師器　甕	(17.60)	―	―	―	10YR7/4　にぶい黄橙	10YR5/2　灰黄褐	10YR7/4　にぶい黄橙	口縁部：横ナデ	口縁部：横ナデ	やや粗	直径１㎜前後の白色粒を多く含む	やや不良	
90	SD01	埋土中	土師器　竈		炊口高			10YR7/4　にぶい黄橙	7.5YR7/3　にぶい橙	10YR7/4　にぶい黄橙	ナデ	ナデ	密		良好	
91	SD02	畦4より南埋土上層	須恵器　坏Ａ　蓋	(12.00)	―	―	―	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	回転ナデ、底部：回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を多く含む	不良	
92	SD02	―	須恵器　坏Ａ　蓋	―	―	―	10	N6/　灰	N6/　灰	N7/　灰白	天頂部：回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を多く含む	良好	TK209？
93	SD02	―	須恵器　坏Ａ　蓋	(14.60)	3.90	―	30	N6/　灰	N7/　灰白	7.5R6/2　灰赤	回転ナデ、底部：回転ヘラケズリ(左回り)、ケズリ	回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	良好堅緻	TK217
94	SD02	埋土上層	須恵器　坏Ａ　蓋	15.50	3.40	―	20	N6/　灰	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ、天頂部：回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	直径１～３㎜の白色粒を多く含む	良好	TK217
95	SD02	埋土上層	須恵器　坏Ａ　蓋	(15.80)	―	―	15	7.5Y5/1　灰	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ、天頂部：回転ヘラケズリ(左回り)	回転ナデ	密	直径１～３㎜の白色粒を多く含む	良好	TK217
96	SD02	畦1除去時	須恵器　坏Ａ　身	(12.00)	―	―	―	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	やや不良	
97	SD02	埋土上層	須恵器　坏Ａ　身	(12.00)	3.80	―	50	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ、底部：回転ヘラケズリ(左回り)	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を少量含む	良好	TK217
98	SD02	埋土中	須恵器　坏Ａ　身	(13.40)	―	―	5	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を少量含む	良好堅緻	TK43
99	SD02	埋土上層	須恵器　坏Ａ　身	15.00	6.60	16.10	ほぼ完形	N5/　灰	N5/　灰	N8/　灰白	回転ナデ、底部：ヘラ切り未調整	回転ナデ、見込み部：一方ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を若干含む	良好堅緻	焼け歪みが著しい TK209～217
100	SD02	埋土上層	須恵器　坏Ａ　身	―	―	―	底部	N5/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を含む	良好	TK209
101	SD02	畦6　埋土中	須恵器　坏Ａ　身	―	―	―	口縁	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の黒色粒を含む	良好	
102	SD02	埋土上層	須恵器　高坏？　蓋	―	―	―	25	N7/　灰白	N7/　灰白	N6/　灰	天頂部：回転ヘラケズリ(左回り)、つまみ:貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好堅緻	つまみの形状に特徴有り
103	SD02	南側拡張区埋土中	須恵器　坏Ｃ　蓋	(15.00)	―	―	―	N8/　灰白	N8/　灰白	N8/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を含む	やや不良	
104	SD02	南側拡張区埋土中	須恵器　坏Ｃ　蓋	(15.40)	―	―	―	5Y7/1　灰白	5Y7/1　灰白	5Y7/1　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	不良	
105	SD02	南側拡張区埋土中	須恵器　坏Ｂ　身	(11.20)	―	―	―	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ、底部：ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好堅緻	
106	SD02	埋土	須恵器　坏Ｂ　身	(14.60)	―	―	5	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を含む	良好	
107	SD02	南側拡張区埋土中	須恵器　坏Ｃ　身	―	―	(12.80)	―	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ、底部：回転ヘラケズリ、高台：貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好	
108	SD02	埋土上層	須恵器　鴟	(7.20)	―	―	体部40	N8/　灰白	N8/　灰白	N8/　灰白	回転ナデ、体部～底部：回転ヘラケズリ、底部：手持ちケズリ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の黒色粒を少量含む	良好	沈線三条
109	SD02	埋土上層	土師器　甑？	―	―	―	口縁	5YR6/6　橙	5YR6/6　橙	5YR6/6　橙	横ナデ	板ナデもしくはヘラケズリ	密	直径１㎜以下の黒色粒を多く含む	良好	粘土ヒモ痕有
110	SD02	埋土上層	弥生土器？　高坏	―	―	―	脚部80	7.5YR8/6　浅黄橙	7.5YR8/6　浅黄橙	7.5YR8/6　浅黄橙	ナデ	ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	やや不良	
111	SD02	埋土上層	弥生土器？　壺		―	―	口縁～頸部	10YR8/3　浅黄橙	10YR7/3　にぶい黄橙	10YR4/1　褐灰	横ナデ	―	密	直径１㎜以下の赤色粒を多く含む	良好	粘土ヒモ痕有
112	SD02	畦2～3間南寄り	弥生土器　壺	―	―	(7.80)	底部	7.5Y5/3　にぶい褐	10YR6/4　にぶい黄橙	10YR4/1　褐灰	ナデ	ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を多く含む	良好	

第５表　遺物観察表⑤

番号	遺構名	層位名	器種名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調 外面	色調 内面	色調 断面	調整 外面	調整 内面	胎土		焼成	備考
113	SD02	埋土上層	土師器　煮炊具	―	―	―	把手	2.5YR5/6　明赤褐	2.5YR5/6　明赤褐	2.5YR5/6　明赤褐	ナデ	ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を多く含む	良好	
114	SD02	埋土上層	土師器　甕	(23.50)	―	―	頸部20	2.5YR6/6　橙	2.5YR6/6　橙	2.5YR6/6　橙	ハケ	板ナデ、ケズリ	密	直径１㎜以下の白色粒を多く含む	良好	
115	SD02	埋土上層	土師質　鞴　羽口	外径　6.5～8.1　通風口径　2.4～2.8		―	先端部	7.5YR6/4　にぶい橙	5YR6/6　橙	被熱部　5PB6/1　青灰	ナデ	―	密	直径１㎜以下の白色粒を多く含む	良好	二次焼成 先端付着物有
116	SD02	埋土中	土師器　皿	(12.40)	―	―	―	5YR6/6　橙	5Y4/1　灰	7.5YR7/6　橙	ナデ	ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を少量含む	良好	中世？　土師皿か？
117	SD02	埋土中	青磁　埦	―	―	―	10	10Y6/2　オリーブ灰	2.5GY6/1　オリーブ灰	10Y8/1　灰白	―	―	密	直径１㎜以下の白色粒を少量含む	良好	
118	SD03	埋土中	弥生土器　壺	―	―	―	10	7.5YR6/4　にぶい橙	7.5YR6/4　にぶい橙	7.5YR6/4　にぶい橙	横ナデ	横ナデ	やや粗	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	良好	口縁端部凹線三条
119	SD03	埋土中	須恵器　台付壺	―	―	―	脚端部15	5Y7/1　灰白	2.5Y7/1　灰白	2.5Y7/1　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１～３㎜の白色粒を含む	良好	
120	SD03	埋土中	弥生土器　壺	―	―	―	口縁10	7.5YR6/4　にぶい橙	7.5YR6/4　にぶい橙	2.5Y6/1　黄灰	ミガキ、横ナデ	横ナデ	やや粗	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	良好	
121	SD04	埋土中	弥生土器　壺	―	―	―	10	10YR6/3　にぶい黄橙	5YR6/6　橙	2.5Y6/1　黄灰	横ナデ	横ナデ	やや粗	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	良好	口縁端部凹線四条　後期？
122	SD04	埋土中	弥生土器　壺	(17.00)	―	―	口縁	5YR5/6　明赤褐	5YR5/6　明赤褐	5YR5/6　明赤褐	横ナデ	横ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を含む	良好	凹線文
123	SD06	埋土中	土師器？　甕	―	―	―	口縁	7.5YR6/6　橙	7.5YR6/6　橙	7.5YR6/6　橙	横ナデ	横ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好	
124	SD06	埋土中	弥生土器　甕	―	―	―	口縁10	7.5YR6/4　にぶい橙	7.5YR6/4　にぶい橙	10YR6/1　褐灰	横ナデ	横ナデ	やや粗	直径１～３㎜の白色粒を多く含む	良好	弥生中期？
125	SD06	埋土中	弥生土器　壺	―	―	―	口縁10	7.5YR7/4　にぶい橙	2.5Y5/1　黄灰	2.5Y5/1　黄灰	横ナデ	横ナデ、縦方向のナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を多く含む	良好	
126	SD06	埋土中	弥生土器　壺	―	―	―	10	7.5YR6/3　にぶい褐	10YR5/2　灰黄褐	10YR5/1　褐灰	横ナデ	横ナデ	粗	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	やや不良	口縁端部凹線三条
127	SD06	埋土中	弥生土器　高坏	―	―	―	10	2.5YR5/6　明赤褐	2.5YR6/6　橙	10R5/6　赤	ナデ	ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を多く含む	やや不良	弥生中期？
128	SD06	埋土中	弥生　甕	―	―	―	口縁	2.5Y3/1　黒褐	2.5Y4/1　黄灰	2.5Y3/1　黒褐	横ナデ	横ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を多く含む	良好	凹線文
129	SD12	埋土中	須恵器　坏Ｂ　蓋	(9.40)	―	(12.00)	5	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好	
130	SD12	埋土中	須恵器　坏Ｃ　蓋	―	―	―	―	7.5Y5/1　灰	7.5Y5/1　灰	7.5Y6/1　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を含む	不良	かえり無
131	SD12	埋土中	須恵器　坏Ｃ　蓋	(16.80)	―	―	―	2.5GY7/1　明オリーブ灰	2.5GY7/1　明オリーブ灰	2.5GY7/1　明オリーブ灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	不良	
132	SD12	埋土中	須恵器　坏Ｃ　蓋	(17.70)	―	―	20	7.5Y6/1　灰	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	回転ナデ、天頂部：回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を含む	やや不良	
133	SD12	埋土中	須恵器　坏Ｃ　身	―	―	(9.60)	―	N5/　灰	N5/　灰	N5/　灰	底部：回転ヘラケズリ、高台：貼付ナデ	見込み部：回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	良好	
134	SD12	埋土中	須恵器　台付壺	―	―	(13.90)	―	N7/　灰白	N7/　灰白	N5/　灰	底部：回転ヘラケズリ、高台貼付ナデ	見込み部：回転ナデ、多方向のナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好	
135	SD12	埋土中	須恵器　小形台付壺	(11.00)	―	(9.00)	口縁部30、底部40	7.5Y6/1　灰	N8/　灰白	N8/　灰白	回転ナデ、底部・高台：貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の黒色粒を多く含む	良好堅緻	
136	SD12	埋土中	須恵器　円面硯	(硯部　12.20) (海部径　14.00) (最大径　15.70)	―	―	―	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ、脚部：貼付ナデ		密	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	良好	透かし9ヶ所
137	SD12	埋土中	須恵器　甕	(19.00)	―	―	口縁10	N5/　灰	N6/　灰	2.5YR6/1　赤灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を若干含む	良好	
138	SD12	床面遺物？	土師器　甕	(19.00)	―	―	口縁20	2.5YR5/4　にぶい赤褐	2.5YR5/4　にぶい赤褐	2.5YR5/4　にぶい赤褐	横ナデ、指オサエ	横ナデ	粗	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	やや不良	

第６表　遺物観察表⑥

番号	遺構名	層位名	器種名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調			調整		胎土		焼成	備考
								外面	内面	断面	外面	内面				
139	SD13	埋土中	須恵器　坏Ａ　身	—	—	—	—	N6/　灰	N6/　灰	N5/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の黒色粒を含む	良好	
140	SD13	埋土中	須恵器　坏Ａ　身	(12.00)	—	—	—	7/5Y7/1　灰白	N8/　灰白	N8/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の黒色粒を多く含む	やや不良	外面ヘラ工具？の痕有
141	SD13	埋土中撹乱部	須恵器　坏Ａ　身	(12.50)	—	(受部径14.00)(最大径15.00)	—	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好	TK217
142	SD13	埋土中	須恵器　坏Ａ　身	(14.00)	—	—	—	N6/　灰	N7/　灰白	2.5YR5/1　赤灰	回転ナデ、底部：回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の黒色粒を含む	良好	
143	SD13	埋土中	須恵器　高坏	—	(脚部5.20)	(脚部8.3)	脚部70	N5/　灰	N5/　灰	5RP5/1　紫灰	回転ナデ、坏･脚部：貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を含む	良好堅緻	
144	SD13	埋土中撹乱部	須恵器　坏Ｃ　身	—	—	—	高台10	2.5Y7/1　灰白	2.5Y7/2　灰黄	2.5Y7/1　灰白	不明	不明	やや粗	直径１～２㎜の白色粒･石英を多く含む	不良	
145	SD13	埋土中	須恵器　坏Ｃ　身	—	—	(10.40)	底部20	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	底部：回転ヘラケズリ、高台：貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の黒色粒を含む	やや不良	8世紀代か？
146	SD13	埋土中	須恵器　甕	(22.80)	—	—	—	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	口縁～頸部：回転ナデ	口縁～頸部：回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を若干含む	良好	
147	SD14	埋土中	須恵器　坏Ｃ　身	—	—	(10.30)	底部10	5Y7/1　灰白	5Y7/1　灰白	N7/　灰白	底部：ヘラ切り、回転ナデ	回転ナデ	やや粗	直径１～３㎜の白色粒を含む	やや不良	
148	SD15	SD02より東土中	土師質　イイダコ壺	—	—	—	吊手部	7.5YR5/4　にぶい褐	7.5YR5/4　にぶい褐	7.5YR5/4　にぶい褐	ナデ	ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	良好	
149	SD16	埋土中	須恵器　坏Ｃ　蓋	(17.50)	2.40	つまみ径3.0､高0.8	50	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ､天頂部:回転ヘラケズリ､つまみ：貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１～３㎜の白色粒を含む	やや不良	かえり無
150	SD16	埋土中	須恵器　坏Ｃ　蓋	(17.00)	—	—	—	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を含む	良好堅緻	
151	SD16	埋土中	須恵器　坏Ｃ　蓋	(16.80)	—	—	15	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	回転ナデ、天頂部：回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を多く含む	不良	
152	SD16	埋土中	須恵器　坏Ｃ　蓋	(16.20)	—	—	20	5Y7/1　灰白	5Y7/1　灰白	5Y7/1　灰白	回転ナデ、天頂部：回転ヘラケズリ(左回り)	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を含む	不良	
153	SD16	埋土中	須恵器　坏Ｃ　蓋	—	—	—	口縁	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好堅緻	かえり無
154	SD16	埋土中	須恵器　台付壺	—	—	—	高台10	5Y6/1　灰	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の黒色粒を多く含む	良好堅緻	高台内自然釉かぶる
155	SD16	埋土中	須恵器　坏Ｃ　身	—	—	(7.10)	—	7.5Y6/1　灰	5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	底部：回転ヘラケズリ、高台貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の黒色粒を含む	やや不良	台付壺の可能性有
156	SD16	埋土中	—	—	—	(9.00)	底部15	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	底部　回転ヘラケズリ、高台：貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の黒色粒を多く含む	不良	
157	SD16	埋土中	須恵器　坏Ｃ　身	—	—	—	高台15	N7/　灰白	N7/　灰白	5R4/1　暗赤灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の黒色粒を多く含む	良好	
158	SD16	埋土中	須恵器　坏Ｃ　身	(14.20)	(4.00)	(8.60)	10	N6/　灰	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を含む	良好	8世紀前半？
159	SD16	埋土中	須恵器　台付壺	—	—	(9.40)		N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ、底部・高台：貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を少量含む	良好堅緻	
160	SD16	埋土中	須恵器　坏Ｂ　身	(12.00)	—	—	—	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を少量含む	良好	
161	SD16	埋土中	須恵器　坏Ｂ　身	(11.95)	—	—	—	2.5GY5/1　オリーブ灰	2.5GY6/1　オリーブ灰	2.5GY6/1　オリーブ灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を若干含む	良好	坏Ａ　蓋の可能性有
162	SD16	埋土中	須恵器　坏Ｃ　身	12.90	3.40	—	20	N7/　灰白	N7/　灰白	5RP4/1　暗紫灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１～２㎜の黒色粒を多く含む	やや不良	
163	SD16	埋土中	土師器　甕	—	—	—	口縁	10YR7/6　明黄褐	7.5Y8/1　灰白	10YR8/6　黄橙	横ナデ	横ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を含む	不良	
164	SD16	埋土中	須恵器　鉢？	—	—	—	口縁～体部	N5/　灰	N5/　灰	N5/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の礫を含む	良好堅緻	
165	SD17	埋土中	須恵器　坏Ａ　身	(11.00)	—	—	20	5Y7/1　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ、底部：ヘラ切り、ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の黒色粒を多く含む	良好	
166	SD17	埋土中	土師器　甕(把手)	—	—	—	—	10YR8/2　灰白	10YR7/2　にぶい黄橙	10YR5/1　褐灰	指ナデ、指オサエ	—	粗	直径１～３㎜の白色粒･黒色粒を多く含む	やや不良	7世紀？

第７表　遺物観察表⑦

番号	遺構名	層位名	器種名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調			調整		胎土		焼成	備考
								外面	内面	断面	外面	内面				
167	SD19	埋土中	須恵器　坏C　蓋	―	―	(つまみ径2.8)	―	N7/　灰白	N7/　灰白	N7/　灰白	つまみ、ナデ	天頂部：ナデ	密		やや不良	
168	SD19	埋土中	須恵器　坏C　蓋	―	―	―	―	N5/1　灰	7.5Y6/1　灰	N5/1　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好堅緻	かえり無
169	SD19	埋土中	須恵器　坏C　蓋	(17.20)	―	―	10	7.5Y8/1　灰白	7.5Y8/1　灰白	7.5Y8/1　灰白	回転ナデ、天頂部：回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	不良	
170	SD19	埋土中	須恵器　台付壺	―	―	―	(脚部10)	7.5Y6/1　灰	5Y7/1　灰白	2.5Y7/1　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	良好	
171	SK01	埋土中	土師器　高坏	―	―	―	脚部(接合部)100	2.5Y7/1　灰白	10YR7/2　にぶい黄橙	7.5YR7/4　にぶい橙	横ナデ	ナデ、指オサエ	やや粗	直径１㎜前後の白色粒を若干含む	やや不良	
172	SK01	埋土中	土師器　台付坏	―	―	(16.00)	(脚部10)	5YR6/6　橙	7.5YR7/4　にぶい橙	5YR6/6　橙	ナデ	ナデ	密	直径１～３㎜の白色粒を少量含む	やや不良	
173	SK01	埋土中	土師器　鍋	―	―	―	(脚部のみ)	7.5YR5/4　にぶい褐	―	2.5Y7/1　灰白	ナデ、指オサエ	―	粗	直径１～３㎜の白色粒を多く含む	良好	
174	SK02	埋土中	須恵器　坏B　身	(11.40)	―	―	15	7.5Y6/1　灰	7.5Y7/1　灰白	7.5Y6/1　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を少量含む	やや不良	
175	SK02	埋土中	須恵器　坏BorC身	(14.00)	―	―	―	N5/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を少量含む	良好	
176	SK02	埋土中	須恵器　坏C　身	―	―	(9.60)	25	7.5Y7/1　灰白	N7/　灰白		回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を含む	良好	
177	SK02	埋土中	須恵器　台付壺	―	―	(19.80)	―	N6/　灰	N7/　灰白	N5/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密		良好	
178	SK02	埋土中	須恵器　小形埦？	―	―	―	―	N5/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密		良好	
179	SK02	埋土中	須恵器　長頸壺	―	―	―	頸部30	5Y5/1　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を多く含む	良好	
180	SK02	埋土中	須恵器　甕	―	―	―	口縁10	7.5Y7/1　灰白	7.5Y6/1　灰	7.5YR6/1　褐灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１ mm 以下の白色粒を含む	良好	
181	SK02	埋土中	土師器　鉢	―	―	―	口縁10	2.5YR4/8　赤褐	2.5YR4/8　赤褐	2.5YR4/8　赤褐	ナデ？	ナデ？	粗	直径１～２㎜の石英・長石を多く含む	やや不良	
182	SP69	埋土中下層	須恵器　甕	(29.40)	―	―	口縁15	N4/　灰	N4/　灰	5Y8/2　灰白	回転ナデ、胴部：タタキ	回転ナデ、胴部：一部指オサエ	やや粗	直径１㎜以下の白色粒を多く含む	不良	
181	SP85	埋土中	須恵器　坏A　身	―	―	―	口縁10	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	密	直径１～３㎜の白色粒を含む	良好	TK217(新)
184	SP120	埋土中	須恵器　坏C　身	―	―	―	―	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好	
185	SP140	埋土中	須恵器　坏A　身	―	―	―	口縁10	N5/　灰	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好堅緻	TK217(新)
186	SX01	埋土中	須恵器　坏A　蓋	(14.60)	4.30	―	70	2.5Y8/3　淡黄	2.5Y8/1　灰白		回転ナデ、底部：ヘラケズリ(雑)	回転ナデ、見込み部：ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を含む	不良	粘土ヒモの単位見える
187	SX01畦2除去時		須恵器　坏C　身		―	―	口縁	N6/　灰	N6/　灰	N7/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を少量含む	良好	
188	SX01	埋土中	須恵器　坏B　身	(10,0)	―	―	―	N5/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密		良好	
189	SX01	埋土中	須恵器　坏B　身	―	―	―	―	5B4/1　暗青灰	5B4/1　暗青灰	5B4/1　暗青灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を少量含む	良好堅緻	
190	SX01畦3周辺	埋土中	須恵器　坏B　身	―	―	―	口縁10	7.5Y8/1　灰白	7.5Y8/1　灰白	7.5Y8/1　灰白	回転ナデ	回転ナデ	やや粗	直径１㎜前後の褐色粒を多く含む	不良	
191	SX01畦3西側	埋土中	須恵器　坏C　身	―	―	―	口縁10	5Y6/1　灰	5Y7/1　灰白	5Y7/1　灰白	回転ナデ	回転ナデ	やや粗	直径１㎜前後の白色粒を少量含む	やや不良	飛鳥Ⅱ
192	SX01	埋土中	須恵器　高坏	―	―	―	―	5B5/1　青灰	5B5/1　青灰	表面　7.5YR5/3 にぶい褐　中心 7.5Y7/1　灰白	脚部：回転ナデ	脚部：しぼり目	密	直径１㎜以下の白色粒を少量含む	良好	
193	SX01	畦3西側埋土中	須恵器	―	―	11.00	―	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の黒色粒を含む	良好	
194	SX01	畦3西側埋土中	須恵器　坏C　身	―	―	(8.40)	―	7.5Y6/1　灰	N7/　灰白	N5/　灰	底部：回転ヘラケズリ、高台：貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を若干含む	良好	台付壺の可能性有
195	SX01	埋土中	須恵器　坏B　蓋	(10.30)	―	(最大径12.20)	―	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好	

第８表　遺物観察表⑧

番号	遺構名	層位名	器種名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調 外面	色調 内面	色調 断面	調整 外面	調整 内面	胎土		焼成	備考
196	SX01	埋土中	須恵器　坏Ｃ　蓋	—	—	—	—	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好	
197	SX01	埋土中	須恵器　坏Ｃ　蓋	—	—	—	—	7.5Y6/1　灰	7.5Y6/1　灰	7.5Y6/1　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	やや不良	
198	SX01	埋土中	須恵器　坏Ｃ　蓋	(16.00)	—	—	—	7.5Y6/1　灰	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	回転ナデ、天頂部：ヘラ切り	回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を少量含む	やや不良	
199	SX01	畦３周辺埋土中	須恵器　坏Ｃ　身	—	—	(8.60)	—	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	底部：回転ヘラケズリ、高台：貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を少量含む	不良	
200	SX01	埋土中	須恵器　坏Ｃ　身	—	—	(9.00)	高台35	2.5Y7/1　灰白	2.5Y7/1　灰白	2.5Y7/1　灰白	回転ナデ	回転ナデ	やや粗	直径１～３㎜の白色粒・石英を多く含む	不良	
201	SX01	埋土中	須恵器　坏Ｃ　身	—	—	(11.00)	高台25	2.5Y7/1　灰白	2.5Y7/2　灰黄	2.5Y7/1　灰白	回転ナデ	回転ナデ？	やや粗	直径１～２㎜の白色粒を含む	不良	
202	SX01	埋土中	須恵器　坏Ｃ　身	—	—	(9.80)	高台15	N6/　灰	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好	
203	SX01	埋土	須恵器　坏Ｃ　身	—	—	(11.00)	—	N5/　灰	N6/　灰	N5/　灰	底部：回転ヘラケズリ、高台：貼付ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を含む	良好	
204	SX01畦３周辺	埋土中	須恵器　坏Ｃ　身	(14.80)	4.15	(10.60)	40	N6/　灰	N6/　灰	7.5Y6/1　灰	回転ナデ、底部：回転ヘラケズリ(左回り)、高台：貼付ナデ	回転ナデ、見込み部：不定方向ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を含む	良好	7世紀末～8世紀初頭
205	SX01畦３周辺	埋土中	須恵器　壺	5.90	—	—	口縁70	N6/　灰	N6/　灰	7.5YR6/1　褐灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を少量含む	良好堅緻	
206	SX01	畦3西側埋土中	須恵器　壺	(13.60)	(6.10)	(頸部 10.7)	頸部40	7.5Y7/1　灰白	7.5Y6/1　灰	2.5YR5/1　赤灰	頸部：回転ナデ	頸部：回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を含む	良好	
207	SX01畦３西側	埋土中	須恵器　甕	(15.60)	—	—	口縁15	10YR7/3　にぶい黄橙	2.5Y7/1　灰白	5Y7/1　灰白	回転ナデ？	回転ナデ？	やや粗	直径１～３㎜の白色粒・石英を多く含む	不良	調整不明瞭
208	SX01	畦3東側埋土中	須恵器　甕	(16.00)	—	—	口縁～頸部15	N6/　灰	N6/　灰	N6/　灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜前後の白色粒を含む	良好	
209	SX01畦３西側	埋土中	須恵器　甕	—	—	—	口縁10	2.5Y7/1　灰白	2.5Y7/1　灰白	2.5Y7/1　灰白	回転ナデ	回転ナデ	やや粗	直径１㎜以下の石英を多く含む	やや不良	
210	SX01	埋土中	須恵器　甕	—	—	—	口縁10	5Y6/1　灰	N6/　灰	5YR5/1　褐灰	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	良好堅緻	
211	SX01畦３西側	埋土中	須恵器　壺	—	—	—	口縁10	N6/　灰	N6/　灰	7.5Y7/1　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１～２㎜の白色粒を含む	良好	
212	SX01	埋土中	須恵器　高坏	—	—	(23.00)	脚端部10	N6/　灰	N7/　灰白	N7/　灰白	回転ナデ	回転ナデ	密	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	良好	甕口縁の可能性有
213	SX01	畦3東側埋土中	須恵器　甕	(26.00)	—	—	口縁～頸部15	口縁　N3/暗灰　体部 7.5Y7/1　灰白	口縁　N7/灰白　体部 N4/　灰	N7/　灰白	口縁～頸部：回転ナデ、体部：平行叩き、カキメ	口縁～頸部：回転ナデ、体部：同心円当て具痕	密	直径１～２㎜の白色粒を多く含む	良好	
214	SX01	埋土中	須恵器　甕	(19.20)	—	—	口縁～肩部	5Y8/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	口縁～頸部：回転ナデ、肩部：平行叩き、カキメ	同心円当て具痕	密	直径１～２㎜の白色粒を少量含む	やや不良	
215	SX22南側拡張区		須恵器　台付埦	—	—	—	—	7.5Y7/1　灰白	5Y6/1　灰	7.5Y7/1　灰白	回転ナデ	回転ナデ	やや粗	直径１㎜以下の白色粒を若干含む	やや不良	

番号	遺構名	層位名	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	先端角(°)	残存率(%)	色調	備考
216	遺構面精査		平基式打製石鏃	2.52	1.09	0.42	53	95	N5/　灰	弥生時代
217	遺構面精査		平基式打製石鏃	1.91	1.60	0.32	102	90	N5/　灰	弥生時代、未製品の可能性有

番号	遺構名	層位名	種別	直径(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	残存率(%)	色調 凹面・瓦当面	色調 凸面	色調 断面	調整 凹面	調整 凸面	胎土		焼成	備考
218	SX01	上面	平瓦	—	(4.90)	(6.20)	2.15	10以下	7.5Y7/1　灰白	7.5Y7/1　灰白	10YR6/3　にぶい黄橙	布目・ナデ消し	平行タタキ	密	直径1mm以下の白色粒を少量含む	不良	
219	SX01	上面	丸瓦	—	(8.30)	(6.80)	2.2	10以下	10YR6/1　褐灰	10YR6/1　褐灰	10YR6/1　褐灰	布目	横ナデ	やや粗	直径1～3mm の白色粒を少量含む	良好	
220	SX01	上面	十六葉素弁蓮華文軒丸瓦	不明	—	—	(3.35)	瓦当10以下	5PB5/1　青灰	N4/　灰	N4/　灰	—	—	密	直径1mm以下の白色粒を若干含む	良好堅緻	仲村廃寺と同范
参考資料	仲村廃寺	採集遺物	十六葉素弁蓮華文軒丸瓦	(18.20)	—	—	(3.60)	瓦当25	—	—	—	—	—	密	直径1mm以下の白色粒を若干含む	良好	安藤文良氏所蔵

第４章　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
辻　康男・高橋　敦・斉藤紀行・辻本裕也

第１節　はじめに

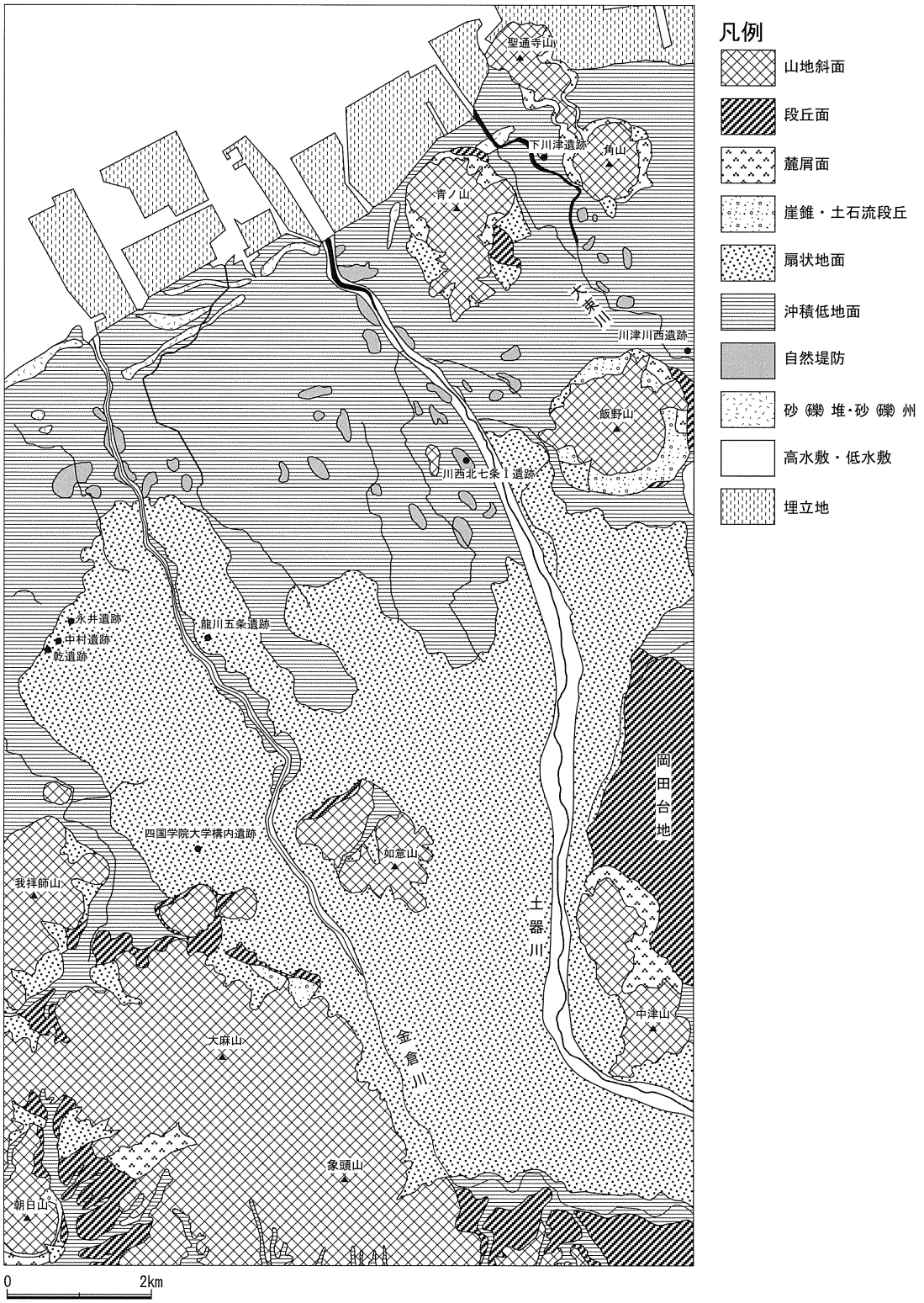
本報告では、竪穴住居跡などの遺構から検出された炭化物および土坑内に存在していた動物遺存体の同定と溝内から出土したフイゴ羽口の付着物に関する自然科学分析結果について述べる。今回の分析では、現地調査を実施しており、調査区を構成する堆積層について地形学・堆積学的な観点からの記載を行っている。本報告では、現地調査結果から推定される調査区内における遺跡形成過程についても合わせて報告する。

第２節　遺跡周辺に分布する地質・地形

四国学院大学構内遺跡は、金倉川および土器川が形成した沖積扇状地上に立地している（第57図）。この沖積扇状地は、満濃町木ノ崎を扇頂として、丸亀市飯野町および金倉町付近に扇端部が形成されている。金倉川流域の扇端部に位置する金蔵寺、金倉町付近には、湧水が認められている（国土地理院地理調査部1986）。

本遺跡が立地する扇状地周辺では、領家花崗岩類を主体とした基盤岩とする山地斜面と岡田台地と呼称される段丘面が分布している（国土地理院地理調査部1986、長谷川・斎藤1989）。山地斜面を構成する領家花崗岩類からは、K-Ar法およびRb-Sr法により白亜紀に相当する8000万年前後の年代値が得られている（沓掛1991）。本遺跡の西側には、大麻山・我拝師山が存在している。花崗岩類からなるこれらの山地の山頂部には、新第三紀中新世の讃岐層群を構成する安山岩がキャップロックとして分布している。本地域に分布する讃岐層群からは、1100～1400万年前のK-Ar年代およびフィショントラック年代が得られている（長谷川・斎藤1989）。讃岐層群を構成する安山岩は、非常に緻密で堅く侵食に対する抵抗力が強い性質を持っている。そのため、安山岩のキャップロックを持つ山地では、差別侵食が起こり、山頂部に平坦面が形成される。この平坦面の下部には、ひだの少ない直線型を呈す急斜面が存在している（国土地理院地理調査部1986）。キャップロックを欠き花崗岩類のみからなる山地では、安山岩のキャップロックを有する山地に比べ、高度が低く、侵食の程度を示す谷密度や谷幅も大きく開析が進んでいる（国土地理院地理調査部1986）。四国学院大学構内遺跡周辺では、このような特徴を持つ山地として如意山が挙げられる。

本遺跡が立地する平野部では、近年、四国横断自動車道建設に伴う発掘調査によって、金倉川および土器川流域の沖積扇状地扇央～扇端部付近における扇状地構成層の年代や層序に関するデータが蓄積されてきている。森下（1988）は、C14年代測定値およびテフラ層序から、土器川と金倉川に挟まれた扇状地帯でAT火山灰層および後期旧石器後半の石器を含む層準が地表面近くに存在しているのに対し、金倉川流域の龍川五条や永井遺跡周辺では、これらの堆積層が地下深くに埋没していることを明らかにした森下（1988）の研究成果は、金倉川および土器川流域の沖積扇状地が離水時期の異なるいくつかの地形面で構成されていることを示しており、重要な知見と認識



第57図　地形分類図（国土地理院地理調査部1986より作成）

される。なお、金倉川・土器川流域の沖積扇状地については、空中写真の判読による地形面の区分を行い、さらに詳細な検討を今後進めていきたいと考えている。

第３節　層序

現地調査時には、調査区内の４ヶ所において深掘トレンチを掘削し、遺構検出面以下に存在する堆積物の観察を行った（第62図）。深掘トレンチでは、遺構検出面より下位約２ｍまでの堆積物累重様式を観察することが出来た。現地では、深掘トレンチおよび調査区側壁を構成する堆積層断面についての写真記録をとるとともに、堆積状況のスケッチや柱状図の作成を行った。第58図に示した柱状図は、堆積層の層理や累重様式と発掘調査結果に基づいて互いに対比を行ったものである。各柱状図の位置については、第59図に記載している。

調査区内で確認された堆積層は、①～④層に層序区分される。各層の堆積相から推定される堆積環境については、（Miall 1996）の河成堆積相コードや（松田1999・2000）、人為的な擾乱堆積物の層相については、（松田1996）の記載を参考とした。以下に各堆積層の特徴について述べていく。

①層：赤褐色を呈し、砂礫層からなる現在の盛土。

②層：灰白色～オリーブ灰色を呈するシルト質砂。４～５層程度の単層によって構成されている。本層準は、人為的に擾乱された塊状をなす堆積層で構成されている。堆積層の大半は、旧陸軍騎兵隊時代の盛土によって構成される。最下部には、層相から耕作土と推定される16世紀代を下限年代とする遺物を包含する堆積層が存在している。

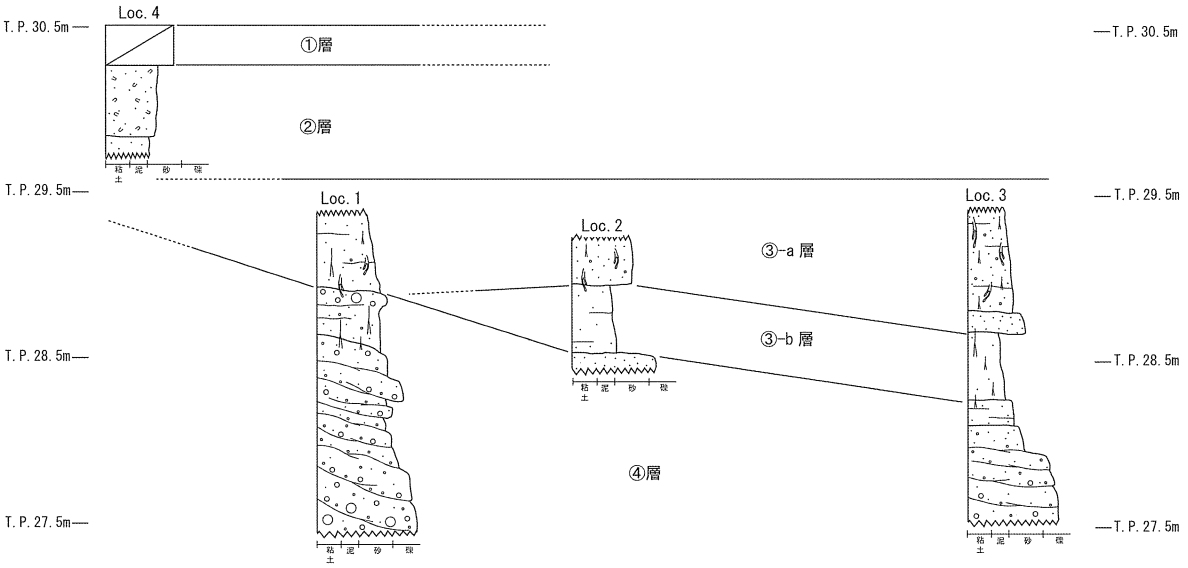
③層：黄褐色を呈し、塊状ないし水平葉理をなす砂質シルト～シルト混じりの細粒砂～中粒砂。岩相から、③-ａと③-ｂ層の堆積層に区分される。③-ａ層は、水平葉理をなし中粒砂～極粗粒砂からなる。③-ｂ層は、水平葉理をなす砂質シルト～シルト質砂で構成される。これらの堆積層は、層相からともに氾濫堆積物であると判断される。堆積層内には、木本ないし草本植物の根に由来すると思われる生痕が多く観察される。

④層：灰黄色を呈しトラフ型斜交層理をなす中礫～細粒の大礫。層相から、流路充填堆積物であると推定される。クラストサポートをなしており、礫間を充填する基質は粗粒砂～細礫で構成される。

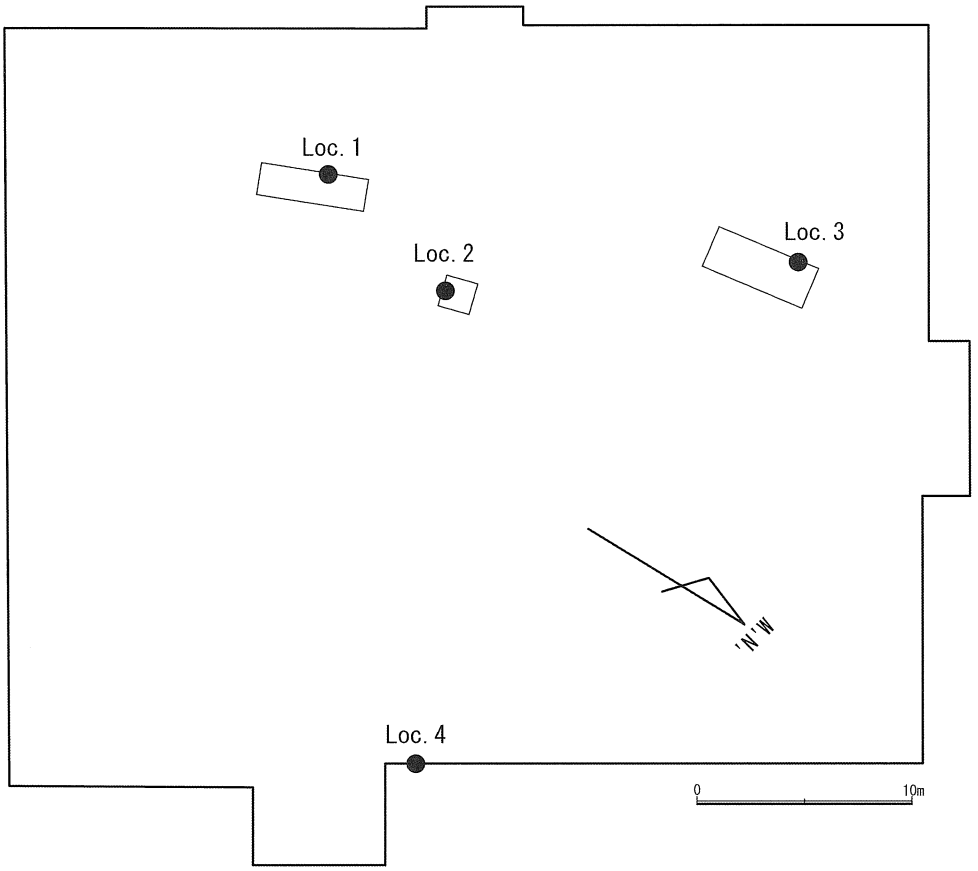
第４節　試料

①　炭化材

試料は、竪穴住居跡等から出土した炭化材18点（第２表　炭-1・2・5～8・10～13・15～17・20・25・40・45・60）である。各試料中には、複数の炭化材が入っている場合があり、試料の状態や接合の有無等を確認した上で合計88点を抽出した。



第58図　調査地の層序



第59図　柱状図位置図

② 動物遺存体

試料は土坑内から検出された。遺構からは、本試料のみが単体で検出されている。

③ フイゴ羽口の付着物

フイゴの羽口には緑灰色を呈する融解物が付着していた。この材質に関する情報を得ることを目的として、蛍光X線分析による元素定性を行った。

第5節 分析方法

① 樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

② 動物遺存体同定

ルーペを用いて形態的特徴を監察して種類を同定する。なお、同定は金子浩昌氏にお願いした。

③ 蛍光X線分析

蛍光X線分析は、羽口先端部の緑灰色溶融部における特異元素を判別するために、素地部についても同時に測定を実施し、対比スペクトルとした。測定方法を以下に示す。

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ（株）製：SEA2120L）を用い、励起電圧50kVの条件でスペクトル測定を実施した。なお、本装置における検出可能元素は$_{11}$Na～$_{92}$Uの元素である。スペクトル測定における装置条件を第9表に記す。

第9表 測定条件

スペクトル名	A（緑灰色溶融部）	B（赤褐色素地部）
測定装置	SEA2120L	SEA2120L
測定時間（秒）	300	300
有効時間（秒）	225	220
試料室雰囲気	真空	真空
コリメータ	φ10.0 mm	φ10.0 mm
励起電圧（kV）	50	50
管電流（μA）	7	7
フィルタ	OFF	OFF
マイラー	OFF	OFF

第6節 分析結果

分析結果の解釈については、次章で述べている。そのため本章では、分析結果の詳細は図表類に示し、文章中では簡潔に示すのみとしている。

第10表　樹種同定結果

試料番号	遺構名	採　取　位　置	点数	樹　　種
炭-1	SH-01	北側焼土坑炭化物	2	広葉樹(2)
炭-2	SH-01	北東区東西畦炭化物	1	広葉樹(1)
炭-5	SH-02	焼土上層炭化物（床面より上）	2	コナラ属コナラ亜属クヌギ節(2)
炭-6	SH-02	カマド炭化物	6	コナラ属コナラ亜属コナラ節(1)
				不明(5)
炭-7	SH-02	カマド炭化物	3	コナラ属(1)
				広葉樹(2)
炭-8	SH-02	カマド内炭化物	5	コナラ属コナラ亜属クヌギ節(5)
炭-10	SH-04	カマド焼土坑炭化物	2	コナラ属コナラ亜属クヌギ節(1)
				樹皮(1)
				コナラ属(1)
炭-11	SH-04	カマド東側焼土塊炭化物	7	シャシャンボ(5)
				広葉樹(1)
炭-12	SH-04	焼土坑１炭化物	5	広葉樹(5)
炭-13	SH-04	焼土坑２炭化物	1	広葉樹(1)
炭-15	SH-05	焼土坑上層炭化物（床面レベル）	24	コナラ属コナラ亜属コナラ節(4)
				不明(20)
炭-16	SH-05	焼土坑下層炭化物	9	コナラ属コナラ亜属コナラ節(1)
				アワブキ属(8)
炭-17	SH-05	焼土坑下層炭化物（第二層）	2	コナラ属コナラ亜属クヌギ節(2)
炭-20	SH-06	南東区床面精査炭化物	1	コナラ属コナラ亜属クヌギ節(1)
炭-25	SH-08, 09	壁面８層炭化物	3	コナラ属アカガシ亜属(3)
炭-40	SD-02	埋土上層炭化物	5	コナラ属コナラ亜属クヌギ節(5)
炭-45	SD-03	埋土中炭化物	1	不明(1)
炭-60	SP-137	埋土中炭化物	9	マツ属複維管束亜属(9)

①　樹種同定

樹種同定結果を第10表に示す。炭化材は全体的に保存状態が悪く、樹種の同定に至らない試料が39点あった。それらについては、観察できた範囲での結果を記し、木材組織が全く観察できなかった試料については不明とした。その他の炭化材49点は、針葉樹１種類（マツ属複維管束亜属）と広葉樹６種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・コナラ属・アワブキ属・シャシャンボ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・マツ属複維管束亜属（***Pinus* subgen. *Diploxylon***）　マツ科

軸方向組織は仮道管と樹脂道で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。放射組織は、仮道管、柔細胞、樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。放射柔細胞と軸方向の仮道管との分野壁孔は窓状となり、通常１分野に１個。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、１～15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（***Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris***）　ブナ科

試料は全て年輪界で割れており、早材部の大部分を欠く。道管径が同属のアカガシ亜属に比較

して小さいことと、晩材部に向かって道管径を減じることから環孔材とわかる。道管は漸減しながら単独で放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（***Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus***）　ブナ科

試料は年輪界で割れており、早材部の大部分を欠く。大道管の一部が僅かに残っていることから環孔材とわかる。道管は、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属（***Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis***）　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属（***Quercus***）　ブナ科

試料はいずれも小片で、放射組織と道管の一部が残存するのみで、道管配列の様子は不明。放射組織に複合放射組織が認められることから、コナラ属またはブナ属とわかる。このうち、ブナ属は散孔材で、観察された道管よりも小径となることから、上記コナラ属のいずれかである。

・アワブキ属（***Meliosma***）　アワブキ科

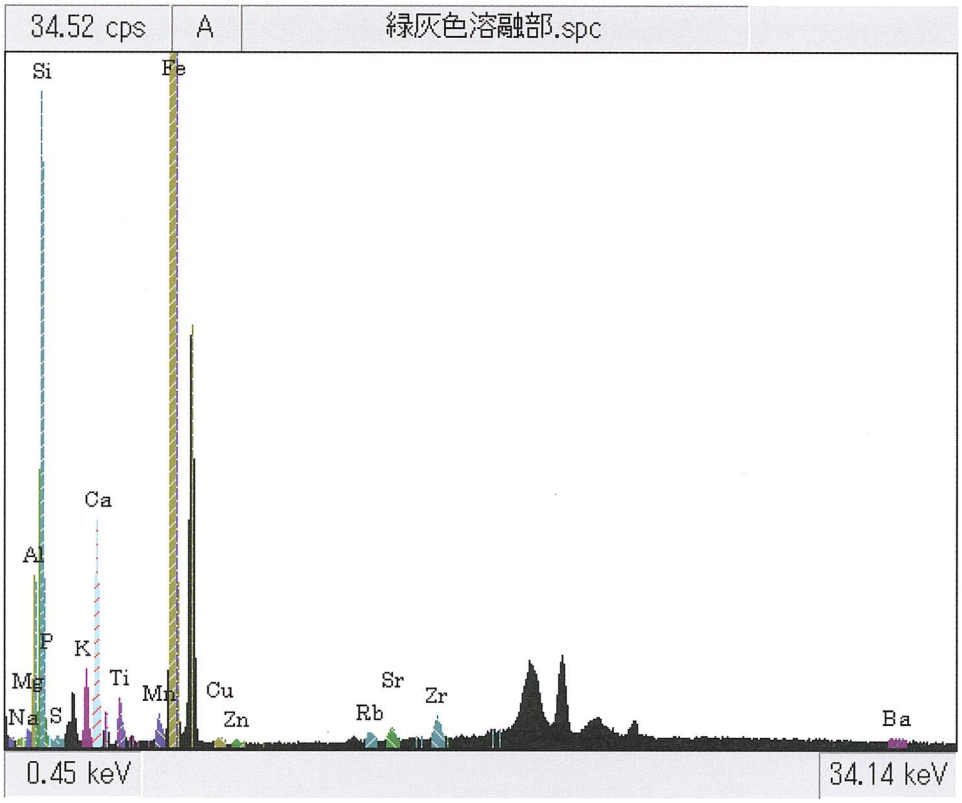
散孔材で、管孔は単独または２～６個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、階段穿孔の段数は５前後で少ない。壁孔は交互状に配列する。放射組織は大型で、異性Ⅱ型、１～３細胞幅、１～50細胞高。

・シャシャンボ（***Vaccinium bracteatum* Thunb.**）　ツツジ科スノキ属

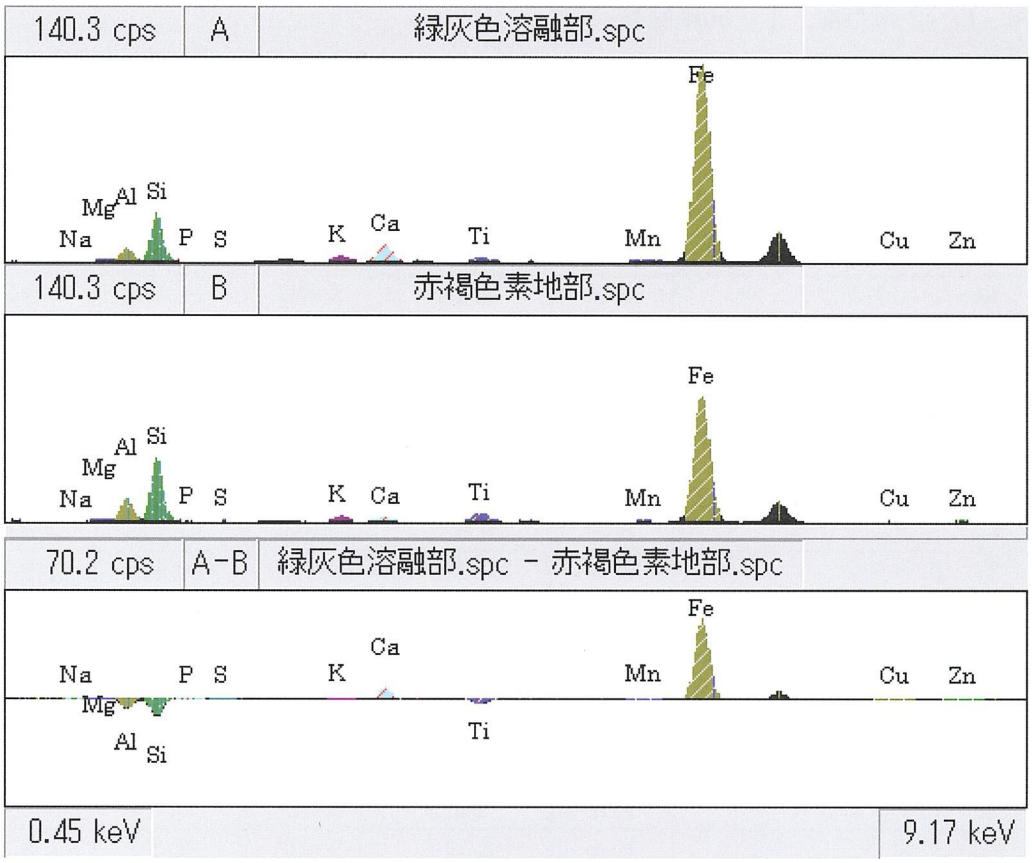
散孔材で、道管はほぼ単独で年輪界一様に散在する。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔お

第11表　緑灰色溶融部、赤褐色素地部（Ａ、Ｂスペクトル）の検出元素と積分強度(cps)

Z	元素	元　素　名	ライン	A(cps)	B(cps)	A－B(cps)	ROI(keV)
11	Na	ナトリウム	Kα	4.288	5.347	-1.059	0.94- 1.14
12	Mg	マグネシウム	Kα	7.548	8.124	-0.576	1.15- 1.36
13	Al	アルミニウム	Kα	50.83	90.546	-39.717	1.38- 1.59
14	Si	ケイ素	Kα	184.62	257.584	-72.964	1.63- 1.85
16	S	硫黄	Kα	5.483	5.892	-0.409	2.19- 2.42
19	K	カリウム	Kα	27.961	24.74	3.221	3.19- 3.44
20	Ca	カルシウム	Kα	76.982	19.544	57.439	3.56- 3.82
22	Ti	チタン	Kα	20.231	43.902	-23.672	4.37- 4.65
26	Fe	鉄	Kα	1093.98	697.017	396.963	6.25- 6.55
30	Zn	亜鉛	Kα	5.53	9.523	-3.993	8.46- 8.80
37	Rb	ルビジウム	Kα	11.85	16.766	-4.916	13.17-13.58
56	Ba	バリウム	Kα	13.411	19.916	-6.505	31.76-32.36
15	P	リン	Kα	6.419	7.563	-1.143	1.90- 2.13
25	Mn	マンガン	Kα	16.3	9.572	6.728	5.75- 6.05
29	Cu	銅	Kα	6.719	9.037	-2.317	7.87- 8.21
38	Sr	ストロンチウム	Kα	15.455	19.817	-4.362	13.93-14.35
40	Zr	ジルコニウム	Kα	23.407	42.284	-18.877	15.53-15.96



第60図　緑灰色溶融部の定性スペクトル



第61図　緑灰色溶融部と赤褐色素地部のスペクトル対比

よび階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ型、単列で８細胞高前後のものと５～７細胞幅、30～60細胞高のものがある。放射組織には鞘細胞が認められる。

・広葉樹

道管要素が認められることから広葉樹材とわかる。道管配列の様子が観察できなかったため、種類の同定には至らない。

②　動物遺存体同定

動物遺体はウマの上顎臼歯に同定された。臼歯の中央部分を残すのみの破片である。全体のサイズが不明であるため、歯の部位決定は明確でない。全歯高不明であるが、残存部から、55.0㎜／M'として年齢を推定すると、６歳前後と考えられる。

③　蛍光Ｘ線分析

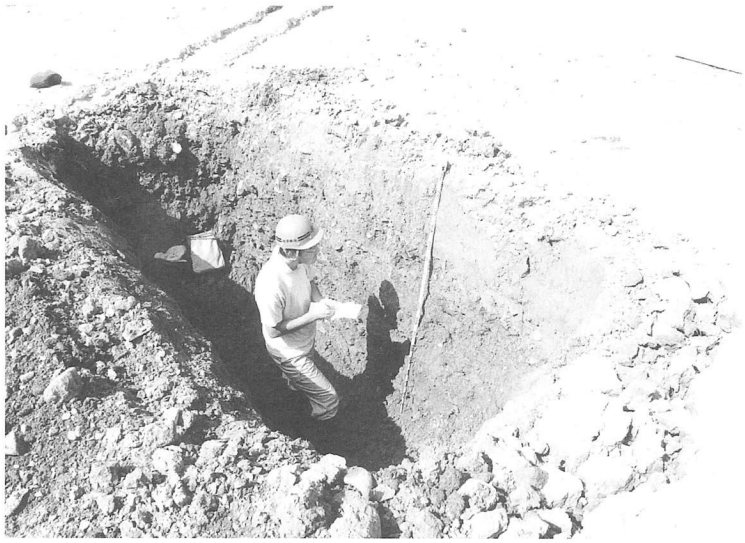
緑灰色溶融部の定性スペクトル図（Aスペクトル）を第59図、緑灰色溶融部、赤褐色素地部（Bスペクトル）におけるスペクトル対比図を第60図、各検出元素の積分強度（cps）を第11表に掲げた。

第７節　考察

①　遺跡形成過程について

遺構検出面より下位に存在する堆積層は、③、④層の２層に分類される（第59図）。これらの堆積層には、同時異相の関係が認められない。砂質シルト～シルト質砂からなる③層は、砂礫からなる④層の累重後に形成された堆積物である。流路充填堆積物と推定される④層は、上に凸の断面形をなして堆積している。凸部の頂部付近に相当する調査区の南西端では、遺構検出面上に④層が露出している。④層は側方への連続性が良いが、ほとんど上方細粒化を示さず、流路縁から河岸堆積物の発達が極めて悪い。このような特徴から、④層は当時、網状流路の河道形態をなして調査区内を流下していたことが推定される。

その後、調査区では④層が形成した凸部の低所を埋積して、氾濫堆積物と推定される③層が累重していく。この③層の埋積によって調査区は平坦化され、④層堆積後の形成されていた凹凸が消滅する。③と④層からは、遺物が検出されておらず、C14年代測定のための試料も採取出来なかった。そのため、③、④層ともに、その形成年代については不明である。但し③-ａ層最上部では、弥生時代と推定される遺構が検出されており、当該期頃にはすでに調査区周辺が離



第62図　深掘トレンチ調査風景